り、袖は涙の淵瀬となりて、うきは流れの身は捨小舟、せめて暫しはとまれかし。

おなじく

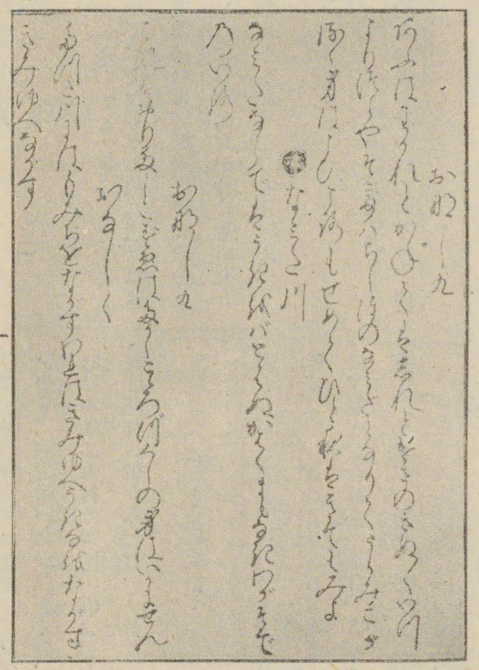
逢ふは別れと豫ては知れど、けさの後朝いつよりつらや、袖は干しほの涙となりて、恨みこがるる身は戀ごろも、せめてひと夜はきても見よ。

三十　なみだ川

涙ならでは憂きをばとはぬ、乾く間もなき我が袖の色。

おなじく

花は折りたし梢は高し、心づくしの身はいかにせん。



おなじく

立田川には紅葉を流す、われは君ゆゑ浮名を流す、君ゆゑながす。

おなじく

浮名たつ田の山路ゆけば、顏にもみぢがいよ散りかゝる、もみぢがちりかゝる。

卅一　しがまつち

恨みつわびつ、おもひを志賀の床の淋しさよ、つれなき人に見せたや、庭の柳の糸の風に靡きしを。

ちらし

さても優しの螢の虫や、忍ぶ曖の闇路を照らす、人の心も情あれ。

卅二　てまり

つるゝと出づる月を、松の枝でかくした、いざさらば切りても捨ちよやれ、松の枝の下えだ。

ちらし

とんと突きあげ、きりゝと廻りゝ、見てし人こそ床しけれ。

卅三　いつの夕

いつの夕べからやら、つい彼の人になづんで、只管に深きえにしも、かはる枕の起きふし、この里のならひかや徒らぐさの秋風さそふ色とて、移ろふ人の心や、というたら憂さを忘れうか、えいわいなゝ、というても性はなほらうか、跡をいふほど氣のどく。

卅四　さかづき

玉の盃底なきとても、とても契らば二世と結ばんゝ常陸帶、さてよい中。

おなじく

たとひ御げんは任かせぬとても、有りし馴染のゝ末はたがひの逢瀨川、さてよい中。

おなじく

後の朝に通はすふみの、よべの手枕けさはなかゝ、けさはなかゝ亂れ髪、結ふかひも。

卅五　くどき

二丁はげしき夏の夕べに着く船も、人目づつみのしんぞ螢も我が思ひ、こひと憂き身を、沖の鷗にかこちて氣の毒、うそも捨てられず。

おなじく

夕べ淋しき秋も半ばの通路、戀に朽ちなん袖の湊の捨小舟、月はもとより隅田川に流して、いざ言とはん都鳥。

おなじく

見しや玉簾うちぞゆかしき思ひ妻、ひくな唐猫綱に任せて追ひ風、薫るこゝろを、誰にかこちてゆふ暮、あだには聞かぬ浮名を。

おなじく

人のつらさに懲りぬ心のいつまで、憂きは玉の緒絶えぬばかりにくれ竹、いくよ伏見の、夢も流れてなみだ川、柵かけて堰かうよ。

おなじく

戀の初風身にしむ程ぞ懐かし、月は文月誰が通はしの文月、七の夕べを星も幾瀬の思ひ川、鵲橋を掛けうよ。

おなじく

袖に降りくるしぐれ立田の思ひ川、ぬれて紅葉の色も流れの果てしなや、何をうらみに絶えて契りの薄ごほり、なか〳〵戀は渡らじ。

おなじく

かはす手枕たえぬ逢ふ夜の中川、さはり浮橋かゝるつらさは誰ゆゑ、よしや流れに朽ちは果つとも一筋を、あだにはせまじ我が心。

おなじく

閨にとゞまり過ぎしその夜の睦言、おもひ亂れて獨り寢る身の憂さつらさ、つらき今宵は夢もなく〳〵泣き明す添ひ寢の枕なつかし。

おなじく

なんぼ惜みし昨日の花も徒に、けふはいつしかかはる習ひの戀ごろも、もはや垣根も雪かと見ゆる卯の花、なほ懐しきほとゝぎす。

二上り

一　和歌の浦

和歌の浦には名所がござる、一に權現二に玉津島、三に鹽がま四に妹背山、かたをなみこそ名所なれ、しやうがえ、いよわけよういうたな、のほん〳〵のほんえ、かうした譯よ、かたをなみこそ名所なれ。

おなじく

人は常とや移ろひやすき、露の假言をまことゝ思ひ、尋ね入らばや心の奥の、見えぬ色こそゆかしけれ、氣の毒、いよ譯よういうたな、見えぬいろこそゆかしけれ。

おなじく

吉野川には櫻を流す、龍田川には紅葉を流す、橋の上より文取り落し、水に二人の名を流す、しやうがえ、いよ譯よういうたな、のほん〳〵よほいほ、かうしたことの水に二人の名を流す、しやうがえ。

二　薩摩ぶし

親は他國に子は島原に、櫻ばなかやちりぐ〳〵に。

おなじく

空に鳴く音は皆うそどりよ、閨の内こそほとゝぎす。

おなじく

お江戸出てから戸塚は泊り、駒を早めて藤澤へ。

おなじく

美濃に妻もち尾張に住めば、雨は降らねどみの戀し。

三　ひよどり

ひよ〳〵と鳴くは鵯、小池に住むは鷺鷥、をしどりのしかも寡にあふやの留守もり、さらばえいやとな、なえいさらえい〳〵〳〵、えい〳〵〳〵〳〵、しかも月の夜か闇の夜に、えいさらえい。

おなじく

かず〳〵の宵の睦言、うらみに更くる東雲、しのゝめの涙ながらにもはや歸るさ、さらばえいやとな、えいさらえい〳〵、えい〳〵えい〳〵、しかも月の夜か闇の夜に、えいさらえい。

四　ちん〳〵ぶし

いく夜かさねて降り積む雪の、佐野の渡りに駒引きとめて、拂ひかねたる吹雪の霙まじりに降り來るを、かちひともえ、それは戀の夕ぐれ、色にこゞえて死のとも、せめて思ひを語りなば、はてそれまで。

おなじく

ならぬ戀ならやめたも增しよ、沖のちん〳〵千鳥が羽うち違への戀ごろも、さてよい中それが定よ、沖のちんちん千鳥がはねうち違への戀衣、さてよい仲。

おなじく

もはや曙わかれのつらさ、閨にことゝふ蟲の音たえばたえよ、玉の緒わが涙え。それは憂き人の、閨にことゝふ蟲の音絶えなばたえよ、玉の緒わが涙え。

おなじく

舟に召せ〳〵色有る里へ、波のよる〳〵たれまつち山、追手嵐の來ました、見附箱崎わけの里、舟めさぬか、それは仇しあだ波落ちて沈んで死のとも、引きはかへさじ二挺立ち、名は流さじ。

おなじく

待つに程なく今宵となりて、年にひと夜の逢瀬も絶えて、たのむかささぎ〳〵戀の湊の渡しもり、幾秋も、それはまたの織姫飽かぬ別れの名殘に、いとゞ袂は星合の空、きのどく。

五　さいこのぶし

佐渡とな、佐渡と越後はさいこのさ、いよ筋向ひ、それはえ、橋をな、はしをかけよやれさいこのさ〳〵、いよ船ばしを、それはえ。

おなじく

春は吉野に咲いたとさ〳〵、初花ざくら、それはえ。

おなじく

夏は雲井に鳴いたとさ〳〵、山ほとゝぎす、それはえ。

おなじく

秋は高尾に染めたとさ染むるとな、置く露しぐれ、それはえ。

おなじく

冬は霜夜の冴えたとさ冴ゆるとさ、鳴く友千鳥、それはえ。

六　さんさぶし

宵は月にもまぎれてすむが、更くる鐘には、さんさ袖しぼる、よしなの思ひ。

七　鹿兒島

こゝにはやらぬ鹿兒島にはやるにな、さ三十ふり袖四十島田な、ほいさ〳〵。

おなじく

志賀のさゞ波立つともまゝよ、霞がくれの船ゆかし。

おなじく

文はあまたに書くともまゝよ、思ひそめしはたゞひとり。

八　みどり

ながめいみじき吉野の山や、花の八重雲たなびきつれて、峰の白雪ふもとの吹雪、野邊のみどりと色こきまぜて、ともに散りしくうす花むしろ、馴れしその夜の袂に匂ふ、春の移り香よそにのみ洩すな、えいこのさんさ、袖の移り香よそにのみもらすな。

九　白雪

嘘のかたまり眞のなさけ、このまん中にかきくれて、降る白雪の人ごころ〳〵、積る思ひとつめたいと、分きて言はれぬ世の中。

十　むら雨

むら雨〳〵晴れ間をしのぐ、人目づゝみの草葉の螢、胸にたく火のたぐへてもゆる、我れは消えなん〳〵我れはわれは消えなん、いつかえ。

おなじく

ひとり寢〳〵夜さむのころも、まこと裏なき心の月も、曇れ〳〵と降り來るなみだ、我れは朽なんくちなん袖は袂くちなん、うき名も。

十一　亂れ髪

君と我れとは七つ八つ、十で殿御を見そめてそめて、人こそ知らねアヒノテ振り分け髪を、其方ならでは誰にか見せんこの黒髪を、アヒノテ今は仇なる亂れ髪、亂れ心やあゝ〳〵、アヒノテ逢ひた見たさに來たぞかし、アヒノテつらや〳〵とアヒノテ思ひはすれど乆捨てられぬ、憎さ餘りていとしさ增る、さても命はつれないものよ、君つらや、生きて思ひは愛別離苦の死んでまた來て、その〳〵〳〵アヒノテその先の世も、思ひ知らせん思ひしれ、アヒノテ袖の湊の戀のふち、渡りくらべん涙川、アヒノテ色に沈みて死のとも、引きはかへさじ早小舟、名は流さじ。

十二　東をどり

朝の六つからずんど出かけた、ずんずと踏み出す八文字鬢附とろりと人柄で、伊勢町舟町のだて姿、酒屋の娘店のひまよりちらと見た、見そめた、晩に逢はうぞや語ろぞや、さし足そろ〳〵、くゞりをちつくら、くら〳〵ちつくらばつたり、くら〳〵がりちつくら、ばつたりくら暗がりくら〳〵がりの暗くとも、あけてお待ちやれ遲くと〳〵月の出るまで。

おなじく

よひ〳〵夜な〳〵通ふ妻もつおなは、髪の結ひ時鐵漿つけごろは、月は三日月いづる頃のう、やれ〳〵さてものたれを待つやら黄昏どきに、門に〳〵〳〵立つとのう、錦木かいの、よる立ちやる。

十三　野中

あのや野中におし伏せられて、うしろ荆で刺されはすれど、前は結構な〳〵お正月ぢや〳〵、まへは結構なおけつかうなお正月ぢや。

十四　小町

思ひ深くさ色にはたれも、迷ふ道しば露ふみ分けて、百夜通へと僞るふみを、誠と思ひ彼の少將は、月の夜もゆく闇の夜も通ふ、思ひ餘りて涙に濡るゝ、雨の夜も風の夜も、拂へど〳〵袖に散り來るは、雪かみぞれか木の葉か露か、軒の玉水とく〳〵と、ゆきては返り返りてはまた、せん方なみの夜の路、こゝを通ひて來にけらし、車の榻に通はんと、こゝにたゝずみ彼處に立てば、さてもかなはぬ浮世かな。

十五　うたゝ寢

心の問へば隱れない、戀路知る人波の寄るさへ夢さへ現、さへ、よしなの猫の身をそぼ濡れて、汝よにようとはまたうそばかり、それは定なら浮世にかゝる、露のあだもの暫しもえ。

十六　いしきり

思ひそめてはいとま無きつらさ、涙しをれて妻戀ふ千鳥どこの浦かけて鳴き明かす。

おなじく

君とふたりは雙の岡の、染めて小松のよい中なれど、恨みかねては降るしぐれ。

三下り

一　こんくわい

痛はしやな母うへは、花の姿を引きかへて、萎るゝ露の床の内、智惠の鏡もかき曇るアヒノテ法師に見えたまひつゝ、母を招けば後見返りて、さらばといはぬアヒノテばかりにて、泣くより外のことはなし、アヒノテ野越え山こえ里みねこえて、來るはたれゆゑそさまゆゑ、アヒノテ君は歸るか恨めしや、アヒノテいなうやれアヒノテ我が住む森に歸らん、勇みに勇みて歸らん、我が思ふ〳〵心の内は白菊、岩隱れ〳〵、篠の細道かき分け行けば、蟲のこゑごゑ面白や、アヒノテ降りそむるやれ降りそむる〳〵、今朝だにも〳〵、アヒノテ處は跡もなかりけり、アヒノテ西は田の畔あぶないさ、アヒノテ谷峰しどろにこえゆく、あの山越えてこの山越えて、こがれこがるゝ憂き身かな。

二　かづま

恨みは人をも世をも〳〵、おもひ思はじたゞ身ひとつの報いの罪やかず〳〵の、浮名に立ちし懺悔のありさま、岩洩る水の思ひとなり、名をあだし野の露なみだ、つゝめど餘る世の習ひ、アヒノテきのふの花はけふの夢アヒノテおどろかぬこそ果敢なけれ、アヒノテ身の憂きにアヒノテ人のつらさのなほ添ひて、アヒノテ忘れもやらぬ我が思ひ、アヒノテせめて暫しはアヒノテとまれかし、梓の弓に立つそらの、これまで現はれ來たるぞや、ああ懷かしや今とても、忍び車の我が姿、アヒノテ我がすがたアヒノテ物に狂ひし有樣を、あはれともまた果敢なけれ、アヒノテ世の中は廣いやうでせばいよの、アヒノテ似合ひのつま〳〵、いとど太鼓の音どん〳〵もよし、どん〳〵〳〵アヒノテどんどん〳〵アヒノテつく〳〵てんつくつくどんがらが、太鼓の音もよし、やつとしよ、アヒノテ似合ひのつま〳〵、いとゞ太鼓の音どん〳〵もよし、どん〳〵〳〵アヒノテどん〳〵どん〳〵アヒノテつく〳〵てんつく〳〵どんがらが、太鼓のねもよし、やつとしよ、物に狂ひし我がすがた。

三　門ばしら

晝はたんこ〳〵な桶の輪をさ、しみやるさ、のほんえ、夜さりやせんまじよの腰しみやる、しやうがえ。

おなじく

たんだ振れ〳〵六尺袖をさ、のほんえ、てうせんじ門柱をふりかくす、しやうがえ。

四　池田

池田伊丹の六尺達は、晝は繩おび繩だすき、夜は綸子の八重まはり。

さわぎ

一　一夜かゞみ

ふけゆく空の犬の聲、揚屋〳〵も打ちすみて、恨みろうさい別れ酒鼾みだれの閨もあり、しどけ態振のひとへ帶、もすそ小高く脛白く、おくり届くる仲の町、巳がさま〳〵待乳山の、松の嵐はその夜の夢を覺させ、寢ぬばか〳〵り、あゝばかりえ、明けぬ先にと葛城の、あゝ降つたる雪かな、雪をまろめて一つかみ、投げ付けたまへば操の前、たれぢやいの、こんな惡いことはせぬものよ金を集めて一つかみ、なげつけ給へばみそかの前、たれぢやいの、こんな結構なことするものよ、納豆集めて一つかみ、投げつけたまへば局の前、たれぢやいの、おかさんせ、こんな不道化なことはせぬものよ、げにさま〴〵の戯れにつれて、連れてくるわの、のんやほゝ〳〵はんやしたうてんとささあ、したうてんとさ、勝つて兜の緒じめの巾着、きん〴〵のはアヒノテたとひこの身は梵天國になるとも、たとひこの身はぼんでん國になるとも、物日物日はむにせまい〳〵、さらばえ、おつとせ賴むによ、ならぬにさ、うそつきめ傾城奴、貧乏め。へへへへへ歸り姿は野暮人の、笠も足駄も踏み散らかいて、雪のその夜はばか〳〵し、やう〳〵たどり行くほどに、道哲の

鉦の聲、千手陀羅尼をよむ時は、はや明方になりなんと千々に心を碎けども、行きて歸りてぬめる身か。

二　三谷がへり

世にこくに哀れらしきは、さんちやがへりのふと吉三、宵の酒宴に思はれて、あなたの方へさらばえ、此方のかたへ能登鯖、はんや馬にも舟にも得乘らいで、手編笠をさしかざし、土手の窪みでけつまづいて、膝がしらをすりむいた、何とした、あたたのた、アヒノテ跛ひきひき金龍山の米饅頭はおりないか、ぜによないない〳〵のない兎角戀には身がふとる。

おなじく

世にこくにわびた茶の湯は、朱雀通ひの浮かれ人、宵の騷ぎに聲かれて、あなたの方で投ぶし、此方のかたでそも辨慶、二枚肩にも得乘らいで、燒印編笠うちかざし、丹波口にてけつまづいて、裾つぎまでふん裂いた、何とした氣根がない、甑襪を下げ〳〵松原通りの蒲燒は召すまいか、けらいぜにとく、ない〳〵のない、とかく食はねば身が細る。

三　舟うた

あさのお前のまんほが瀬戸を、小女郎戀しとな、謠うて名乘りてお漕ぎやる、こじやくしこん娘ごさいかこせんか、こかいかこぐるま、津のこよねか〳〵、つがはが〳〵、のんえいよほ、艪ではやらいで唄でやる、君を思はでかよはりよか〳〵、何處で見た、ぞつと致したとよえい〳〵、君は春咲く梅の花、あゝぢやとよえい薫る床しきとりなりは、ありやりや、こりやりや、えい〳〵さつさ、えいさつさ、萬歳ぢや〳〵、千秋樂〳〵ぢや。ちよぎや〳〵、ちよぎりやちり〳〵や、ちり〳〵〳〵とも渚に友呼ぶ、はんまちん〳〵千鳥が寄せ來る〳〵、こん〳〵〳〵小波に、搖られて揉まれて、たんどりちんどりしどろもんどりはねられた、ほゝたん〳〵つるやら、このしたんたん〳〵、たゞちがよんきゝよ、こんこゝこのこんこのえ。

四　初音

初音つらにく障りがちにござる、せつくはいてゐよ、よざどのわけは氣の毒、濡らす〳〵〳〵〳〵、洩れて亂れてはつとさ、だん〳〵物憂い正月、アヒノテ御慶〳〵と明けゆく春の、二丁目あたりに鶯鳴いて氣のどく、野山すたりし昔かねのかず〳〵、今さら惜しとわけを友禪左りの腕もゝにすけさま命とほりて、りうしのてんとむつ言も皆僞りよ、あまのろくざも徒らごとよ、月に廿日はあうたいていも、惡所すてほの三夕ゆゑに、今は便りの文ばかり。

五　餓鬼舞

あら闇浮戀しや、安きひまなき身の苦しみを、のんさて誠に、倒れ伏してぞ泣くばかり、辨慶聞いて、おゝ道理道理骸骨たち、さりながら忽ちそこを立ち去らずば、片つた端よりかつぴしやがんとぞ申しける、骸骨このよし聞くよりも、武藏さま〳〵辨州さま、それは餘り曲もじもござんせんわいの、こればかりの盛り切り飯を一ぱいばかり、踏んぞろばいても蹴ころばいても、ちつともぞつとも大事もないが、火燄となつて燃え上る〳〵、アヒノテ火燄かたをばおごろじやつて、あゝ悲し、あゝ泣く泣くばかり飢じ。

六　網すき

網すき又兵衞どのは後世者でござる、跣し裸の代參り、祈るしるしの利生も有らば、町々門々店の端にも引掛けて置いてから、子供衆子供衆もちつとそちらへ寄らんせの、おゝもちつとそちらへよらんせの、わくるは〳〵、わくる〳〵〳〵〳〵、すきわくる〳〵、網を五色にすいてかきよとの宿願かけて、因幡藥師〳〵はんなたこすだこ殘らずかけた山葵、アヒノテ信濃の國には戸帳に掛けたそれがうそなら善光寺の佛所に問うてまた見さんせの、愛宕樣へは月まゐり、祇園やれ〳〵清水、丹波の子安のかねのを、かけた願なりやすかねばならぬ、アヒノテこの町は子供で喧し、上の町ですきましよ、上の町下の町、

店の端にも引つかけて置いてから、子供しゆ〳〵最些とそちらへ寄らんせの、おゝもちつとそちらへよらんせの、わくるは〳〵、わくる〳〵〳〵〳〵すきわくる、網を五色にすきわくる、まんまん又兵衛が網すき、まんまん又兵衛はあみすき、又兵衛がすいたかねのを、兎角又兵衛どのはしやぐわん後世ねがひ。

七　ぬり笠

お方塗り笠七年早い、菅笠にかへて御召しやれさ、近江の笠は、いよこの、さいたさなりはようて、白癩きようてさ。

八　祭文

もとより眞の行者にもあらざれば、ぶしたる祭文知らばこそと、出放題にぞ、そも〳〵祓ひ清めたてまつる、アヒノテ御寒濯川の影きよく、外宮は四十末社、內宮が八十まつ社、合せてやしやくのなぎたおふ膝ぐるまに掻い込うで、其處さん此處さん、アヒノテ上方の社には、稻荷祇園賀茂春日、松の尾の大明神、北野は天滿天神なり、あのお仰やんすことわいの、あのおしやんすことわいの、鹿島浦には寶船が着くとの、千本舟岡朱雀いろ里やあそれの、アヒノテナゲブシ訪はばとへかしいよ、伊豫に松山讃岐に金毘羅、おなじく志度寺の觀世音、津の國にいたつては、天王寺は聖德太子の御願所、鹽屋松本二た芝居、アヒノテえい〳〵〳〵、今年や殿御の草刈年よ、鎌もよく刈れ千草もなびけ、心よいぞの鹿毛の駒、どこ〳〵〳〵どつこい〳〵、姉さまや〳〵、杏で〳〵よござんす、山を通れば山桃ほしや、身をも投げかけ搖らば落ちよ、餘りつれなの山桃や、山につれなの山伏や、なほ山深く分け入れば、如賀にしら山信濃なる、淺間更科いよ甲斐の國、アヒノテ都留が郡や小笠原、相模の國に鶴が岡、鎌倉山を餘所にみて、沖の小島に友もなく、うきを駿河の田子の浦砧の音のいと高く、宇津の山べを三保が崎、磯に寄せ來る浪の音、名乘つたる千鳥の轡の響きがちん〳〵〳〵鴨のあし、アヒノテかはるまじ〳〵、この世はさて置き後の世もこれ〳〵、さつて〳〵浮いて來た、身は浮島や遠江名高き故事を三河なる、かの八橋やいつの間に、尾張の國には鳴海潟、いつまでこゝに伊勢の國、鈴鹿宮川月讀や、阿漕にひくは浪たへに、山田が原や宇治橋や、はしのいよこの、下には橋の下には、そつこでお檀那ほんのぜに煙管のがん首鳩の目、おつとよどんだ猫の鈴でも、そつともとまれかし、けにうは氣だんな、うつざはよね山藥師、なんなむ歸命長左衛門、あぶらうんけん宗右衛門、御祈念とぞ、うや松原通りへ。

九　失念

こんど長崎で變はつた小歌をならうた、あとさきは覺えないが、中の唱歌を忘れた、さこそ有るべいとて書いてもらつたが、それさへ出口でおとした、これ面目ない首尾も諸分けもこの通り、これめん目ない。

十　惡所八景

なんぼ堰きやるとも逢はなけりやならぬ、厭だと言やらば出直してやりかけよ、及よばぬ戀を瀨多にかけ橋、ばつと立つ名が浮名のうきにさ、網ひく〳〵よね達は、やんれ可愛らしやの、えい〳〵えいざんのお山は、くされだてしやぢやないか、やれ雲の帶鹿の子まだらに雪のふり袖、げに〳〵江天のほつとり者、志賀のから崎〳〵代參り、引つつれだつてついつれだつて、まゐる女は男ほしさに宿願かかか掛けたえ、利生を待つぞ一つ松、その木の下で、さすぞ盃やつこりや〳〵〳〵、飲めさ厭ださぞめきさわぎし有樣を、見たか平沙のらく遊び、かぶろ遣手に太皷持、瞽女や座頭に按摩とり、さても惡所のせいらいやと、ばつというて、ばんしゆ〳〵ばん〳〵しゆ雨も降らぬに高足駄、蓑きて笠きて捧突いて、行燈さけてどんがらり、どんどとなるは夜店じまひの太皷持、どんがらり何者ぢや、あれは遠寺の番太郎、さつては別れの涙こそ、さつさ濡れて、しつぽと濡れたが瀟湘の夜の雨にもまさるべし、翌る日は二日醉ひの作りやまひで、おや兄弟の見る時は、眞らしげに洞庭のあゝきの月とも謂ひつんべし、いかい呆痴のなれの果て、うかりひよんとぞ見えにける。

十一　津島祭

津島まつりにうかれ出てえ、晝は〳〵しん樂に、ちやんぎりしつきり船遊び、まづ三番叟の鈴の音は、おうさへ〳〵や、おんは〳〵しやんしやん、とゝん〳〵踏み渡る囃せや囃せや役者衆、その次は供の衆、數へ數へ見たれば、一つ人の忍ぶ新町の式部は、華奢なものぢやと、アヒノテどつと譽めたもことわりよ、二つふた葉の松はたのみに、別れはうき舟、なあゝん〳〵、三つ三笠に、四つ吉田の兼好が流れとて、その敷島の道をたつる女郎は惡性らしやの、びやくらい可愛らしの、五つアヒノテ五つ井筒は意氣地張り合ひ强いか弱いか、六つ武野は辨けいせいのつは者ぢや、七つ長橋は欄干につゝ立ちて、口說の男を今や遲しと待つたりけり、雪踏の音はざら〳〵ざらりひしやり、すはしれもんのんよと、盃手に持ち待ちかける、アヒノテ歸るさはとろさになつて門までおくれ、ささらばやはつと言うては、八つ八重桐は髮きり姿に樣をかへ、とさん組重盃を、禿に持たせて差するさ野暮さ、てんと〳〵てんと〳〵てんとや追つめ追掛け、もんのび物日をいちに禮拜、南無歸命頂禮くぜつもなかれ、九つ小太夫はおしつけこぐらを建てそめて、家もさかひやの女郎屋揚屋の大黑舞と、夜店の太鼓で囃した、十でとうから、明日はとうから御座んせ、三番太鼓ですんでんどうから、文はやり手のかぶろやりくる。

十二　笑止

笑止〳〵が三笑止ござる、一に出ぬ首尾二に舟の雨、土手の夕ぐれ橋場のけぶり、明けの鳥のこゑ〳〵も氣のどく。

おなじく

笑止〳〵が三笑止ござる、一にかす首尾二に遲い首尾、軒の夕暮かぎりのたいこ、ならぬ貰ひの約束も氣のどく。

十三　唐人歌

かんふらんはるたいてんよ、長崎さくらんじや、ばちりこていみんよ、でんれきえきいき、いはんはうろうふすをれえんらんす。

おなじく

三浦の四郎左衞門、長崎平左衞門、菱屋の三郎ざゑもんあづま屋の新七で、江戸町山がた七郎右衞門。

十四　永代橋

願ひもいとゞかけまくも、つゆ惜しからぬ陸奥の、深きなさけを汲み上げて、南無や大慈の觀世音、枯れたる木にも花さかせ、今の若いに浮氣もしやれ、風が誘はゞなるまいに、まだ夜は深いにさりとては、後朝せつく舟むかひ、箸をり焚し酒の燗、猫の荒らせし座禪豆、月は待乳の木がくれに、告げてたゞよふむら鴉、ひふみ夜を籠めて歸るつらさに、又の御けんと神かけて、まだ見ゆる今戸橋しゝ向ふ島崎なごり有り、押切灘もつつがなく、いそぐ心はなけれども、永代橋にぞ着きたまふ。

十五　槍をどり

振りやれおふりやれ大鳥毛の振袖、行列ほつたてあづま入り、ちと〳〵ちと歩行をめされの、しつかとせ、槍はぢよん〳〵、ぢよろぢよん女ろさまに持たせろ、まつかせ持たせろ、まつかせまかせ、まかせ〳〵ておけろの、さて〳〵な、任せて置けろの、さて〳〵〳〵、ぢよん〳〵ぢよん〳〵女ろしゆ〳〵、ぢよんぢよろ樣の槍の手、對の振袖御先で振れさ〳〵、おさきで〳〵さき〳〵〳〵、あと〳〵〳〵、跡先揃へた道中國は、花のお江戸にとん〳〵とつ着いた、はや品川をうち過ぎて、東をさしてぞくだりける。

十六　馬かた

千兩とるとも馬方いやよ〳〵、寒の師走も火の六月も、わつぱしめ、腰にや馬柄杓、やつとまかせのよい〳〵よい、とぶが如くに、はねるが如くに宙をも驅け、山をも谷をも越ゆるしら月毛、ちん鳥足わけ、えいさらあり

やとんな、起きあがつて馳せあがつて、ぴんと跳ねられていいいいい、いんひいいい、こいな馬めは飴が過ぎたかほてつ腹め、歩めや歩め、歩まにやならぬ、あつちらな、こつちらな、あちりこちり、すべり廻つてはいく〳〵〳〵、春はござせのお葛籠馬よ〳〵、明け七歳の連錢芦毛に、さざ波轡をとつつけて、押し掛け三昧はりりんし、日本一の彌次馬かたらばなほよかろ、かへして〳〵轡とつて、彌次馬かたらばなほよかろ、駒を早めて。

十七　小六

小六ほつくり〳〵ついたる竹の杖ころく、もとは尺八、中はひうやりちやうやり笛ころく、末ぢや一筆啓上せしめゆ、先度は御諚を下されたれども、ついしか返事も仕らいで、さて〳〵無沙汰に思ひまゐらせゆべくゆとも書いてやれ筆のぢく竹ころく。

十八　高尾

高尾うちに居て蛤喰やるよの、もはや鰒どき、やんや今年のふぐはえ、それ〳〵〳〵〳〵かいてお見しやれ、どぶろく〳〵やじる、すい〳〵のすい。

松の葉　第四卷

吾妻淨瑠璃目錄

一　淺黄帷子　半太夫節
二　狂女　おなじく
三　放下僧　おなじく
四　しらたま　おなじく
五　通路　おなじく
六　蟬丸　おなじく
七　かみすき　おなじく
八　待宵　おなじく
九　舟あそび　おなじく
十　まりこ　おなじく
十一　千鳥の前　おなじく
十二　元服曾我　おなじく
十三　五人曾我　おなじく
十四　几帳　おなじく
十五　弘徽殿　永閑節
十六　丹前清玄　おなじく
十七　寛濶一休　おなじく
十八　茶の湯　土佐ぶし
十九　花賣　おなじく
廿　草摺引　若山五郎兵衛ぶし
廿一　道成寺　式部節

一　淺黄帷子

ほの〴〵と夜あけ烏も、いはゞ開け、氣の毒の山越えかねしに、順禮がなさけにて鬼一くちを免れて、まさきよ一人御供にて、たどり〳〵と道芝の、裾は露やら涙やら時しも秋の夕まぐれ、千々の草葉も紅葉して、錦かと見る谷蔭に樵夫は簀に家づとの、花はなに〳〵藤ばかま、桔梗刈萱われもかう、門田の稻葉かりそめて、竹のまろ屋の賤の女が、月に向ひてうつ砧、こゑをかしくも拍子とる、名にのみ聞きし鷲の、關こえ過ぎてながむれば、すねて茂りしアヒノテ松山の、かのわけ法師がそこはかとかき集めにし徒然に綸子鼻緒の足駄にて、作りし笛には鹿も寄る、肩なん過ぎにし黑髮の、綯れる綱には大象も繫がるる習ひかや、玉よの姫を戀ひそめて、いつし帝位を振り捨てて、草刈わらはの名に立ちし、色の御門のみさゝぎとや、打越え行けば譽田の里、甲斐の黑駒たけくとも、しこなして乘る武士や、花の臺や紫の、雲と詠ぜし藤井寺、順禮が情をも、ひとへに大慈の誓ひぞと、思へばいとど袖しぼる、なほ行先は津の國や、難波の芦のふしの間も、まだ肌なれぬ妻ゆゑに、しよじ世話ながら迷ひゆく、いかにまさきよ、あれ〳〵滿ち來る潮も戀すかや、女波男波のあるものを、佐太枚方を後になし、樟葉の森に色鳥の、塒もとむる優しさよ、男山には女郎花荻の葉風のたよ〳〵と、振らでなびくは野暮らしや、淀や伏見の舟よばひ、いとし殿なら〳〵我れも寢ん、あないぶかしや松風の、吹かで調ぶる琴の音か、アヒノテかすかに三味せん聞ゆるは、此處はいづくぞ時ならぬ郭公の

アヒノテひと聲を聞かまほしやと仰せける、まさきよが申すやう、されば過ぎにし梅咲く頃、都仕ひの折柄に、下部の者に聞きけらし、伏見の宿の色里なり、名に撞木町とかや、ついてをかしきことながら、憂きが中にも物とはん、アヒノテ指きり アヒノテ髪切りいれほくろ、妓のならひかいやほんに、まつにかはらで心せば、たれか契りを餘所にせんとはと、口すさみ今ははや、清水寺にぞ着きたまふ。

二　狂女

いつしか狂女となる神の、とぐろ〳〵と中空に、立ち入る雲の跡もなく、浮きて漂ふばかりにて、其處ともいさやしら露の、置きまよふ身は淺茅が原、まだき色づく我が袖に、たれゆゑ月はやどるぞと、餘所になしても訪へかしな、深き心は淺草の葉末に結ぶ白玉か、光りさやかに隅田川、絶えず流るゝ水の泡、うたかた人は恙なく、有りやなしやと聲たてて、問へど答へぬ待乳山、夕越えくればゆふ崎の、庵傾ぶく板びさし、荒れての後は風あて、ふは〳〵不破の關ならば、鷄のそら音やかはるらん、ゆるさぬものを逢坂の人目の關の忍ぶが岡、よし不忍が池の面、けにいさぎよき清水村、弓張月の入るさの森、谷中の木立茂りつゝ、花の盛りはみよし野の、吉野よりなほ上野山、のぼれば下る車坂、かなたこなたとアヒノテ見渡せば、群集の貴賤とりぐ〳〵に、だてを下谷の町とかや、面白小袖引きちがへ、上着〳〵のアヒノテいろ〳〵に、模樣もよしやよしなか染、くゆる思ひのかず〳〵に、いはでたゞにや山ざくら、霞の間よりほのかにも、見てし人には逢ひたらで、淺黄縮緬茶ぢりめん、鬱金紅樺うすねずみ、色ある人に見せばやな、雄島の海人のぬれ衣、もしほ角袖一つまへ、繻子や唐綾白純子、縫摺箔の幅廣を、ゆかりの色や紫の、縮緬手ぼそ結び下げ、たれしら菅の加賀笠を、眉ふかぐ〳〵と着なしつゝ、なまめきあへる折柄に、花の木陰は假りの宿、心とむなと吹く嵐、蘭麝のかをり誘ひ來て、さりし夕べの頃までは、いとゞ思ひや出づるなる、我も忘れじ洩さじと、移り香ふかく重ねきて、つまの行へをしら絲の、亂れ心や狂ふらん。

三　放下僧

まづ青陽の朝には、谷の戸いづる鶯の、氷れる涙解けそめて、雪消の水の沫に、あひ宿りする蛙の聲、聞けば心の有るものを、目に見ぬ秋を風に聞き、荻の葉そよぐふる里の、田面に落つる鴈鳴きて、稻葉の雲の夕しぐれ、妻戀ひかぬる小男鹿の、たゝずむ月を山に見て、ゆびを忘るゝおもひやり、浦の湊の釣船は、魚を獲て罰を捨つ、これを見かれを聞く時は、峰の嵐や谷の聲、夕べのけふり朝霞、皆是三界唯心の、ことわりなりとおほしめし心を悟りましませや、月の篤には浮雲の、種と心やなりぬらん。

おなじく

おもしろの花の都や、筆に書くとも及ばじ、東には祇園清水、落ちくる瀧の音羽の嵐に、地主の櫻は散り〳〵に西は法輪嵯峨の御寺、廻らば廻れ水車の輪の、臨川堰の川波、かは柳は水にもまるゝ枝垂柳は風にもまるゝ、ふくら雀は竹にもまるゝ、都の牛は車にもまるゝ、茶臼は挽木にもまるゝ、ゆにまこと忘れたりとよ、こきりこは放下にもまるゝ、小切子の二つの竹の、よゝを重ねて打治りたる御代かな。

四　白玉

さて白玉とまうせしは、いうに優しきだて姿、たれに見よとて咲く梅の、色の花笠ふかぐ〳〵と、着連れて連れてゆく時は、知る人ぞ知る白瀧の、音羽もこゝか名取寺、群れつゝ遊ぶ京わらべ、往さ來るさに茂りあふ、枝よりつたふ春風は、空に知られぬ雪なれや、友待ちがほの山ざくら、今この婆婆に示現して、仰ぐも愚か清水の、たえぬながめは面白や。

五　通ひ路

忍び〳〵の通ひ路に、待つはつれなや氣の毒や、便り求めてやる文に、必ず來んとの返り事、うれしさどうもた

まられず、宵より閨に引きこもり、待てどくらせどその人の、そよとばかりの音づれも、早九つの鐘がなる、さても思はぬ障りあり、今宵の逢瀬はかなはぬな、よし〳〵かこつも野暮らしや、いつそ夢こそましならめ、枕一つを樂しみに、戀しゆかしき閨のうち。

六　蟬丸

暗き御目の悲しさは、月日の影もみづ鳥の、賀茂の川岸波越えて、つひの夕べをまつ坂や、消えこそかへれ粟田口、いつを便りにたはつけの、我が黑髪のさねかづら、逢坂山にぞ着きたまふ。

おなじく

第一第二の絃は、索々として秋の風、松を拂つて素韻落つ、第三第四の宮は、われ蟬丸が調べは四つの折柄なりける時雨かな、流るる水のあはれさよ、そのことわりも目に見えず、月の入るさはいづくぞと、都の空も懷かしさ、正木のかづら青かづら、來る人ありとも知り給はず槇や柏を押分けて、杖にすがりの蛆づたひ、たどりかねてぞ見え給ふ。

七　髪梳き

なにの勤めにひまをなみ、黄楊の小櫛もさゝでやと、取り散らしたる玉くしけ、梳きかへしぬるかず〳〵に、濱の眞砂や空の星、よむとも盡きぬ戯れに、ことの葉草の露ふかく、いつの頃より陸奥の、關の下紐うちつけに、解けて亂れて元結ひの末長かれと結びてし、ふたりが中は久かたの、とゞろ〳〵と鳴る神の、いかでか分けん分くるとも、垢に馴れたるつくも髪、もつれそめにしその夜半は、もし移り氣の餘所にやと、立居につけて疑ひの思ひに胸をこがせしに、變らで影のつもるにぞ、情の色もます鏡、松のふた葉の千代かけて、たのむにより十郎どの、芦のまろ屋にひとり臥すとも、君が外通ふ心はなきものを、見はなちたまふな我がつまと、しば〳〵髪みぞ梳きたまふ。

八　待つ宵

あすの夜を今宵になして月もがな、命も知らず曇りもやせん、目には定かに見えねども、風の音づれ何地とも知らぬ妻戸をたゝくなる、よしや迷ひの心から、若しやそれかと危ぶみて、走り出て見れば蟲の鳴くねも、小夜ふくるほど可愛らし、汝もや物を思ふかと、いとゞゆかしさ增るらん、とすれば恨みかくすれば、またいとほしさにほだされて、絲の衣をうち被き、夢こそ頼めと打詫びて、なれし枕に咎ゆるす。

九　舟あそび

夏は涼しき淺草の、色をとゞめし舟遊び、身をすて人の思ひ川、ばつとしたのわけ姿、さりとは心うつゝなうなり行くまゝにつく〴〵と、憂きことをのみ案ずれば、戀風慕ふ三味の音に薫りよ〳〵色と薫りの、さりとては氣のどくの山つもり來て、浮名いとはじ我が思ひ、いづれわけあるつてもがな。

十　鞠子

爰はいづくと問うたれば、こゝは駿河の鞠子の宿よ、さては嬉しや鞠子まで來たか、宇津の山邊を歌でやる、手綱ゆり掛け馬追ひ來れば、爰は下露くだり坂、宇津の山邊の夢うつゝ。

十一　千鳥の前

ふじは磯、千鳥の前と申せしは、法眼のひとり姫、なさけざかりは十六の、年の始めの初暦、婿取りよしと記せしは、誰が爲にぞと筆染むる、消してかこちてうち恨み嫁入りごろなる姫心、すいた〳〵殿御の噂のみ、うつら〳〵と言ひ暮らし、せめてのことの慰みに、朝日夕日が言葉の末、頼みにするこそ優しけれ。

十二　元服曾我

見みえそめしもはや三とせ、すぐる月日の數よりも、君に逢瀬は幾たびか、内外の者に堰かれては、たきつ涙も

流れ得ん、思ひの淵の底ひをば、よどむと人は白波の、消えぬ假言の勤めとて、外の客衆に逢ふ時は、さすが餘所には陸奥の千賀の鹽竈近けれど、あらゆる神も知ろし召せ、許さぬものは下紐の、關の扉かたきつれなさに、親しむ人は疎くなる、疎きはいとゞ遠ざかり、まだきに秋の風荒れて、千草の蟲のかれがれに、たれにすがらん道芝の、露のこの身の置き所、かた樣ならでよすがなし、生れ生るゝ世々かけて、變り給ふなかはらじと、結ぶ誓のしたひがみ、天津かざしの花よりも、分けて目かれず眺めしに、しづ心なく散らさんは、これぞ五衰の數ならぬ、とはいひながら殿姿、けふぞ定まる壽を、思へば〳〵目出たやと、島田にさしゝ櫛をとり、髮かき分けて月代を鎌倉風の今樣に、鬢薄からず厚からず、烏帽子下よくはからはぬ、妾にまかせ給へやと、櫛笥のまゆだれ手合せし、いとも靜かにすきおろす。

十三　五人曾我

互ひ違ひの御手枕、隙間の風も洩らさじと、しめて寢さまも起きさまも、昔の人も後の世も、今の妾にかはらめや、これを見かれを聞く時は、戀と菩提をひき分けて、道は二筋踏みもせぬ、殿に心は風車、千里萬里も物かはと、虎がいさめば少將も、夜の雨露なんのその、しとゞに濡れは劣らじと、東雲まだき烏羽玉の、闇にかゝぐる燈火や、御法の花を家づとに折りこそ下れ峰の寺、裾野の淺茅分け迷ふ、早百合姫ゆり鹿の子百合、小笹姫ささ木瓜の花、ほけ〳〵〳〵としたこそよけれ、うたて嫁御の繩だすき、菅の小笠を傾けて、早苗とる手の所作らしく、うしろじさりに張りあげて、我が田にかゝれの君が田の水、みづの流れは白眞弓、矢矧の橋の果てしなさ、御手を引合うてとろ〳〵〳〵、とろ〳〵〳〵たら〳〵折りに休んで、河原面を見渡せば、流れ枯木が捨ててある、定めて〳〵きん木理細かにござる程に、唐木でござるべいよの、さんやれそま山人も出て見やれ、見るになづまぬ身は吉田、よしだ通ればあれ〳〵禿が招く、なぜに禿は出てまたぬ、待たぬも道理爰に泊ると、白須賀や汐見坂橋本の、濱名の橋に打寄する、波の荒井の遠干潟、梢の風はざざんざと、はゝま松より舞坂三里、砂のかず〳〵われや思へども命なりけり、小夜の中山これかとよ、捨てぬ憂き身のならひとて、さすがねがひも大井川、變る淵瀨ぞ賴みある、やがて敵を宇津の谷と、聞くに心も清見寺、三保の入海田子の浦、打ち出で見れば眞白なる雪の富士の根美しく、山の小額黛の、きはおく空やくろ〳〵と、片割れ月のさし櫛の、粧ひ深きたしなみは、さても見ごとのおつゞら馬よ、こゝは箱根の山坂なれば、初音が原のごさまつに、暫しとどまれ時鳥、たれも小磯の宿づづき、鳴たつ澤は名のみして、家立ちつづく門々に、出で入る人も大磯の、宿にぞつかせ給ひける。

十四　几帳

見つけ箱崎船のうち、寢られぬまゝにつく〳〵と、宿の首尾のみあんずれば、我が黑髮も白髮となる、几帳にはだまさるゝ、二枚五兩の小脇指、緞子三ほん紅絹五ひき、綿の代まで相添へて、霜月なかばに贈れども、つひそれとて見せもせず、今は二人が仲にある。

十五　弘徽殿

夜半に紛れて出で給ふ、あら痛はしや主上は、十善帝位を振り捨てゝ、召しもならはぬ草鞋に、御足を傷ましめ義懷惟成御供にて、戀路に迷ふ泡沫の、歸らぬ水の泡とのみ、消えにし人のおもかげを、夢にだにも見えばこそ馴れし昔の手枕に、語り盡せし睦言の、耳に止まり懷かしや、忘れもやらぬ戀ぐさの、露も思ひの亂れつゝ、我が身は元の身なれども、戀しき人の無き故に、月やあらぬとかこちしも、けにことわりと思召し、おん心細き折柄に、やもめ鴉の浮かれ聲、我れを訪ふかと思はれて、夜すがらともす螢火の、消えぬ思ひのあればさて、蟲さへ胸をや焦すらん、けに在原の業平が、きちうのながめに飛ぶ螢、雲の上まで往ぬべくは、秋風吹くと歎きしも、涙くらべて哀れなり、いとどさへ〳〵身を知る雨の晴るゝ間もなき中空に、小田の蛙の鳴きそひて、道も定かに見えばこそ、涙ぞ道のしるべにて、やう〳〵行けば横雲も晴るゝ東雲の、今は散りゆく花の山、み寺に着か

せたまひける。

十六　丹前清玄

かくて清玄は、讎の敵のよしなかを亡き者となしてのち櫻の前を奪ひとり、われ俗體になりかはり、世を樂々と送らんと、只とる山の猿の肝、さて〳〵果報は寢て待てと、今こそ思ひ知られたり、いざや祈りてその驗現はし見せんとそれよりも、やがて用意を、呪詛の壇と申すは殺生の法とて、北に向つて行はる、鈴錫杖を振りならし、小鬢から大汗流らかいて、數珠も切れよや碎けよと、揉み立て〳〵祈らるゝ、されども驗のあらざれば、不動に向つて大聲あげ、さりとては〳〵聞きわけもおりないこんだによほい、夜となく晝となく、無食素腹で祈れども、すつきりばつたり驗もなし、こりやまたあんたることだに、よほい〳〵ほよほい〳〵ほ、一つの奇特を見せ給へと、數珠さら〳〵と押し揉んで、供物のやうこそおそろしけれ、乳木には珍しき木瓜や枳殼白膠木の葉、苧殼交りの煙草の骨、さては茶莫のをり枝折りくべ〳〵凄じや、大團扇にてあふぎつけ、燒香にはこれやこの雁の骨ほね粉につき、閼伽には牛の涎を盛り、燈明には井守の油その外集めし蟲の數、一にけじ殿毛蟲どのに鬚蜈蚣どの、藪の内のくちなは殿蜥蜴どの、ほり〳〵〳〵ほり端の井守の數、繩でからげて引きかたけ火焔の中へ投げくべ〳〵、銅鑼鐃鉢を打ちたゝいて大音上げ、せめつけ〳〵祈らるゝまに〳〵、まゝに儘にならぬはこの不動、これにも承引なきならば、阿修羅迦樓羅緊那羅王摩睺羅王、我等が地主の堅牢地神に申しつけ、風來不動と爲すべしと、取つては投げまたは引き寄せ抱きあげ、くるり〳〵くる〳〵〳〵、くるり〳〵とひん廻し、平に賴むにお不動よ、いやでもをうでも、をうでもいやでも賴むによ、よや〳〵ほんに誠に曲もなや〳〵これでも驗のあらざれば、清玄今はあきれ果て、坊主冥利もこれまでと、お不動抱いてそれよりも、うろ〳〵涙で立つたりける、かの清玄がありさま、哀れともなか〳〵申すばかりはなかりけり。

十七　寛濶一休

もとよりこの身は本來の、一物もなき假りの世に、斗藪行脚とおもひ立ち、はじめてこゝに紀の路なる、高野山にぞ入りたまふ。堂塔門院古寺古跡、をがみ巡りてその後は、花にも痛し首の骨、あら面白や小空腹や、げに本來のくうの字は、食はぬ先より見證の、悟りの眼ちらちらと、目ほしの花も散りかゝる、とある朽木に腰をかけ、疲れをはらさせたまひける、かゝりける處にとたらくさんの大山伏、無性ほう髭無人相國どの紅を塗り散らし、でじまばんかうのけ鬘、十布の衣の尻からげ、胴金卷の大鍋づる、かんがう鐵きの八角棒、だじやく無法に突き散らし、一休和尚に立塞がり、づかうひしぎの似せ口上、これ御坊修行は法師のわざと聞く、修行成就致いての利德はいかにと尋ねける、一休は聞召し、夫れ三界の大導師釋迦如來の、古へは檀特山に籠り居て、阿羅々仙人を師と賴み、三十成道とけ給ふ、愚僧なども修行をとけ、さて成佛の道とうる、各の如くなる山伏達はいつが峰入り、五月六月盆のころ、腰に法螺貝引つつけて、金剛杖を突き連れて、力に任せて押せささ酒々、六盃飲んだら豆腐に蒟蒻、煮しめに初茸こつこ許に、えいさあえんや〳〵、役の行者の跡をつぎ、大峰葛城釋迦が嶽、霞をくゞり霧を分け、雲に起き臥す兜巾もはづれて、ころり〳〵とこけの行、跛ひき〳〵金峰山、木の根にとり付きホ、手繰りつきよぢらす、どつこいよぢらす、腰をよぢらす檜笠、一の覗き裏壁谷、暗り峠さぐり坂、さぐりさぐつて頂上へ登り詰めたる行者なり、かたぐ〳〵のごとくなる新發意小僧の畫念佛、欠伸がちなる春の日の、眠り覺しの生灸、ものゝかずにはあらねども、いで行くらべいたすべし、一休は聞召し、祈りて行のその驗見せ給へとありければ、いらたか數珠を押し揉んで、一祈りこそ祈つたれ、えい〳〵〳〵、神の御前にやれ井戸掘れば、水は涌かいで金がわく〳〵、ぞつくり〳〵ぞく〳〵と、かんふらんはるたんにてんによ、ながささくらんだ、ばちりこていみんよ、これにて驗しのなきならば、七の夕べの星祭り鹿島三島諏訪熱田、高き御山は愛宕さん

大權現、鞍馬山には僧正坊、讃岐に金毘羅、阿綱の三郎山山の大天狗、只今不思議を見せ給へと、責め付け〳〵祈らるゝ、あら不思議や晴れたる空より大雪降つて、やま〳〵たに〴〵おしなべて、皆白妙となりにけり、山伏勢ひかかつて、いかに〳〵と申しける、一休は御覽じて、これぱかりの小雪を、しつてうともしつてうべい、そんびくともそびくべい、尻から挺さをさつち入れ、しやつくりびきに引いてくりよ、えんや〳〵とな、扇をさつと開きつゝ、はらり〳〵とあふぎ給へば、さしもの大雪朝日に霜とぞ消えにける、山伏大きに怒をなし、こゝがくさりのいつぱいいれ續きの奇特を見せ給へと、さんげ〳〵、ろこざいしやうを、しめにはつだいこごどうし、うなぜこごどうじ、叩きだされるな、なほも奇特を見せ給へと、赤手のこつぽう摺り剝き〳〵、責にへめてぞへめたりける、かゝる處に不動の尊體、花火の仕掛で現れ給ふ、それ見たかヲ、えいとな、一休拂子振り上げて、汝ふどうけ汝ふどけ、かあつかかゝらかの喝と唱へ給へば、無首尾じまひで不動は目黑へお歸りさばえ、さて山賣りかな〳〵けゝらけいわんてゝんがう、今時その手を喰べいか、さあしやつともゆつて見らう、山伏ほつきと我を折つて、たゞ平蜘と見えければ、一休すこし人柄で、こは現金なる御慇懃、かやうに申すも拙僧本意にあらねども　今日の釋迦のみ弟子と思召し、見す〳〵某を佛菩薩の化身とて、もろ〳〵の虛言の八百つき散らし、この後必ず沙汰なしと、各左右へぞわかれける。

十八　茶の湯

床の景色を見給へば、小倉の色紙を掛けられたり、棚の飾りはなに〳〵ぞ、今様體の香道具、心をつけて飾らるる、臺子の掛りしほらしく、釜は難波や蘆屋釜、たぎるその音はりん〳〵と、時ならぬ松虫とのみ疑はれ、蘭麝の匂ひ薫じつゝ、心ことばも及ばれず、その時からさき立ち出づる、されば茶の湯の樂しみは、聖賢悟道の翫び、かゝる情の色の道、分きて心の引かるゝは、君が名に寄るしがのてに、幾夜ぬれ〳〵きぬ〴〵の、言の葉草の露しほり、さて又茶入れは瀨戸の振袖、名園さま〴〵

多けれど、七種の園とぞ傳へしは、もり岩井うもじかはした奥のやま、麓のあたひ琵琶や彈く、ひき手からなる宇治の茶の、君が逢瀨の睦言を、いつの頃かや初昔、けふの日もはや暮れはてゝ、明日またたれに讓り葉の、移りかはるやのち昔、古里慕ふ雁がねの、いつか越路に歸るらん、いのしろ大鷹たかの爪、年は經れども若森の、姿は猶もそゝりの茶、外は別儀もあらし山、紅葉の錦色々に、えんがすぐるゝ極無上、君が手に寄る初鷹の、身寄りの羽風にさそはれて、亂れそめにし仇し身を、たれにか見せん君ならで、色をも香をも知る人と、讀みし心はおもしろや。

十九　花賣

おもしろの賤がしわざや、山路ならねど吹く笛も、ねよげに見ゆる若草の、花紫の藤袴、しをん龍膽われもかう、おもひの色は岩つゝじ、いはでこがれて山吹や、忍びくる〳〵風車、姿たへなる姫百合に、いつか添寢の常夏や、名もゆかしきは美人草、顏よ花こそ一しほに、色も匂ひも深見草、ふく白露の玉椿、身をせばめつゝ影宿す、月見ぐさこそ憂しけれ、げにやまことに有明の、つれなく見えし別れより、ふたり寢る夜に悲しきは、己がつばさはかはせども、思ひ知らずや心せで、まだき鳴く音の鷄頭花、茅花まじりのすみれぐさ、君がすさみの手鞠の花、ひふみよ、とんと落ちても名は立たじ、深き心の底意をば、人に洩すな水あふひ、池に澤瀉眞菰ぐさ、われこそ野に咲くあだ花よ、折らば疾く折れ散らぬ間に、怪しの賤の身ながらも、まれの御幸にいざさらば、御酒を勸めてとり〴〵に、叡慮を淸しめたてまつる。

二十　草摺曳

和田の一門九十三騎を引き具して、長者の許に打寄りて、こくどの魚のいぢり食ひ、後腹やまずのおほ遊山、醉三日の酒盛りは、殊にしようじて面白や、かゝる處に障子のあなたに、金物の音ががらりとした、びやくらいでんの雲はづれ、無間奈落の底ぬけて、鍋の鑄かけはをりないかと、間の障子をさらりと明くれば、ひんぽあふれの

荒五郎、大腹卷を着流し、五尺八寸の大太刀片岡風に指しこなし、なんにも喰はねど高楊枝、そらつぶいたる有様は、さて持扱うたる客來なり、朝比奈が申すやう、兄祐成もましませば、ちつと座敷へお通りあれ、序に力を引き見んと、つか〳〵と立ち寄り、草摺三枚ひつ摑んで、こりやどうでんすの掛物よ、時致にんがりともせず、いやだ白衣で候御免あれ、朝比奈聞いてゆつてもきやつは若輩なり、下手にかゝつてそゝりをくれ、小歌節で遣つてくりよ、なんぼ隱しても曾我の五郎は知れる、心こん短うて、脇差刀は長うて、色は眞赤らかいで聲高に、どつこいどこい何處の田舍のお若衆ぞ、平に一座をたのむによ、この上は是非に座敷へ出さんと、えいやつと引いた、ちつとも更に働かず、日本無双の朝比奈が、仁王に勝る力瘤、左右の腕首節だつて、胸に生ふるいかり毛は、碁盤の表に鋼の針摺りならべたるごとくなり。時致莞爾と打笑ひ、宇佐美久須美河津にて大ぢからと呼ばれたる、河津親父がふところ子、箱根の別當のほとり兒、上げたる手本が百六つ、小謠合して十六番、されども御坊の御恩にきず、すつぺりかへしてなんにもなし、跡に殘る物とては、みづ一こくに千人力、小粒に碎いて財布に入れ、古した帶の物蔭に、がんぢ搦みにからげつけ、そつとたしなみ候ぞや、三枚の草摺りの早緒が切れて、水呑むか茶の水まゐれ水まゐれ、有馬殿より貰つたる、蠟燭箱を踏んぬいで、三里ぜつこつ摺り剝くか、二つに一つは定のものと、びつくともせず居たりけり、朝比奈その時身ぶりをかへ、ぎよとうがとうのふて狂ひ、力紙をがんぢと嚙めば、胴の筋が額にあがり、にん脈筋が拳にさがり、荒れたる骨は巖のごとし、九丈の藤かづら松を搦んで、木枯に揉まれて立てるがごとくなり、朝比奈象の怒りをなせば、五郎は虎の氣をはつて、互ひにえいやと引く力に、三枚の草摺りきれて、左右へばつとぞ退いたりける、いやえいぢよき〳〵、さるに依つて今の世に、靈佛靈社のゐん馬にかけ、扇うちはの婆佐羅繪にも、腕押し首引き草摺引、腕の骨くびの骨、どれこれこれ〳〵書いてお見しやれ、びりこくたいしばかたわう、鬼を茶の子に公平だんべい、ほゝおつかない勇力やと、

今に殘りし力こぶ。

廿一　道成寺

作りし罪も消えぬべし、鐘の供養に參らん、みづからと申すは、そも泊り定めね忍び妻、紀の路の奥に住み馴れし、人の心を尉むる、白拍子の鼓ぐさなる瀧川の流れの身、道成寺のみ寺には、鐘の供養のあるよしを、皆人ごとにゆふまぐれ、月は程なく入りしほの、さして我が身の罪咎も、報はんことの嵐ふく、三室の山のもみぢ葉の色に染めにしあだ衣の薄からざりしさんしうの罪恐ろしく、ことに又罪業ふかき川竹の、ひと夜ばかりの手枕に、人の罪をも身に受けて、永き闇路や黑髮の、みだれ心や結ぼれて、けぶり滿ち來る小松原、いそぐ心かまだ暮れぬ、日高の寺にぞ着きたまふ。

松の葉　第五卷

古今百首なげぶし　附作者付

○さるおんかた　七首

松の葉ごしの磯邊の月は、
　千とせ經るともかはるまい。
さしも知らじなかくとは君に、
　つゝむ思ひの燃ゆれども。
思ひ亂れて蘆屋のさとに、
　海人のたく火か飛ぶほたる。
立つる錦木かひなく朽ちて、
　添はで年ふる身ぞつらき。
我れは菖蒲のねにこそ泣かめ、
　引くな袂のつゆけきに。
海人のたくなる藻鹽のけふり、
　人の立居のしほとなる。
あられふるらし外山のかつら、
　色に見ゆるを如何にせん。

○僧　十首

よそになしても訪へかし人の、
　月は誰ゆゑ袖にすむ。
月を見ばやとちぎりし人も、
　こよひ袖をやしぼるらん。
訪はゞ訪へかしこの夕ぐれを、
　あすの命も知らぬ間に。
ふけてきぬたの音より聞けば、
　月に落ちくるわがなみだ。
せめてやどれよ鈎簾洩る月も、
　日ごろもとめし憂き涙。
渡りくらべて世の中見れば、
　阿波の鳴戸に波もなし。
こゝろ〳〵の世の中なれや、
　花の臺のつゆのいろ。
紅葉こがるゝいろとは聞けど、
　末のおち葉をたれか知る。
松のしぐれに夢うちさめて、
　よそのあはれが思はるゝ。

涙くらべん由ほとゝぎす、
　われもうき世のつらければ。

○傾　城　十四首

廓はなれて非なき月を、
　いつか都のそらに見ん。
憂しやこの身は親はらからの、
　ために沈みし戀のふち。
なみだならでは哀れを訪はじ、
　ふかき思ひの袖のいろ。
宵の口ぜつの白けたあとを、
　鳴いてとほるやほとゝぎす。
君はつらくと恨みはせまじ、
　心からなる身の憂さを。
消えぬこゝろの半ばは雲に、
　かよふ嵐をよすがにて。
もはや命も絶えなば絶えよ、
　住めば恨めしおなじ世に。

人目しのべばその名もいはで、
　思ふあたりのことぞ聞く。
程は雲井にへだつるとても、
　こゝろ變るないつまでも。
のこる形見のかゞみにうつる、
　月のさそひしおもかげは。
恨みながらもまたうち向ふ、
　月はゆかりか憂き人の。
いつの夕べに袖ふりわかれ、
　もはや淺茅も背にあまる。
かよふ心は雲井のよその、
　中にすぎゆく月日かな。
一つ枕にしづみしなかも、
　うきは別れの袖の露。

○男　二十六首

花のあけぼの夕べの秋も、
　くらべぐるしきわが心。

いかに隔てし覺束なさぞ、
　しめて寢る夜も飽かぬ身の。
蛙なくさへ恨のあるに、
　まして寢覺のほとゝぎす。
袖のみなとの寄る瀬を知らば、
　うれしかるべきなみだ川。
あはでぬる夜は袖ひぢまさる、
　夢は枕のいとまなや。
ゆくも歸るも忍ぶのみだれ、
　かぎり知られぬわが思ひ。
かよひ馴れにし朱雀の野邊の、
　露はものかはわが涙。
うちや打たれし枕のふちも、
　今はいく瀬のあすか川。
まれに逢ふ夜は人目をしのび、
　語りつくさん我がおもひ。
雨の降る夜はひとしほゆかし、
　いつにおろかはなけれども。

いく世ふるとも洩らさぬ水の、
　下にかよふや岩根ぶみ。
わかれ寢る夜のつらさを問はゞ、
　後のあしたの文ばかり。
夕べ〳〵のその移り香は、
　君がたもとのゆかりとも。
なまぜなま中馴れずばかほど、
　物は思はじさりとては。
歸る野みちの淺茅にやどる、
　露にそへたる我がなみだ。
君に逢ふ夜は埴生の小屋も、
　玉の臺にまさるもの。
思ひ重ねてくるしやいまは、
　あはで命もたえなまし。
月のあけぼのこの村さめに、
　今は忘れぬほとゝぎす。
露の玉の緒かぎりはありと、
　移るおもかげ變るなよ。

野邊に蛙のなく聲きけば、
　ありしその夜がおもはるゝ。
かくと知らさで消え行くならば、
　つらき報いのありやせん。
磯のまつが根波うちかけて、
　立つ名わりなき戀のふち。
今はみだれて憂き山どりの、
　長きつらさの思はるゝ。
さても寢られぬあかつきうしや、
　過ぎし今宵のしかも今。
色にしづみて消え行く身なら、
　引きは返さじすて小舟。
幾重かさなる山川なりと、
　こゝろへだつな旅ごろも。

○女　十九首

逢はぬつらさをこがれしよりは、
　逢うて別るゝうき涙。

衛士のたく火は夜こそ燃ゆれ、
　胸にたく火の絶えやらぬ。
こゝろ細くも燈火ふけて、
　待つはいのちの消えもせず。
今はたよりの文さへ絶えつ、
　何にいのちは掛けてまし。
いとゞさびしき寢覺のとこに、
　なみだなそへそほとゝぎす。
いく夜ねざめの涙のふち瀬、
　波のうね〳〵うき枕。
殘る移り香まくらに添ひて、
　いとゞわすれぬ閨のうち。
われがおもひはあの浮き雲よ、
　いづこ行へぞ定めなき。
人目しのぶの草葉にむすぶ、
　露の玉蟲ねにぞ鳴く。
ものや思ふと問ふ人あらば、
　せめて語りや慰まん。

第二十一　松の葉

身をば何せん誓ひし人の、
　命のみこそ惜しまるれ。
絶えてしなくばなか〳〵人も、
　身をも恨みじ我がこゝろ。
忍ぶ心を色には出さじ、
　物やおもふと問ふばかり。
思ひあまりてまみえし夢よ、
　覺めてなみだの外ぞなき。
まだき我が名の立ちたるとても、
　思ひそめしをひと筋に。
聲にあらはれ鳴く蟲よりも、
　いはで螢の身をこがす。
幾夜しをれて貴船の川も、
　袖のなみだに玉ぞ散る。
人の滿干のこゝろも知らで、
　底いなげなる我がなみだ。
あだな契りをむすびて今は、
　我が身ひとつのうき思ひ。

○法　師　二十四首

雪の外山のあけほのつらや、
　かやが軒端のとりの聲。
今は身にしる愛別離苦の、
　憂さを思へばなか〳〵に。
せめて閨もる月かげなりと、
　暫しまくらにとまれかし。
逢はで歸ればこゝろの闇よ、
　月は冴ゆれど路みえず。
花に置く露をささの霰、
　こぼれやすきは我がなみだ。
思ひつづけて涙のしぐれ、
　定めなきこそ浮世なれ。
月は人目の關路もなしや、
　西にながるゝ夜半の空。
雲のはたてのそなたを戀ひて、
　住めば住む身ぞあぢきなき。

難波入江の身はすてをぶね、
　岸にはなれて便りなや。
來ぬ夜あまたの山ほとゝぎす、
　降るは村雨わがなみだ。
うき身うき草しづみもはてぬ、
　底のこゝろを月や知る。
思ひ餘りて折りたくしばの、
　けふりさびしき夕まぐれ。
これもさすがにあはれを添ふる、
　小田の蛙のくれの聲。
春よかき根の雪にはあらで、
　消えぬかぎりの下おもひ。
泣いて寢がほの半ばはくもに、
　見えてこぼるゝ袖の月。
忍ぶ袂のいろ見えそめて、
　こゝろにも似ぬ我がなみだ。
過ぐる月日はわれのみ知りて、
　かひもなき身をうちなげく。

限りある身にさりとは人の、
　遠きゆくへをおもへとや。
海人のすて船よる邊もしらで、
　ひとりなみだに伏ししづむ。
さらば面影はなれもやらで、
　人のつらさに十寸鏡。
あふさきるさにみだれて今朝も、
　尾花がくれに立ちとまる。
宇治の橋もりあはれと人は、
　いはで年ふる袖のいろ。
扇ならでも身はふるさるゝ、
　秋のながめよつゆばかり。
逢ふも別れもみないとによる、
　涙つらぬけ形見にも。

古今百首なげぶし　終

歌音聲　並に三味線彈方心得

一、歌の事、音聲ゆたかにして、始終たるまぬやうに歌ふこと第一なり。當風と云ひて世上に彈き歌ふをきけば、三味線を君として歌を臣とおぼえしやうに聞え、あしきとかや。歌を專らとし、鳴らし物はまことのあひしらひ、本手組の歌ひ方と長歌端歌などの彈き歌ひ格別なり。まづ三味線の調子を大切に合せての上、うたひはじむる事肝要にして、序破急の位うき沈み、乙甲けやけからぬやうに心をつくべし。また連彈のとき、歌一つのうち、二上り三下りなどの調子かはる事あるは、一しほ相手の調子取りやう、合方にならひある事也。口傳

一、なげ節の事、元來江戸弄齋の節をなほして歌ひきたるとかや。音聲しめやかに、調子はひくき方よし、その分際に應ぜざる調子にては、意味うたひがたし。いにしへ大阪屋河内風といひて歌ひしは、かみしもの句さらりと、三味線あひしらひも短く、歌のとまりやんと歌ひしなり。今やうはふしのたけゆるやかに、鳴らし物の合手、撥かずも少く歌のとまりは節にていひすて、悠々ときこえ侍る。歌は連れて歌ふもよし、三味線は一挺に限

るべきか。近比歌の下の句三字めのふしを下げて歌ふ事だてにて宜し。この歌の曲節急ならず、序破にとゞまりて、靜かなる方なり。よりて上の句、つぎの七文字のはじめ二字またはかへしの始め二字を、よせてうたふべし。唱歌にはえありて、おもしろき事也。中比より二上りの調子をもちひて、このふしを歌へる事も有り、これには本調子と連れ彈きよし。ふしに甚だ甲乙あり、このゆゑに口傳おほく、いひのべがたし。ある人、投げ節は女のもてあそびものなりと云ひたるも、優美なるさまをよく辨へたれば、さる事ぞかし。

跋

凡し藝に遊べる人おの〳〵好む所あり、おくれたる筋をかくし、學び得たるかたかどをのみさかしがり云ふめるなかに、これが音の歌に和し、あはれもやる方なきにぞ、何事もこと盡きぬべきを、幼より習はざりし恨も今更なり。かの亂後夜などの遠きにこそ至らざらめ、投げぶしの本末かいなでて、心ゆくばかりにはなんどいへるを、この書をあめる人うち笑ひて、それこそ難きわざなれ、朝鍛暮錬のうへならで、一曲は奏しがたし。投げぶしは手のかぎり少きやうなれど、古今の興廢なく、殊にたやすからずと、さらば我がごと學ぶべきにあらず。そも〳〵琉球ひんだの露の始めより投げぶしのみさほなるは、松樹になずらへ、そのほか松葉の風聲ちり盡さざること見つべし。花落雲閑なるゆふべ、雨よきほどの窓のうち、曙けざやかなる雪をあつめて、少年常に習はざらめや。

元祿十六癸未年
六月吉日
京寺町通二條上ル町
井筒屋　庄兵衛
萬木　治兵衛　板行

松の葉　終

第二十二　三味線組歌補遺

（松の葉に省略の分）

一　搖上（初傳）

前彈四段

一 お歸らぬかや。大和の殿は。送り申そよ。それ木幡迄ッそれ誠送りまうそよ。木幡まで。

二 木幡山路にノ行き暮れて。月を伏見のそれ草枕ッそれ誠月を伏見の草枕。

三 天川の。池を千尋と。仰しやるそれよゥり深い。それよゥり深い我が思ひィよの。

これよりチラシ

四 鹿兒島の館なさけある館。御盃たもれィよそれ琉球で語ろ。御盃たもれィよそれ琉球で語ろ。一の枝引けば二の枝なびく。なびけや小松一の枝つりゝんつりゝんりんつりゝりつのりつ〳〵つりゝん。

二　亂後夜（二傳）

一 後夜も鳴り候ッ横雲ッ引に御座れ。歸ろやれ。ッわれわれもッ宿は三條小橋をゥ歌でやろッとんどろそれ歌でやろ。

二 我を忍ばゞッ鶴が連理の。一の階ッいよ鶏を限りにッいよお待ちあれ。我も大事の目を忍ぶッとんどろそれ目を忍ぶ。

三 待つに御座らざッつれなの君やの　いよ夢に見んとてッいよまどろめば。戀は憂きもの。目も合はぬッとんどろそれ目も合ぬ。

三　七つ子（三傳）

いよ七つになる子が。いたいけな事言うた。殿がほしいと謠うたッそもさても和御寮は誰人の子なれば。定家葛かはなれがたやなの。離れ難なやな。北嵯峨へ御座れの。北嵯峨の踊は。つゞら帽子を。しやんと着て踊る振が面白や。吉野初瀨の花よりも。紅葉よりも。戀しき人は見たいものよ。ところ〴〵御詣りあつて。とう下向めされ。科をば。いちやが負ひまゐらしよ。

四　松むし（四傳）

一 もとより賤しき此の身なれども。祈り〳〵し其の御利生を仰がんと。

二 わらはが。國をたづぬるに。丹波播磨伊賀伊勢津の國には奥の者よ。祈らじ鐘の音でッ闘とれ。

三 浦は難波の。里近し。浦は難波の里近し。こは松虫の。音も冴えて。聞けば夜聲もきりはつたり。りん〳〵。きりはつたり。りんりり阿部野の原は面白や。

四 今日立つ明日立つ明後日立つ。今日立つ。明日立つ明後日立つ。阿部野の原で日を暮す。聞けば夜聲もきりはつたり。りんりりきりはつたり。りんりり阿部野の原は面白や。

五 つづれさせてふきりぐ〳〵す。いろ〳〵虫の其の中にわけて面白松虫の。りん〳〵〳〵と夜はほの〴〵と明けにけり。いざ打出でて。つれを待つ。戻ろやれしやなら。しやんならと。

五　淺黄（五傳）

一 淺黄染。こくも染まらぬもの故に。知らすなよ。おうただ忍ぶと人に知らすな。

二 伏見山邊の賤か家の。山風霰よ。さらりさら〳〵はら〳〵ほろと。降る夜に目がさめ。逢はぬ夜つれなや物憂やな。小塗笠に黑の駒。亂れ足とよ。早めて駒はとろとろととゞろ〳〵と。打つ駒も今朝の露一度は落ちこそせうずろめ。

三 世の中に作らでャしほ。打つものは。二葉が娘。蛤のしほ。

四 いつもより今朝打つ太鼓の音のよさよ。上のお寺か。安國寺かノ。さてはまた加賀の大聖寺かの。せんぎれせんぎれづでんどんと。打ちたる太鼓の。音のよさよイエイ。

五 そなたが見たさにいよえ山の端に〳〵。笠をなそらさいなよさて。そらさいよの。見て戻ろ逢うて戻ろ。

六　茶碗（六傳）

一君がいとしけりや枕までいとしゝこちよれ枕。よらいの枕。

二人のいつはり浮世のなかに。問はず語りな投げさりそ。とにかくに我を神や佛というてうちおいて。いまさら更に捨てらりよかの。

三文はかず〳〵通はすれど。いやとおしやるもふりごころ。

四つれなやナしづが心のうつゝンなや。うや思ひきられでやれなんとしよぞの。

五我をつろ〳〵忍ばゝつろ〳〵革草履召されよの、つろ〳〵足駄はつろ〳〵鳴るものつろ〳〵、ちんからころりとエイからりころりと。

六戀の藥がナ茶碗一つ茶碗一つが。及びなや。せめて此の手にて。是程御身ゆゑにこそたゞしなはたて（本ノマヽ）まづはお寢るよの腹立や。

七　堺（七傳）

一戀しや〳〵我が心。あたりの空も懷しやナ昔戀しや。東のは花盛り。

二昔語の。言の葉に。御代もひさしく。浪風もまた四海に治まる國。御代なれや。老いたも若きもいざ諸共に。打連れて踊り手振を御目に懸けよやれ見せ參らせう。

三堺小女郎はなりの好さ。鹿の子帷子こしよせて。ぎりゑどの。しやくながを。しやんとむすび下げてなう。はた織る音は秋の虫の音あゝりん〳〵〳〵と。りゝつと機織り候ないて慰む。

四神主殿に禰宜神樂。御幣。ぬさの。尊きを。見ればなうじう〳〵さらさらと。素手の神樂を。いざや參らせん。

五堺　踊は面白や。堺踊は。面白や。堺表で船止めて。沖の景色を眺むれば今日も日よしや明日もよや。たゞ何時を限りと定めなの君。

六堺踊は面白や。堺踊は面白や。あれ出て見さえ是へ出て見さえ。皆咲き連れた。花と模樣。糸より細い腰を締むれば。いとゞいとしい猶いとし。戻ろやれしやならしやんならと。

八　中島（八傳）

一われはそなたに。言ひたき事はあめ山あれど。人目繁さに心で暮す。神や佛の告けもがな。

二枝垂れ小柳。いとしの振やなまして心のうち。ほけほけて情顔なる君樣を。仇には。にくかろさりとては。

三賤しき我に深き情。よゝの便宜もしなしぶり。何時に忘りよ憂やつらや。

四せんなき思に。身は細る。かくあらば契るまいもの。今更に思へば。身こそ數ならぬ。

五八幡林のしゝのしの〳〵柴栗を。うてどたゝけど。棹でさせどもまだ落ちん。ンやとのや。やれのや。やとのや。あれ憂人のゑいさわれがたはたとちよに。

六津の國の中島のいえい。中つ川原をせきかねて。土持は得持たいで。先持ちは堰越畚の畚の其の下に。こそ千ン鳥足は踏め。アゝゑいやらさらつとんと。ゑいやら。さらとんとさとゑいとな。ゑいさらえ。

三味線組歌補遺　終

第二十三　落葉集

落葉集序

それ金石糸竹匏土革木の八の物は、天地本有の響なりといへども、非レ一不レ一。蓋世に經る音樂の種々は、黄帝の伶倫に權輿して、儒家六藝のひとつにくはゝり、漢書に律歴志あり、文選に長笛の賦あり、呂氏春秋に十二律を判斷し、白氏文集に新樂府あり。樂府雜錄に見えざる也。釋氏には琴瑟箜篌の菩薩あらずや。猶楞嚴法華に琵琶鐃銅鉢の妙文なしや。まことに儒佛潤色の器物にして、月氏漢土運綿として絶えず傳へたり。抑吾神國の音律は、天の鈿女の命に起りける歌、梁塵祕抄に見えたり。新羅百濟高麗渤海任那の祕曲は、國史續日本紀にあらはれたり。聖武の御宇には、南天の婆羅菩提、林邑國の佛哲來りて、唐人歌を傳へたりければ、天皇雅樂寮にみことのりて、其の職を置かれたり。かつ村上の天皇は、秦の氏安に勅策ありて、船木か新靺鞨、魚丸が世羅國は、世に面白き歌なりと見えたり。みな聖代のはやし物にして、天地に感じ、鬼神に通じ、萬民を安んずるの音樂也。今此三味線、其の傳來は前集松の葉に委しくすれば、こゝに省略す。これ樂器一轉の變化にして、物外にあらず。色を好む家には、花すゝきの糸による音をおもひ、月を愛でる庵には、ほとゝぎすの聲に氣をかへて給の助を媒けり。されば京江難三ケの津に蔓る、大木扇德といふ艶男、落葉集を編みて序を請ふ。此あるじの都鳥に、三盃つゞけて、何ぢややら、ひつかなぐり申す。

洛陽高倉滑稽堂

北條持入道酒ノ安白大狂團醉戯書

落葉集第卷之一

古流簫歌目錄

一、山姥　二、松風　三、茶の湯
四、鉢の木　五、福祭　六、花形見
七、名香　八、戀の重荷

古流中興脇踊歌目錄

一、四季踊　二、京鹿子踊　三、君から踊
四、春霞踊

古來十六番舞之唱歌の目錄

一、春かすみ　二、文がやりたや
三、君ちとせ山　四、田舍なれども
五、そなた思へば　六、花は折りたし
七、逢うて戻る夜　八、まづふみ
九、二人の君　十、いとま
十一、津の國　十二、いつもより
十三、おりどのへ　十四、むかふは波
十五、たまさか　十六、たかす通ひ

落葉集第卷一

㈠山姥

言葉かやうに候者は、都さる方に仕へ申すものにて候、又是に渡り候かたは、隱れなき遊君にて御渡り候、山姥の山廻りするといふ名譽の曲舞を、御舞ひ候により、京童の申せしは、百萬山姥と申しならはせ候、また此の度は信濃の國善光寺へ、詣りたき由申し候程に、只今善光寺へと急ぎ候、是ははや越中越後の境川に着きて候、暫らく御休み候て、渡舟をも御待ち候へ、又見え渡りたる山々皆名所にて候、御尋ね候へ、敎へ申すべく候。

〽これから見ればあら面白や。薫ゆる煙の空に消え、果なく高き峰々は、如何なる名所なるらん。あれこそは信濃なる淺間の嶽よ、遠近人の見やは咎めぬと、業平も詠ぜしは、仄かに見ゆる山々の、中にも高く聳えしは、富士山峰よ、扨てその末に續きたる葉山繁山櫻川、嵐に續く花雪、袖うち拂ふに笠買うてたもれ、宇都宮笠を、木曾の棧橋丸木橋、ふみも通はぬ戀の歌枕、今宵は宿をかり衣、日も夕暮に成りにけり。

㈡松風

端歌あはれ古を思ひ出づれば懷しや、御徒然の御舟遊び、月に心を須磨の浦、鹽燒衣恨めしや女車の弱々と、出汐をいざや汲まうよ、汲みわけ見れば月こそ桶にあり、是にも月の入りたるや、嬉しや是にも月あり、月は一つ影は二つ、みつ汐の、夜の車に月を載せて、憂しとも思はぬ汐路かな。

〽都と聞けば懷しや、そなたな見たさに、笠をな外さいよ、なよさて、來て見よかしのなん、戀に焦るゝ、あら恨めしやゝ、行平の事を松風に問へば、村雨毎にぬるゝ袖かな、形見こそ今はあだなれ、是なくば、忘るゝひまのありなんと、捨てゝも置かれず、取れば俤に立ちまさる、起臥あかで枕より、あとより戀の責め來れば、詮方涙に伏し沈む事ぞ悲しき。

㊂茶の湯

端歌　さゝ波や、志賀唐崎にはあらねども、波にうつりし岸の體、よもぎに紛ふお茶の色、よくもたてたり其の味を、呑めば甘露もかくやらん、次第〳〵にとり傳はりて、不老不滅の御藥、しんきも晴れて面白や。

歌　一つとや、人の浮世でもてなすは、柴垣節で候ものよ、さらば一謳のせ奏でん、囃せや〳〵お若い衆、獨り寢る夜の此の長枕、なん、切りて捨てうやれ要らぬもの、なん、いや待て暫し、復も、なんなゝ、逢瀬のありやせん、なん。

歌　二つ三つ四つとは言へど、偽りの無き世なりせば、如何ばかり、人の言の葉、たんと嬉しからう、なん。

歌　されば樣めが言ふ言の葉は、何故に一つも二つも眞實は無いが、八幡〳〵それでもか、おうさゝ〳〵白々癩、誰が眞實より嬉しからう、なん。

歌　忍ぶ道にて、使にはつたと行き會うた、おう何ぢやと問へば文ぢやと言ふ、開いて見れば是見さい、六つ七つ八つの時々九つの、十に足らずとおりや思へども、なん、流石捨てゝも置き難く、なん、しづがな苧環くり返し卷き返し、見れば思ひのます鏡、なん、けに煩惱は菩提と聞けば、唯何事もうち捨て置きて、願以此功德南無阿彌陀、なん。

㊃鉢の木

端歌　年經れば、訪はぬも人の道理に、道も無き迄降りつむ雪は白妙の、今より紛ふ我が宿の、さぞ後の世ぞ思はるゝと、涙ながらも道なる雪をいざ掃かう。

歌　昔着なれぬ蓑笠、竹杷の帚を取り持つて、掃けども〳〵降る雪は心なや、植ゑ置きて、今年ぞみつる梅の花も、降るまゝに、たわゝになりし窓の竹、靡き伏さずば、せめて花見て慰まんと、降りたる雪をうち拂ひ、うち拂へば、いとゞ我が身に降りかゝる、思ひをせり。駒止めて、袖うち拂ふかげもなし、佐野の邊りの雪の夕暮と、詠みしは三輪ケ崎、是はまた東路の、暮るゝにほそや、さぞな子供の冷たからう、清め置く、此の道通れん。

我が常世、常にも變る身は古りぬとも。

㊄福祭

歌　扨てもゆかしき男山、戀故今に名の立つ事も、思ひは如何に彼の女郎花、風も吹かぬに靡く、もの憂やのん心よ、如何に短氣でされば、すぢりもぢりの君ぞもの憂や、なん。

歌　今日も程なくはや入相の、鐘も鳴り候いざ歸ろ。

㊅名香

歌　けに妙なるや香の數、村雨に夕霧は、起居隙なき浮舟の、こがれこがるゝ鹽竈の、須磨や明石に磯枕、末も榮ゆる松の根も、皆もろともにたつ時は、庭の木立も枝を

垂れ、尾花をそよ〳〵武藏野の、風も誘ひて立つ煙、雲の上まで匂ふらん。

〃千重九重八重櫻、ひと花心の君はいや。（踊）

〃君を忍ぶにや寺がよい、心變らでいつ迄も。（同）

〃戀を駿河に名は立ちやまぬ、富士の煙の絶えての後に、田子の鹽屋に焦れて燃ゆる、兎角つきせぬ我が思ひ、朧月夜に名は立ちやまぬ。（同歌）

〃明日の命も知らざる此の身、兎角浮世をぬめりて遊べ、長い刀をきりゝしやんと差いて、思ふ友だちうち連れて、夢の世の中ひたと遊ばん。（同歌）

〃人と契らば濃きがよいもの、うすき紅葉も散れば散るもの。（ちらし）

㊐戀の重荷

〃輕き此の身に、戀の重荷を持てと責むるは、そもこれが何と上らん、よしなき戀を菅むしろ、臥してみれども臥されず、苦しや、ひとり寢の、我が手枕の肩代へて、持てども持たれぬ、そも戀は何の重さぞ。（端歌）

〃持てど持たれぬ岸岡山の、及びなき身は恨めしやく。（踊）

〃命なりけり只頼めども、持てばしめじか腹立ちやく。（同）

〃思ひの煙たちわかれ、いなばの山風吹き亂れ、戀路の闇に迷ふとも、その恨み跡とはゞ、霜か雪か霙か、終には罪も消えぬべし、是迄ぞ、姫小松の死靈は立ち去りて、長久に後は榮ゆる。（同歌）

㊅花形見

此の花形見うつゝなきがとや、朝なく〳〵この君は、春日の神を祈りつゝ、御手を洗はせ給ひたる、面影が身に添ひて、是を名殘に玉章をかきくどき、跡なくば、忘るゝ隙もありなまし、月の思ひを駿河なる、富士の煙の絶えぬ（ネノヤヽ）間もなし、兎角つたなき身ぞ恨めし。（端歌）

〃いでさらば申すべし、かりそめの別れより、あるにあられぬ身の憂さに、たど〳〵しくも迷ひ出で、風すさまじく吹くわらや、深き心は變らねど、あそうづ川の鷲鷗、比ぶ翼か羨まし、鳥の身ならで飛び立つ程に思へども、歩み疲れし身の程は、涙にしほれ、裾は露にやそほつらん、草津の宿や瀨田の橋、伏見木幡や玉水に井出の里、舟さすまではなけれども、棹の川をうち渡り、今日九重に廻りあふ、神の誓は頼もしや。（同歌）

〃げに道理や頼もしや、さて我々も立ち別れ、神に誓をかけまくも、春日の社に詣でしに、四方の眺めになぞらへて、忘るゝ隙もあらばこそ、先づ向ひに見えたるは、いつかはん君を三笠山、面白し〳〵、離れ〳〵のあの雲の絶間に、山こそ見ゆれ、あれこそは名所よ、何れの峰のその中に、一番にあらはれしは、二條ケ嶽や龍田山、げにも名高き龍田山、錦かと見れば紅葉の色の、花に勝りし秋の頃、思ひやられて面白や、あれなるは金剛山、高取山や多武峰、御寺の鐘に煩惱の眠り覺めあら有難や、いざさらば、深き契は妹背山、嵐につゞく花の雪、袖うち拂ふに笠買うてたもれ、吉野笠、きてみる人も無き名所を語らば、如何でつきせぬ契は、やら〳〵目出たの若緑、二葉の松と祝ひそめにしいつ迄も、名所を語るとよも盡きじ、君もろともに存へて、いざさら家路に歸らん。（端歌）

古流歌の終

右此歌者不レ殘本調子
古流之所作拵方
簫歌荒增書・集
者也三味線挽方
杵屋勘五郎挽傳也

當流端手所作拵方淺間佛之原有馬之藤右此所作最中ニ而三ケ之津ニ彌り這流儀間方澤山ニ而自レ在ニ作意ニはやる也

古流中興脇踊歌之部

㈠四季踊

さし本調子
春は先づ咲く梅松櫻な、夏は涼しき池の菖蒲よな、秋風吹けば荻の葉そよ〳〵と、冬は山々雪白妙な。

踊
春の山道霞たつ、さあんさ、せめて音を出せ鶯の、さんさのゑいよへ。

同
夏の山道行き暮れて、さあんさあゝあ、せめて音を出せ時鳥、さんさのゑいよへ。

同
秋の山道紅葉して、さあんさあ、せめて音を出せ鹿の聲、さんさのゑいよへ。

同
冬の山路白妙に、さあんさあ、せめて音を出せ鴛鴦鷗、さんさのゑいよへ。

四季折々に歸るとも、人の心は時もえて、輕いがよいぞ、重いはいやよ、ゑいこの〳〵、この〳〵ゑいきの、浮いたを見さいな。

㈡京鹿子踊

さし本調子
是は京鹿子〳〵、色もよや、見よや、手際もよや、見よや、あら都懸しや、都のしてたち戀しや、扨てもそなたは春の花、先づも見事やしほらしや。

踊
ちん〳〵〳〵〳〵ちりはま通ひ、褄がぬれ候立つ波に、〳〵、いよ立つ波に、褄がぬれ候立つ波に、

同
松になりたや有馬の松に、藤に纏かれて寢と御座る、寢と御座る、いよ寢と御座る、藤にまかれて寢と御座る。

誰にひかれぬ夫なき袖を、ひかば靡きやれ〳〵。

㈢君から踊

さし本調子
君から得たるいよ菅笠を、ふりよく着ては、ほんほへ、だてを、駿河の富士のやま、何が何がへ。

踊
橋の上から文とり落し、上から〳〵文とり落し、水に二人の名を流す、何が何がへ。

同
麻の中にも二人は寢たが、中にも〳〵二人は寢たが、麻が物言はにや名も立たぬ〳〵。

いらぬ奴のいよ長がたな、人な咎めそ、八幡〳〵、ひらに召せ〳〵目狹笠へ。

㈣春霞踊

さし本調子
長閑なる世にいざうち連れて、春の野山を分けつゝ行けば、立ち候〳〵なう春霞、のどかに廻る日の本の、千代の影添ふゑいよゑい、若緣、子の日の松も君が代は、久しかれとぞ祝ふためしや。

踊
松の齡と我が君が代と、〳〵、共に千歳の末かけて、千歳の共に、ともに八千代の末かけて。

同
幾代かはらぬ我が君が代は、〳〵共に千歳の末かけて、千歳の共に、共に千歳の末かけて。

同
若い衆は、落ちよ〳〵と袖をひく、〳〵、袖は、やあ、落つとも、やあ、此の身や落ち候か。

同
紫の、色に心はあらねども、〳〵、深く、やあ、人をば、やあ、思ひそめつるか。

同
十七が、親にかくして鐵漿つけて、〳〵、笹に、やあ、降る雪、やあの、さて、はを隱す。

やんれ目出たいは、千代の始めの壽を、祝ふためしの色色は、ゑい、春の朝の若水を、君に捧げてまゐらしよのう、數の神巫たちうち連れて、蓬萊山の舞の袖、返す返すも梅のかをり香。

右脇　踊唱歌荒増書印

江戸伊勢田舍芝居古來より今にあり京大阪はなし。

㊄古來十六番舞鷹歌

第一番　春霞

春は春霞、立ち出で見れば、み山邊の、雲かと見れば、八重一重、櫻襲ねの薄葉に、書きたる歌は、いつの霞に紛れたぞ。

第二番　文がやりたや

文がやりたや室町筋へ、とりや違ひて餘の人にやるな、花の彼の樣の、手に渡せ。

第三番　君千歳山

君千歳山、それは昔のさゞれ石、巖に生ふる苔の色は、兎に角に、君と我が仲よも盡きじ。

第四番　田舍なれども

田舍なれども駿河は名所、イヤハ田子にうち出で鹽とるも、君を三島とふし拜む。

第五番　そなた思へば

そなた思へば虎伏す野邊の通ひ來なれし我なれど、增す花あれば芭蕉の葉の露、しづふりかゝる、あゝ恨めしや、思ひ切ろやれ戀の道。

第六番　花は折りたし

花は折りたしのや木は高し、イヤハ花は折りたし梢は高し、

離れ難なの、サテ離れ難なの木の下や。

第七番　逢うて戻る夜

逢うて戻る夜はの、花が候もの、逢はで戻る夜はの、サテ花も紅葉も見もわかぬ、我は石川や濁らねども、人が濁りをかけうには、何としんまゐらしよ。

第八番　先づ文

先づ文をやりてみて、來たらば抱いても寢ようずもの、小褄あはせに、片褄片袖うち敷きて、怨みながらも寢ようずもの。

第九番　二人の君

二人の君は持たねども、月の夜にさへ來ぬ人がまして今宵は嵐も烈しくて、村雨がさらりさらりと降れば、涙か、まことの殿はよも越さじ、妻戸しきよやれ、きり〳〵はつたりしよ、

第十番　いとま

暇に得て來た鹿毛の駒、馬よし鞍よし鐙よや、召すとは殿に馴れもせで、チョンあしき、しよしき正體なの我が姿。

第十一番　津の國

津の國の中島の、中津河原を堰きかねて、土持はえ持たいで、せんもちはせきこす、畚の畚のそのひまにこそ、千鳥足は舟（踏めノ訛）、ゑいやらちりとんとと、ゑいやらさら、とんとゝと、さらとゑいともゑいやらさ。

第十二番　いつもより

いつもより、今朝うつ太皷の音のよさよ、上の御寺か安國寺かァノ扨ては又、加賀の大聖寺かァノ道場かの、せきり〳〵づでんどうと、うちたる太皷の音のよさ、そなたな見たさに、なんよさて、山の端に〳〵、笠をな見たさに、なんよさて、外らさんよの、逢うて戻ろ見て歸ろ。

第十三番　織殿へ

織殿への孫三郎が、織手をこめたる織絹、牡丹唐草獅子や象龍、雪折竹の籬の桔梗につれ、しかも赤白菊、祇園殿への竹の下うら吹く風も懐し、さすやうで鎖さぬから木戸、何故待つ人は御座らぬ、待つ人は來まいけにそよ、いざさら門を鎖さうよ。

第十四番　向ふは波

向ふは波の淡路潟かや、面白や、通ふ千鳥の鳴く聲に、幾夜寢覺の夢さめて、沖晴渡る秋の空、月落ちかゝれる島山、淡路島山。

第十五番　たまさか

たまさかに、花をもとめて嬉しやな、後の心は知らねども、花見車のくるくゝと、廻らす袖の盃に、忍もすまい、むすびとめたよ糸櫻。

第十六番　高安通ひ

高安通ひの朝戻り、褄かぬれ候袖ともに、夜なくゝ通ふ池水の、月は映れどもァ、笑止、とに君知らず顏にて。

右此の十六番舞の元は往昔島之千歳和歌の前舞ひはじめ今に傳り舞のいろはにてをしへ初むる也。

落葉集卷一　終

落葉集第卷之二

中興當流所作目錄

一　奈良名所盡　二　吉田小女郎
三　公時酒之醉　四　西國八景
五　鎌足道行　六　菊の花軍
七　名護屋山三　八　傾城淺間嶽
九　關東小六青葉　十　小六自然居士
十一　男道成寺　十二　行平道行
十三　行平地獄物語　十四　松茸狩風流
十五　稲荷塚四ッ門　十六　稲荷塚狐會
十七　傾城花筏　十八　彌陀たのむ
十九　けいせい佛之原　廿　女仙人
廿一　女仙人怨靈　廿二　廿四孝狐會
廿三　傾城善の綱　廿四　文覺上人
廿五　とがしの城　廿六　山居之僧
廿七　名馬揃へ　廿八　柴かり風流
廿九　近江八景　卅　狂亂
卅一　三ッの車　卅二　時雨の松
卅三　思ひの繪すがた　卅四　文言葉
卅五　定家怨靈　卅六　地つき踊

✓　㊀奈良名所盡

竹中吉三郎
山村勘三郎

木闘子三笠山名に高く、唐にても仲麿が、ふりさけ見ればと、よみし名所のその昔、今も雲居にすむ月の、久方のあまくだります宮の神杉、木の間すかしに眺めあり、問はせ給へや教へ申さん、嬉しや扨ては尋ね申さん、あれあれは名に負ふ奈良坂や、此の手を合せて伏し拜む、東大寺には大佛の、釋迦はやり、彌陀は導く一筋に、後生前生のみ寺とかや、おうそれ其處の高嶺はつゞら山、のりかけ馬の徒路の道を行けば、左へ戻れば右へよほいほ、直に通へば一里十八町、廻らば三里よほいほ、それをば行き過ぎ、花の初瀬の山續き、興福寺と申せしは、藤氏の御願所にて、大織冠な御身をやつし、面向不背の玉を取らんとおほしめし、賤しき海士の磯まくら、妹背ことばの末かけて、女も命捨小舟、漕げやえいさら　八十島鷗の立つよの、たたせ給ふは志度寺の觀音、南無や薩埵の、力を合せてたび給へとて、大悲の利劍の額にあて、龍宮の中へ飛び入れば、空は一つに雲の波けぶりの波を搔き分け潜きあげ、又どうくゝ落ちくる男波のひまを、つつと潜るや唐紅の、綱は腰繩命のきづな、しつかとひかへよ、御船のうちにも心得、えいくゝえいととも綱の、延ぶるを便りに走り入り、かの寶珠を盜み取つて、逃げんとすれば惡龍追かけ、かねて巧みし事なれば、持ちたる劍を取り直し、乳の下をかき切り玉をおしこめ、劍を捨ててぞ臥したりけり、龍宮の習ひに死人の忌めばあたりに近づく惡龍なし、約束の繩を動かせば、人々喜び引きあげ、玉は面向不背の唐あの御本尊の眉間にこめしぞ、拜ませ給へや旅の姫、二月堂には觀世音、牛王は彌陀佛はん木の御板、井筒の祈に鈴鐸杖は、がらくゝちんからくゝくゝ、唐獅子の踏むらん拍子やしつたんくゝたんくゝ賴むや、たんくゝたりき、他力功力のたき文珠、わかさみかさにわかさやと、瀉水の印をぞ結

ぶなり、結ぶや誓の常陸帯、鹿島の御神當社に還るや高きお山は本社のいらか、麓にとゞろき猿澤沙羯羅、八大龍王龍燈捧げ、池の青波蹴たてく〳〵て雲にのり、大地をかつぱと踏むひやうしの御神、惣じて奈良は七堂伽藍八百八禰宜九重十重都の礎、社の數が一萬八千、通り者めが褒めて置いたる名所舊跡、互に問うつ問はれつつ春日の宮居に著き給ふ。

(二)吉田小女郎

嵐三右衛門
芳市
澤川
菖蒲
蒲織

端歌あら淺ましやつれなやな、我からなせる思ひの種、みの末世、一代教主の如來も、生死の掟は逃れ給はず。

本調子〽池水に底の心は通へども、岩に堰かれて落ちあはぬあきてはかなき浮世ぞと、思ひすてゝも棄てられぬ。

三下り〽昔の人の戀せしは、命も絶えよと戀をする、さて中ごろの戀の道、草木も靡けと戀をする二上り〽我は思へどそなたは辛や、磯の流れ子のかた思ひ、さはりせうがのやれ片思ひ、磯のながれ子の片思ひ、さはりせうがの、

荻歌〽とは思へども、いとど戀しき折々は、人目も恥も包まれず、せめて閨もる月だにも、別れを急ぐ遠寺の鐘や、梢の嵐は物すごやの。

二上り〽戀の山、寢るも寢られず目も合はぬ、身の狂亂は誰ゆゑぞ、問ふに辛さのます鏡、いつまでかくは存命へて、憂きは數そふ習ひにて、身は捨草のいたづらに、あら怨めしや〳〵、心も無げに立ち昇る〳〵、くゆる煙はほの〴〵と、あとには戀の淵瀬川、せど川の澤の〳〵、寒き嵐にひよつと浮かれて、川原面に浮名をさらす、思はじ〳〵とんと棄てう、そも戀は何の報いぞ〳〵。

(三)公時酒の醉

竹島幸左衛門

二上り〽峰の松風通ひきて、琴のしらべと疑はる、一の人大臣はしよだいない人で、え踊ちぬ我に踊れと仰る、踊でふりを見せまるらしよ〳〵、くわんこや〳〵くわんこ〳〵くわんこや、てれつくに〳〵、からりちんに、ちんからり、しやつき、しや〳〵しやつき〳〵しやつきしやここを開けさい、開けずば戻ろ〳〵、忍ぶ其の夜の通路に必ずござせとさ、樣の俤、深山の奥を通りて見れば、いたいけしたる花あり、荻萩薄刈萱紫苑りんだう、數の花折りせたらおうて背負うて、藥で髪を結うて、腰に鎌差いて、ついつくばうて、かいつくばうて、ついく〳〵とりなりは、柴刈る男の子のなりふりは、みめの惡いしやつ面で、側にころりころ〳〵り、く〳〵く〳〵ころ〳〵りとも寢たるは、毬栗頬髭天神鬚、今朝打ち下しのあら筵がんきやすり鮫肌つい突くやうで、さすやうで、いつくにばつくに寢られぬ、誓文のつつ立て申すべい、弓矢八幡腰骨粉微塵に打つて、屍はかきに晒すとも、梢頭に寢よ、危い事だとさ、變り果てたよ、しよだいなや。

(四)西國八景

竹島幸左衛門

本調子別れて泣く音高砂や、室津に通ふ市人は、山市の晴嵐今此處に、移しぬるかと面白や、それより沖のあま小舟、八十島かけて漕ぎ出づる、此方は尾上鐘の音に、霜に冴えつゝ聞ゆるは、遠寺の晩鐘あはれなる、一村雨の降りくれば、苫洩る雫に身をそばめ、こがれたゞよふ其の風情、これや誠に瀟湘の、夜の雨よと思ほゆれ、繪島がさきは雲はれて、猶洞庭の秋の月、心を慰むたよりとなり、夜もほの〴〵と明けゝれば、いとゞ舟長力を得、梶とり直し帆上げて、波に漂ひこがれゆく、淡路の島の朝霧に、群れゐて遊ぶ雁金の、我は故郷の戀しさに、常世の寒さ如何なれば、故里棄てゝきたるやと、問はばや平沙の落鴈に、蘇武が古思はるれ、沖のつん釣舟なる艪拍子の、音はからころり、つるゐりつるろ、男鶴女鶴夜のつん〳〵鶴めが、つま思うて鳴く音にいざや較べん較べこし、暮れかゝりては浦々の、沖の釣舟、我さきにと、入江々々に歸りしは、遠浦の歸帆是なるべし、遙に見えしは一の谷、誠にいにしへ源平の戰、亂れし跡も有明の、月に白むは劍の光、水に映るは冑の星、打合ひ刺違ふる軍勢の其の有樣、退くは潮に滿つるは又、八重の潮路のはる〴〵と、西海四海の波の上、疊みかけ〳〵追かけ〳〵戰ひしは、はな〴〵しくこそ聞えける、あら面白の眺めやと、勇みに勇んで行くほどに、明石の浦にぞ着きにけり。

㈤鎌足道行

竹島幸左衛門

木蘭子扁　柏の二面、いつか竝べん長枕に、かれてゆくや只一人、勅詔重き御意を得て、四國の浦へと急がるゝ、心の内こそ頼もしき、はや山城に井手の里、月の横川の峰續き、弓手は比良の、右手は愛宕の山おろし、峰の煙の一結び、袖打拂ふ古を、思ひ出せば故郷の空も懐しやと、猛き心もよわ〳〵〳〵と、しどろもどろの志賀の里、須磨の若木の櫻花、嵐につれて、散るは〳〵、散りくるの、散りくる〳〵、惜しき櫻は散り果つる、思ひ明石の浦過ぎて、室の泊に身をよせて、海漫々と見わたせば、此方は四國の淡路潟、波にもまれて行く鷗、浮いつ沈んづ、沈んづ浮いつ、ばつとたつてはひらり〳〵ひら〳〵〳〵と下るゝ有様は、譬へて言はん方もなし、便り求めて行く程に、七重八島の壇の浦、眞砂をはつと拂ふ風のまは、笠かぶり傾けて身を詫ち、人まつ澤に腰を掛け、旅の休息なされける、異國は知らず我が朝に、例まれなる所存やと、褒めぬ者こそなかりけり。

㈥花軍

竹島幸左衛門

三下り　優曇華の花の開くを待ちかねて、散らすな花の主をば、焦れ〳〵て連れて都へ、やれ上らんと、音にきりころ〳〵、音に聞えし小原の里は、菊の名所と便を求め杖に縋りて數へてみれば、白菊の紅菊の、小手鞠寒菊きくきり〳〵、きり〳〵まはる水車くるり、澄まず濁らずよほほんにさ、くん〳〵くん〳〵〳〵まはる車菊、まはりまはれば芹生の里、沈や麝香は持たねども、匂うてくるは薫物、小原木〳〵買はい〳〵、黒木召されの、柴召さいの、ちやうりよふりよひうやらに、ひやらろひやらろに、るろるりちやらるろう、心浮かれてさつても〳〵面白や〳〵、兩陣互に心を合せ、菊の勢を味方になせば菊の苔をさつと開かせ、躍り上り飛びあがり、手重の菊の勇みをなし、あつぱれてん〳〵手柄やと、褒めぬ者こそなかりけり。

㈦名護屋山三

中村七三郎　花井東三郎　子役

端歌　泣く泪雨と降らなん三瀬川、水増りなば歸り來て、此の有様を見給へのう、夫婦は目もくれ心消え、こはそも夢かと立ちよれば、妄執の雲の隔たりて、今まで見えしは姿もなし、是は夢かや現かと、夫婦たがひに手をとりて、わつと泣いては抱きつき、呆れ果ててぞゐたりける。

二上り　光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨、南無阿彌陀〳〵、袖の港の波風も、聲添へて南無阿彌陀、聲の内より幻に迷ひ出でさも苦しげによろ〳〵と歩みより、あら情なや母上さま、喉が乾きて苦しきに、水をたむけてたび給へ、苦しやとたえ入るやうにぞ泣きゐたり、夫婦は夢の心地して、けに道理なりいとほしと、器物に水を入れ、よらんとすれば忽ちに、猛火さかんに燃えあがる、母は餘りの悲しさに、抱きとらんと立ち寄れば、不思議や俄に風吹き來り、眼くらんで降りくる雨の音は、そも、篠を束ねてさら〳〵〳〵と、雨か涙か陸路にどうど伏しまろび、木神にひゞく聲ばかり、あら悲しや堪へがたや、助けてたべのう父母と、叫ぶ聲の聞ゆれば、夫婦はいとゞ悲しくて、八聲の鳥の音をたて、人間の水は南、星は北にたんだくも、あまの海づらよき雲の、立ちそふ聲も微かに聞え、夢かのう現か夢か、幻の世ぞ哀なる。

㈧傾城淺間嶽

中村七三郎　岩井左源太

二上り　怨みも戀ものこりねと、もしや心の變りやせんと、思ふ疑ひ晴さんための誓紙をば、なぜに煙となし給ふ、怨めしや胸の炎は夜に三度、こちの思ひは日に三度、煙くらべん淺間山、あれ御覽ぜよ淺ましや、邪淫の惡鬼は身を責めて、のう劔の山の上に、戀しき人は見えたり、嬉しやとて攀ぢ上れば、思ひは胸を碎く、こはそも如何に恐ろしや、花の姿もよわ〳〵〳〵と、彼處に立ち、行かんとすれば、此處に消え、あるかなきかの春の夜の、朧月夜に果敢なくも、消えて形はなかりけり。

㈨關東小六青葉

芳澤菖蒲

三下り　こは情なきしわざかな、さのみ人にはつらかりそ、

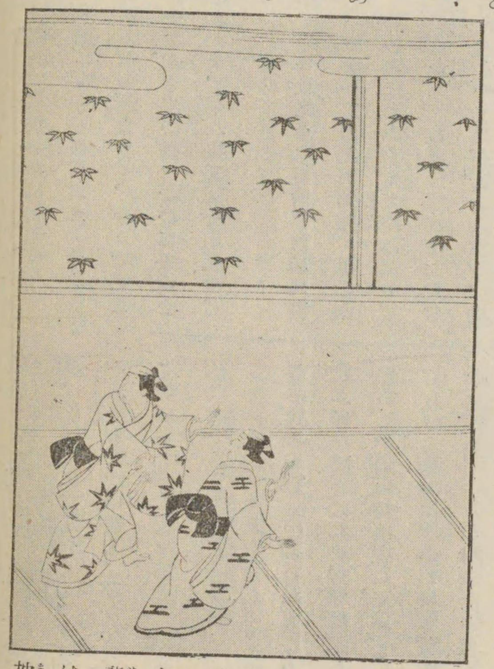
悲みの涙眼にさへぎり、西も東も白波の、よるべ定めぬ泡沫の、いつそ泡とも消えもせで、こがれこがるゝ身の行くへ、青葉々々と呼べども濱の、濱の松風音ばかり松風濱の、濱の松風音ばかり、そよとばかりの便りもがなと、怨み歎くぞあはれなる。

⑩同小六自然居士

中村七三郎

二上りよせては岸をどうとは打つ、雨雲迷ふ鳴神の、とゞろ〳〵と鳴る時は、小笹の竹の籔をすり、あなたへざらり、こなたへざらり、ざらり〳〵、さら〳〵ざつと、吹きくる風は戀風か、あだし野の草葉に置ける露の身なれど、身なれど、是も、是も假なる世の勤め、とかく世の中につらいものはなに〳〵、忍ぶ、忍ぶ妻戸に、妻戸に忍ぶ、忍ぶ妻戸に鐘の聲よんの。

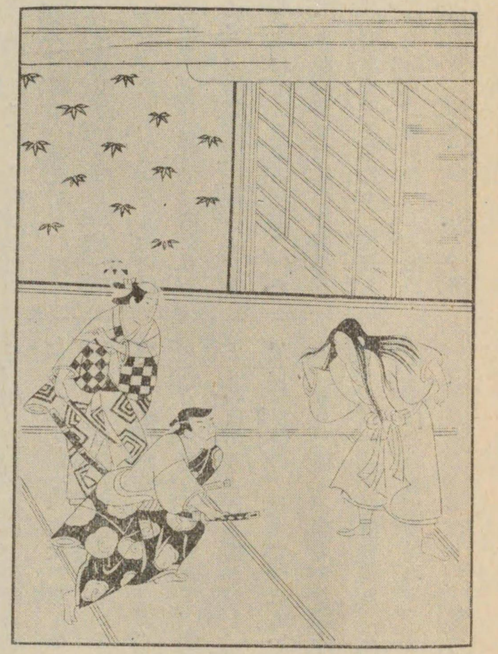
禪僧の戀するはまづ文を遣りて見て、やりかけ〳〵やりて見て、來たろにや抱いても寢しよね、もし來ずば袷の片褄片袖を打敷いて、此の怨みねにもねしよね、波のたちゐも何故ぞ、假なる宿に心とめずば浮世もあらじ、別路も嵐吹く、花よ紅葉よ月雪の、ふることもあらよしなや、假の浮世に。



⑪男道成寺蚊屋之段

中村七三郎　山本歌門

二上り君戀ふる泪を受くる盃に、思ひ切る瀬と切らぬ瀬の、中に流るゝ妹背川、思ひ焦がるゝ短夜は、とても寢られぬ憂き枕、蚊屋の一重の薄月洩るゝ〳〵、洩れてさびしき夜すがら、共に泣かろゝ時鳥、包みかねてはくい〳〵と、水雞の鳥の物思ふ、今宵ばかりは薄情、さのみつらくはのたまひそ、いつの月日に見初めて扨ても、思ひ切られぬ身ぞつらや、心からなる我が涙、とは思へども怨めしや、血筋は眞紅の網をはり、戀を結ぶの神心、我が身の戀はいかでかは、憎しと思ひ給ふらん、あら怨めしや其の人の、思ひ亂るゝ新枕、誰か解くべき常陸帶、思ふもつらし妬ましと、蚊帳の中へ入りぬれば、こは悲しやと走り出で、わな〳〵震うておはします、のう情を知らぬ姫君や、たとひ何處へ逃げ給ふとも、此の戀仇になすべきか、思ひ知らせん腹立やと、蚊帳の外をくる〳〵〳〵、くるり〳〵くるり〳〵と苦しげに、つく息は猛火と成つて此の身を焦す、あゝ曲もなき御姿と、蚊帳に包みしつかと抱き、虚空に向つてつく息は、鬼ともなれ蛇ともなれ、我ながら我が姿、人目愧かし淺ましと、思へど切られぬ輪廻の絆、あはれにも又恐ろしや。



⑫行平道行

中村七三郎

木調子けに幾秋を經べき御代なれ住吉の、かねて植ゑおく松の千歳は盡きすまじ、時しも秋の夕まぐれ、里の砧に月冴えて、千々の草葉になく蟲の、聲も凉しき鈴蟲や、君をこうろぎ轡蟲、忍ぶ夜寒は松蟲も、荻が上葉にねもしなん、猶行先は姫小松、浪華の蘆に初鴈の、おのが友呼ぶ聲添へて、詠め盡きせぬ道すがら、身にしむ風に空晴

れて、いくち初茸うら若き、薄につなぐ賤童、磯のみるめも愧かしと、思ひ續けて行くほどに、松の木蔭に物問はん。

㊀行平地獄物語　中村七三郎

三下り語るに罪も消えぬべし、語るにつけて恐ろしや、苛責の責も音高く、振り上ぐる鐵杖は、天地も響くばかりなり、罪を現す淨玻璃の鏡に惡を映せば、八萬奈落明かに、天を映せば非想非々想天まで隈なく見えたり、扨て又大地をかゞみみれば、先づは地獄道罪を現す罪人の苛責、打つや鐵杖の數々、盡く見えたり、こはそも如何にと立ち去れば、紅蓮大紅蓮の氷に閉ぢられて、あたりを見れば猛火大地に滿ち〳〵たり、無間地獄の苦みは、熱々たる炎の中へ、まつさかさまに落つる事みつばのそや、下より猛火吹き上ぐる、とがは上より落つる所をさつ〳〵と吹き上げて、際なく苦患を受くるなり、阿鼻大地獄の苦みは、鐵石を立つ事一由旬、劒をひつしと植ゑ並べ、罪人を追ひまはし、岩石背に結ひつけられて、峰よりどうど突落さるれば、骨は微塵に碎かれて、風に木の葉の如くなり、助け給へや人々よ、懺悔に罪も消え失せて、願ひのまゝにやす〳〵と、弘誓の舟の川岸に、到り到らせたび給へとて、泪ぐみてぞ語りける。

㊁松茸狩　中村七三郎

本調子稻舟の押すに押されぬ梶枕、寢もせで長き夜のつらさ、語り慰む片糸の、折敷御座のかた〳〵に、寢られねばこそ夢もみず、誘はれ出て道の邊の千々の草葉に鳴く蟲は、思ひ亂れて糸薄、せめてそれかと我問ふものは、荻の上葉に亂れ〳〵て風そよぐ、餘所にも置くや袖の露どれ〳〵月の映ふ影見えて、殘る松さへ嵐につれて、いとゞ心はのうさんさ物わびし、道しるべせよ忍草、繁き思ひは秋霧の、仇名たつともいとはじな、宵より閨に引きこもり、待てど暮らせど其の人の、そよとばかりの音信も、はや九つの鐘が鳴る、扨ても思はぬ障あり、今宵の逢瀨はやれ扨て叶はぬな、よし〳〵詫つも野暮らしやいつそ夢こそましならめ、枕一つを樂みて、戀しゆかしき閨のうち。

㊂稻荷塚四ッ門　中村七三郎

二上り翠帳紅閨に枕並ぶる床の内、馴れしねまきの夜すがらも、四つもんの跡夢もなし、さるにても我が夫の、秋よりさきに必ずと、仇し言葉の人心、其方の空よと眺むれど、夫ぞと問ひし人もなし、夏もはやすぎまどの、秋風冷やかに吹き落ちて、よしや思へば是とても、逢ふは別れなるべし、世をも人をも怨むまじ、たゞ身のほどを思ひ續けて、我一人まろねの床こそさびしけれ。

㊃稻荷塚狐會　中村七三郎

二上り亂菊や小菊白菊小手鞠や寒菊、君を待つ夜はくる〳〵〳〵と車菊、よしや歎けど慕へども、秋の朝空霧とぢて、露なき草に木隱の、杖を賴みに休らへば、身にしむ風に褄も袂も、ふは〳〵〳〵と吹きあげて、我とは見えぬ水鏡、寫す姿は月影の、曇りみ晴れみ行く雲の、空さだめなき山々の、木々の梢に鳴く鳥は、山雀小雀〳〵四十雀、鶸や鵯めうない雀、鳴子ひく音に驚かされて、數の小鳥が群立ち騷ぐ、憎や〳〵小鳥が我をおどすは面憎や、えいこの〳〵〳〵〳〵〳〵えいこのえ、簑と賴むよいや又笠と、笠と賴むは小池の蓮の葉、かくは草刈たすく男はよいやさ、えいこの〳〵〳〵〳〵〳〵えいこのえ、木の葉の雫はら〳〵はら、風にもまれて秋の小蝶の戲れて、峰の小松にしなだれかゝる蔦かづら、よれつもつれつ、離れがたなき我が思ひ。

㊄傾城花筏　葉山岡右衛門　蔦山四郎兵衛

二上り本調子語るにつけて悲しきは、此の幼いが身の上なり、父は播磨の某とて、人に知られし武士に、母は室津の上蔦のはて、假に難波に住居して、此の子を設け給ひしに、過ぎつる秋の末つかた、我に此の子を預けおく、いたはしや幼いは、父よ母よと戀ひ焦れ、晝はひめもす夜はまた夜明の鳥ともろともに、まどろみもせず泣き明かす、目もくれ心きえ〳〵と、身も世もあらぬ不便さに、母の几帳に渡さんと、さてこそ室津へ參るなり。

㊇彌陀たのむ

芳澤あやめ
今村粂之介

三下り彌陀頼む人は雨夜の月なれや、雲晴れねども西へ行く、なまみだ〳〵、いとし我が子もせめてさて、彌陀の御國に行くなどと、便りのあらば如何ばかり、嬉しかるべき我が心、其方いとしけりや、のうやれ我が子もいとし、それなぜに、いつそ子もなけりや、なけりやこそ思ひもないよさ、よしやよしなや、迷うたりのう扨て、なまみだ〳〵〳〵〳〵、鐘の響きに夜はなん時ぞ、八つでもあろか、いやのうあれ〳〵夜が明けるやら、はや晨朝の回向の鐘のあら有りがたや、いざや我が子の菩提の爲に、なまみだ〳〵、宵にや和讃、夜中に

や法華經、南無地藏大菩薩〳〵、心が亂れての、しどろんもどろん〳〵、其方へは行かぬか、此方へは行かぬかと、傍なる人に問へど〳〵、問へど答へぬ古塚の、夢か現か幻か我が子戀しや。

㊈傾城佛の原

岩井左源太
上村吉三郎

二上り何時の間にかは秋風の、吹くや越路の山越えて、波の三國の譯ある里へ、惡性通ひの面憎や、提子の水は湯となれど、まだ覺めやらぬ我が思ひ、つらし嫉まし、あら腹立やと、縋りついては泣くばかり、俺と其方はなん〳〵〳〵七つ八つ、十で殿御を見初めて惚れて、人こそ知らね振分髪の、其方ならでは誰にか見せん此の黑髪を今は仇なる亂髪、亂心があ〳〵〳〵〳〵逢ひた見たさに來たぞ、やれつらや〳〵と思ひはすれど、まだ棄てられぬ、憎さ餘りていとしさ優る、扨ても命はつれないものよ、君つらや、生きて思ひは愛別離苦の、死んで又來て、その〳〵〳〵そのさきの世で思ひ知らしよぞ、思ひ知れ、袖の港の戀の淵、渡り比べん涙川、戀の一念盃の、影暗きよに瞋恚の毒蛇、くる〳〵〳〵〳〵〳〵くるり〳〵〳〵、廓通ひもふつゝりと、思ひ切れ〳〵嫉ましやあら腹立ちやと立つたるは、あはれにも又恐ろしや。

㊉女仙人

多門庄左衛門
出來島小三郎
山本歌門

二上りそちが思へばこちも思ふよ、何れ思ひは變りはせねど、いつもながらの御見も絶えて、今は中々逢ふ事ならぬ、何故な、僞がちなる心と知らで、つらきながらも籬に立てば、傳の文さへ、やれ扨て叶はぬ浮世ぢやえ、よし〳〵詫つもやほらしや、いつそ死んたが增ならめ、扨ては叶はぬ浮世やと、思ひつめたる其の氣色、身につまされていとしさまさる、たとひ萬里を隔つとまゝよ、變る心が〳〵なけれども、逢ひとて見たうて、語りたうて來たおれに、何故に其方は顏ふりやる、扨ても〳〵其方はけに戀の敵よと、怨めしさうに打眺め、縋りついては泣くばかり。一樹の蔭の一宿り、又は一河の流れの身、枕並べし睦言も、假の浮世の習ひぞや、あはれはかなき自は、たま〳〵受け難き人身の受けたれど、例少なき川竹の、流れの身となる悲しさよ、前の世の報いまで思ひやられて悲しやな、少しあはれとおほしめし、機嫌直してのうこれ〳〵、ちと笑ひ顏が見とござる、戀も口說も一盛、假の浮世の夢なれや、經文交りになまうだ、なも〳〵なまうだ、語る間もなき閨の內、はやきぬ〴〵に引き別れ、首尾さへあらば重ねてと、さらば〳〵〳〵さらばやと、裾や袂に取り付けば、戀しき人の面影は、見えつ隱れつ幻か、消えて跡なき夕まぐれ。

㊉女仙人怨靈

山下又四郎

三下りそれ三界は夢なれや、三つの車に法の道、火宅の門をや出でぬらん、月は東の山より出でて、西の山の端に

隱れつゝ、世上の無常はかくの如し、何の上にも報いあり、浮む事なき自は、邪淫の惡鬼と身は成て、えい〳〵さつても〳〵未來えい〳〵、くる〳〵〳〵といや附添ひて、我に憂かりし其の人の、生きて此の世にましまさば、水くらき澤邊の螢の影よりも、我が思ひも胸の火は、火焰となつて此の身を燒く、無念や腹立やと、笞振り上げ追ひ廻り、髪をくる〳〵〳〵〳〵と、手にからまいて打つや打つ、宇津の山邊の夢の世に、廻りくる〳〵因果は今ぞ、思ひ知らずや思ひ知れと、飛び上りては轉び伏し、雲に打乘り波を蹴たて〳〵飛行するこそ凄じけれ

本調子恐ろしや幣束に三十番神まし〳〵て、魍魎鬼神は穢らはし、出でよ〳〵と責め給ふ、面憎や嫉ましや、思ふ人をば徒らに、とらであまさへ神々の、責めを蒙る惡鬼の通力、力もたよ〳〵よろ〳〵〳〵と、足弱車の廻り〳〵て又とるべしと、呼ばはる聲も微かに聞え〳〵、松風ばかりや殘るらん。

㊂廿四孝狐會

山下又四郎

三下り見初めまいもの、うか〳〵〳〵と浮かれ心か鳥羽玉の、夜ならで晝は焦るゝ我が思ひ、寢ても覺めても忘れもやらで、音をぞなく〳〵、君を思へばなんな〳〵篠薄や、尾花の中を潛り〳〵潛つた、なんほ潛りにくい、潛り〳〵潛戸やるまいぞ〳〵、どつこいそつこいやるまいぞ、さまを見かけてはしりこきり〳〵こきりこ、こきりこきり〳〵や、月の夜も行く闇も行く、雨か霰か露か木の葉かはらり〳〵〳〵、しどろもどろとあの山越えて此の山越えて、今朝のきぬ〴〵現れさうな〳〵、去のよ戻ろに我が古塚へ歸らん、勇み〳〵歸らん、おれが思ひは包むに餘る〳〵、涙の袱紗に紅梅小袖、包めど〳〵何と包めど色にでて、人目恥かしやるせなや。

㊂傾城善の綱

大和屋　甚兵衛
芳澤　あやめ

二上り筒井筒井筒の水は濁らねど、交はせし人は朧月、入る方もなき我が思ひ、只變らじと一筋に、寢ても覺めてもいとしさの、餘りて洩れて憎うなる、墨と硯は濃い中なれど、人が水さしや薄くなる、しんきえしんき〳〵、

水さしや人が、人が水さしや薄くなる、しんきえ、其の一念の附添ひて、蔭に佇みあゝ日向に、おほひくる〳〵くる〳〵〳〵〳〵と、苦しき胸のほむらの火、湧きくる水にのう消えもせず、かすかに隔つ淺ましや、少しはそれと思ひ知れ、足元はよろ〳〵〳〵〳〵〳〵と、弱りはてたる釣瓶の雫、落ちて形はなかりけり。

㊃文覺上人

竹島　幸左衛門

本調子其の時文覺膝押立て、愧かしながら某は、源氏譜代の侍なり、先年義朝野間の浦にて生害あり、其の首やがて六波羅の、川原にこそは掛けられしを、愚僧ひそかに盜み取り、菩提の道に修行者の、首に掛けたる頭陀袋あけぬくれぬとせし程に、はや三歳の光陰は、矢よりも早き武士の、守りの神ともなし給へと、しやれたる頭蓋を取り出し、佐殿に奉れば、扨ては疑ひあらがねの、土に屍骸は朽つれども、名は末代に有明の、月の都に攻め上り、たえて久しき白旗を、み山おろしに吹き靡かせ驕る平家を平けんと、賴朝今は勇まれしが、いや待てしばし難儀あり、院宣令旨なくしては、諸軍の催促あるべからずと、佐殿あぐみはて給ひ、我に賴むと有りし時、それこそ易き事どもと、即時に津の國經の島、牢の御所にかけつけて、光義卿を賴みつゝ、院宣令旨を請ひうけて、又立ち歸る浦波の〳〵、磯を傳ひ山を越え、蛭が小島になりしかば、院宣の取りいだし、兵衞殿にいたゞかせ、それより義兵を擧げ給ひ、源氏の御代となす事もひとへに愚僧が恩ならずや、せめて廿日は待ち給へ、鎌倉に馳せ下り、此の一奏をせんまでは、必ず〳〵賴むによな、北條殿と言ひ棄てゝ、衣の裾の高縛げ、破れ笠腰につけ、ちよこ〳〵〳〵走りて出られしが、又立ち歸り文覺は、北條殿に打ちむかひ、これにも承引なきならば、我生きながら魔障と成て、高野粉河金峰山白山立山富士のだけ、此の山々の天狗ども、さつ〳〵と招きよせ、車軸の雨に劍をまぜ、ひさうを非々想天まで叩きあげ、海に浮かまば六代七代八大龍王、山神水神江河の鱗類、八方よりも祟をなさせ、例の天狗の空礫、一時が間に打ちひしぎ、味方のせいうん日輪月輪、じやうふを吹き和ら

けく、暫時に本望とげん事、なんの子細のあるべきと、躍り上り跳ね上り、勇みに勇んで申せしは、頼もしきとも中々申すばかりはなかりける。

㊄とがし城

竹島幸左衛門
同　幸重郎

木調子さる間武藏坊熊井太郎、只一筋に思ひ切り、さしも大勢待ちかけし、富樫が城へ入りたるは、人に變りて覺えたり、山伏の法なれば、例時懺法を讀むべきに、武藏何とか思ひけん、高念佛を唱へつゝ、大門よりつつと入る、富樫が城の體を見るに、表の櫓十三ケ所、脇の櫓九所、二重三重櫓を上げ、北の表を見てあれば、鞍おき馬の數しらず、それぞと言はゞ引き出さんと、用心嚴しく見えにけり、扨て又後の要害は、表は山高うして一片の雲の如し、谷深うして飛ぶ鳥だにも翔りがたし、山峰一丈さがつて、空壕ほつてうむ〳〵九十九折なる難所なる、東の方のをさきには、川を要害とし、青黛霞み滑かに、足そばだつに便なし、此の關所を越えん事、韓信が術と學び富婁那の辯にてたばかるとも、扨て中々思ひもよるまじき、されども武藏が智慧のほど、百千萬に碎きなば、やはか通らでおくべきか、それにも運命つき弓の、巧みし智略も現れて、さしもの大勢前後左右より取り卷かば、陽炎稻妻水の月・無手にはいかで取らるべき、かしこにおつ伏せひつ組んで打取るべし、或は渦卷千騎が中、駈け破りさし通し、十方無盡のすて刀、さつとひゞいては互に言葉をかけかはし、是ぞ軍の花盛り、吉野龍田の花紅葉、嵐につるゝ青侍、逃ぐる奴原追つさま捨て切り向うてかゝるは空竹割、らんぴらんぐわい虎走り、まくのさうだてさうのこて、蜻蛉返しに水車、磯打つ波のまくり切り、貫き捩首人飛礫、死人の山をつかん事、只とる山の時鳥と、勇みに勇みし有様は、めいぼく太子はくた王、我が朝にては將門純友入鹿の荒れしもかくやらんと恐れぬものこそなかりけり。

㊅山居之僧

荒木與次兵衛

簸歌餘りに山を遠く來て雲又我が里を埋む、皆これ人間妄執の雲霧の、ひきは返さじ梓弓、安からぬ身の假の世を、思ひ棄つるに身こそやすけれ、我はなまじひに弓馬の家に生れ來て、かごうを捨てゝぞもんに入る、月を東に里を見て、けはしき山路なければ、岩根に取りつき〳〵〳〵〳〵、苔路を踏んで薪をこり、水音凄く底深く谷に下り水掬び、その雪山の昔を問へば、唯一心の置き所、背かばまさに三惡道は逃るまじ、多き地獄の其の中に無間地獄の苦みは、ねんねつたる炎の中に、眞逆樣に落つる事は三つばのそや、下より猛火吹き上る、譬へば數千丈の谷よりもまくりたて〳〵、吹き廻す嵐に等しく咎は上より落つれば、さあ〳〵さつ〳〵と吹き上げて、隙なく苦患を受くる故、無間地獄と名づけたり、あら恐しや〳〵、阿鼻大地獄の苦みは、鐵石を立つ事一由旬、四方にして劍をひつしと並べ、科ある者を追ひ上し、苛責する罪人・科を歎くと言へども、叶はぬは地獄の習ひにて、岩石背に結ひつけられ、劍の峰より突落され、骨は微塵に碎かれて、歎き悲む淺ましや、苦樂の境は說くも說かれず言ふも言はれず、風吹けば吹け我が庵の、佛の照らす絶えぬ燈火。

㊆名馬揃

竹島幸十郎

木調子あつぱれ御馬ざふらふや、よき馬の吉相や、をつさまむかうよこはたばり、肉付骨節よめのふし、おゝ作りつけたる如くなり、尾は千反の布をはへて、百丈の瀧の落つるに異ならず、右の眼、左の眼、振分髪にちらり〳〵ちら〳〵ちらと〻鞭はなに〳〵紫竹寒竹唐竹若竹、本から末から根から葉から、竹のきり〳〵なきり〳〵きんきりよの、やれ溜り水、清まず濁らず出ず入らす、人の心もそれによそへて、何も柳にさらり〳〵ともやらせて、輕いがよござんす、重いはづぶりづぶ〳〵〳〵とも、沈んださ何がさ。

㊇柴刈風流

上村今吉彌
袖島市彌

木調子山樵の薪を折て數々の、思ふまゝにはいはれぬや、殊更風を厭ふなる、柴に櫻を折り添へて、柴かる女の賤しき身にも〳〵、沈や麝香は持たねども、匂うて來るは焚き物、ちやうりやうふりやう、ひやらにひやらろ、ひ

やらろにるろう、るりちやるろ、戀といへる曲者〳〵かんな、身はやつれそろ、憎や〳〵辛や怨めしや、月には雲に花には嵐、嵐つれなやよぎて吹け、忍ぶ夜の嵐、さても〳〵いや〳〵山田におりし早乙女の、しかも近江のなりよい笠を、しやんと着ないて拍子を揃へ三下り〽田植るゝは面白いが、ぐる〳〵まはりがうかない、さあうかない、十七八は寢ごいもの、梅の木のさがりの枝を枕に寢りたか、寢り申せさあいよ〳〵〳〵え、此へ〳〵しよんほり〳〵と植るた袖、よその袂は田植に濡るゝ、誰故濡るゝ我が袂、打ち眺め、あゝ賤の女の重荷の柴も苦にやならぬ、歩むほどなき道すがら、とある所に著きにけり。

㊇近江八景

水木辰之助

木謌子舟を出しやらば夜深に出しやれ、えい〳〵帆影見ゆれば懐しや、戀にはのんえい、それ若枝もいよえい、えいや〳〵と入るや矢走の渡し舟、波は舳板を叩き上げ、叩く白波荒男波、靜かに漕げやそろ〳〵押せよ、急いで漕げや、さつ〳〵と押せよ、浮きぬ沈みぬ行く舟の、汀を見れば瀬田の橋、漁村の夕照まのあたり、往來も絶えぬ旅人の、上れば下る、間の土山雨が降る、謠ふ小歌のから尻に、乘り打ちさせぬ關所なり、足も止まらず行く舟の、次第〳〵にそのさきは、如何なる所と尋ぬればあれは堅田の落雁ぞや、いざや名所を語るべし、下りてしばし濱遊び、上らせ給へ人々よ、入江〳〵の蘆の葉にそより〳〵と吹き來る風は、夏の導か涼しさよ三下り〽磯に下り居る雁金の、己が友よび遊ぶにぞ、ねらひより追うて廻れば、はつと立つや、ひら〳〵〳〵と群れるる雲に、竿に成つて通る、後なが先へ先なが後なら、竿取らしよ〳〵、是ぞ平沙の落雁と、語りて舟に乘り移る、のう如何に船頭殿、此方に高き御山は、いかなる所なりけるぞ、あれこそ比良の暮雪とて、これよりは冬景色、峰に降り積む白雪の、ちらり〳〵と降り來る雪に、四方のな梢ものうよ、白妙に枝も撓むやしつはりと、積れる道を踏み迷ふ、木樵山がつ柴刈が、笠も薪も埋れて、寒さうにござる、火桶遣りたや炭添へて〳〵、比も師走の暮なれば、穂長讓葉門松を、召せ〳〵召され候へと、商ふ風情實に誠、これ江天の暮雪なり、向ふを見れば、堅田の浦のあま小舟、釣して歸る有樣を、見るに我が身も營みの、釣の糸さへしなへてもつれて、竿持たずに引くは〳〵〳〵、引いてしやくる所を、釣つた所の面白や、入日の影ともろともに、風に任せて帆を擧ぐる、この召されたる舟こそは、遠浦の歸帆もまのあたり、あれ唐崎の一つ松木謌子〽老若貴賤布引の、引分けられぬ宮詣、如何なる上手の筆なりとも、是には如何でか勝るべき、日も早西に入相の、提灯とほす小夜嵐、吹き來る雲に雨起り村雨頻りに降り來れば、濡れに濡れたる形裝も、しつぽりしつたり、わにの岬に舟止めて、苦洩る雫もろともに涙で明かす舟のうち、これや誠に瀟湘の、夜の雨とも言ひつべし、やう〳〵晴れる雲切れに、苦押し除けて見上ぐれば、あれ石山の秋の月、湖水に映り明らけき、須磨も明石もよそならず、これや誠に洞庭の秋の月、此處に移して湖の、更くるも知らず眺め入る、更けゆく鐘の音きけば、飽かぬ別れの雞は物かは、雞も鳴き鐘も聞ゆる三井寺の、時を違へず撞く數は、はや明六つの明け渡る、東近江や西近江、大津の町もとく起きて、己がさま〴〵手業する、是ぞ山市の晴嵐と、夢の樣なる其の内に、四季折々の戯れを、今目の前に見する事、これ龍神の惠みなり。

㊈狂亂

荻野澤之丞
西國兵五郎

木謌子狂人に物問はう〳〵、薄化粧に柳顔、髪はおどろに亂したれども、花紫の由緒あり、風情ゆかしき物狂ひ如何なる人にてましますぞ、問うて何しよ、お問やつて何しよ、我は親より子ゆゑに迷ふ、まだ父知らぬ撫子の花は根に歸る〳〵雁がね、それは越路我は又、東から出て、焦れ〳〵、焦るゝ子故に狂ふがをかしいか、なんのをかしかろ、をかしゆはないが、我も御身に逢ひたうて見たうて、ぞつく〳〵〳〵と、尋ねし國は何處〳〵、せんやうだうに山陽道、音戸の瀨門に播磨灘、舟路遙かに紀伊の路や、玉津島吹上かいつくばうて、ひつつくばうて、尋ね〳〵歩いた、我らも狂ひ廻つた、いとし我が子

の目に筑波嶺のみねど知らねど筑紫の果々々迄、踊り出で走り出で、國々里々伊勢の津尾張の津、近江に大津草津今津海津鹽津、とつ〳〵〳〵攝津の國には大物の、尼が崎から尼になれとて文よこいた、彼方此方も狂ひ廻りて、人目も知らで尋ぬる我を、なんだろつよの、ひこたろつよの、そのよな事聞きや、きん〳〵氣が惡い、りんとはねられ、しやんとゆてたもれ、曉の烏はん鳴かいで、垂木の端をしつかりてう、えいやつと踏まいた名殘、なさけなの世の中や。

㊂三つの車

大和屋甚兵衛
浅尾重次郎
筒井吉十郎

二上り三つの車に法の道、火宅の門をや出でぬらん、夢か現か朧夜の、月毛の駒に片手綱、引き止むれば春の雪、解けて亂れし我が思ひ、あまりて憎い此の人を、誰に添はせん嫉ましや、袖に流るゝ血の涙、色と情のふた思ひ、深き心は常々に、語り明かせし戀草の、萠え出で初めし面影に、縋りつけば八重櫻、風に亂れし亂髪、ゆひがひなくも殺されて、身は仇し野の霜露と、消えにし事の恨めしと、泣くより外の事ぞなき、咲いた櫻になぜ駒繋ぐよの、えいさ駒が勇めば花が散る、勇めば駒がよの、えいさ駒が勇めば花が散る、あゝ淺ましや、堪へがたや、煩惱邪淫の身の苦しみは、鐵石立つ事一由旬、仇と情の心の鬼、上れと責むる劍の山、くるり〳〵くる〳〵〳〵と、追ひ立てらるれば、岩根に取付き〳〵上りて見れば下より猛火吹き上る、こは情なや悲しやな、助け給へと夕暮の、月は霞にかき曇り、聲ばかりして失せにけり。

㊂時雨の松

大和屋甚兵衛
芳澤あやめ

二上り同じ浮世にかけて賴まん常陸帶、取交したる二世の帶、三重に廻るも戀の瘦、身は陽炎の有るか無きかに捨てられて、泪の時雨松が枝に、見えつ隱れつ戀の闘、迷ひ〳〵歩くも誰ゆゑぞ、逢はんと思ふわが男、人に逢はれて愧かしや、戀に瘦せたる二重の帶三重廻る、二重の帶が〳〵三重廻る、さりとは交す誓紙の血汐の文字、猛火と成て思ひの絆切つても切れず、離れもやらぬ我が思、しめつゆるめつ、ゆるめつしめつ、二人寢の夢ばかりな

枕に、伏して形はなかりけり。

㊂三思の繪姿

賀茂川野鹽
山下才三郎
高島尾上

三下り世の中の人の心は、移ろひ易き物と知れ、君と我とが長枕、夜毎に交す睦言の、人こそ知らね神かけて、あしき心はあゝしんき、ないにてんと怨めしや、あゝまゝならぬ君二上り〽さまはな久しやいつ逢うたまゝぞ、おれもな忘れた、逢うた夜さを忘れた、おれも〳〵な忘れた、逢うた夜さを、思ひ出づれば懷かしや、まだ肌馴れし移香の、二人寢顏のつや〳〵〳〵と、撫子今は答へかね、君の御襟しかと取り、これのう怨めしや　我に死ねとの御事か、死ねなら〳〵、いつそ死ねなら死にましよか、彼方へ靡けば此方の怨み、思ひと戀と車の〳〵、兩の輪になる、くる〳〵〳〵寢もせで迷うた、やんれありつる姿は繪にかける、我は轉寢うつゝたゝよの。

㊂四ふみこと葉

高島尾上

二上り一筆と書き初むるは懷かしさのまゝ、問はせ參らせゆべくは、別れより程あらずゆへど、思ひ寢にする獨り寢は、心も澄みて目も冴えて、煙草戀草伽となる、閨の内、變る色なく御暮し、やがて逢をぞや語ろぞや、筆に任せぬ物思ひ、只逢ひまして〳〵、殘る言の葉かへすがき。

㊂五定家怨靈

高島尾上
竹中藤三

三下り淺ましや涙は生死の海の波、死苦みを受け重ね、暗闇より暗きに赴く恩愛の、薄き契りの袂には、涙を包む春雨に、つぼめる花の水離れ、離れもやらぬ愛念の、添寢の床に夢もなく、二人が中の涙川、繋がぬ舟は止まれども、誰か止まる人もないぞよ、夢の世に假寢の母が手枕よ、乳房をしぼり獨り託ちし有樣は、見るに袂も濡れぬべし、又起き上りて走り廻りてつまに取りつき、のう恐ろしや、もはや別れのあれ堪へがたや、双の罪に修羅の太鼓さらばと言へば、しばし止むる袖ふり離せば、目にこそ見えね蹐む足許は、猛火の煙、こは悲しやと、又行先も炎の煙にむせんで恐ろしや、我は邪淫の流れの憂

き身、汲み流す酒は三途の大河となり、起請神罰冥罰當つて此の身を碎く、弔ひ給へお僧さま。

㊇地搗踊　山下座

二上リやれ追ひかけはやさぬか、さア〳〵さ追ひかけ中の綱。締めて見よ、よいやさ、やれ我が戀は〳〵、細谷川の丸木橋、踏みかへされては、濡るんるゝ袖かや、追ひかけ中の綱、締めてよ、揃うたやれ中の綱はえ、えや〳〵えや〳〵、このさんさのえ。

〽鳥に恨みは逢ふ夜の時よ、歌へ今宵の獨り寢に、さんよえ〳〵。

〽あのや小山に戀風が吹くとの、身をも投げかけ搖らば落ちよかの、さてもつれなのあの君や、ふるやこ妻は可愛よえ、えいや〳〵えいやえ、このやこのさんさのえ。

〽難波入江の米舟を見たか、えいとんなえいえいえ、えいとんな、あゝ播磨の米が千石、淡路の米が千石萬石、舟方が納めた、月の夜走りにや、下の〳〵下の關の睦言も忘れた、あゝえいとんな、えいえいえい、えいとんな開いてさ、追風でさ、おも梶とりかぢ難波入江のはんじよえ。

有馬のふぢ狐會右水木辰之介所作、松の葉に見えたり此の集にのするにおよばず。

今古所作之部終

落葉集第卷之三

中興當流丹前出端目錄

一　福神出端　嵐三右衛門
二　藤内だん尻　同　人
三　吾妻路記　中村七三郎
四　遠目金　同　人
五　八幡詣　同　人
六　椀久　大和屋甚兵衛
七　難波蘆論　同　甚兵衛
八　梅揃石切　同　人
九　關東小六　嵐三郎四郎
十　戀の風流　勝井長右衛門
十一　山崎通ひ　同　長右衛門
十二　成相　竹島幸十郎
十三　祭文　同　幸十郎
十四　市野屋　生島新五郎
十五　狐會風流　同　新五郎
十六　曾我五郎　山下才三郎
十七　京の名所　多門庄左衛門
十八　若松風流　岩井左源太
十九　濱川風流　山本歌門　近松勘之介

㊀福神出端　嵐三右衛門

二上リそんもめでたい祝ひ申すよ、夷子三ぶ殿と大黑天がどつかと踏んだ俵に、中にや娼達を思ふやうに入れての、戀する人の養ひ〳〵にゝにどつこいさ、にゝにどつこいさ、につこり〳〵にこ〳〵ともさ、お笑ひあつたにさ、福の神ぢやよ、悉皆在所の庄屋殿だんべい、夷子よいよい三ぶ殿の釣竿をかたけて、烏帽子狩衣しやんと着て御酒に醉うてよろ〳〵、足許はよろ〳〵、よろ〳〵〳〵と船漕ぎ出て、釣を垂るればあら面白や、曳くは〳〵曳いてしやくる所を、つゝと擧げて見たれば、さてこそでつかいよいおめで鯛ぢやよの、大黑殿はいなよい〳〵寶比べの白鼠、ちゝ吸ひついつ抱きついつ、袋の内はごそごそ、打出の小槌に鈴の音、しやんこ〳〵しやんこや〳〵六つ無病息災に、七つ何事ないやうに、八つ家敷を、新地にぐわらりとひろめた　九つ小倉をたつる〳〵〳〵、地形をえいや〳〵えい〳〵〳〵とも築きたつる、浪華入江の御津の浦風。

㊁藤内だんじり出端　嵐三右衛門

二上リ藤内次郎殿はいの、笛吹のやゝくで紫竹漢竹の、やつこのほこりをさ、さつ〳〵とも拂うての、とうらいの〳〵笛人の物は取らいの我が物は遣らいのと、合せ吹いたるはさつても吹いた笛吹と、どつと褒めて通した、だんじり打つてはやした、だんじり打つた見さいな、藤内

三郎殿は小鼓の名人で、あかうの胴にかゞ皮くれ紅の調をちんどりかけにかけさせ、ち、つち、ふつほ〳〵、たつほ、つたつた〳〵〳〵〳〵、合せ打つたるは、さつても打つた小鼓、どつつと褒めて通した、だんじり打つた見さいな、たんじりうつた見さいな、藤内四郎殿はいの、大鼓の役でしつたんに、しつたん〳〵〳〵、しつたんつくる御百姓、明年は八反ぢや、三明年は十六たん〳〵丹波の國の御百姓と、合せ打つたるは白癩上の町下の町どつと褒めて通した、藤内五郎どのはいな、太鼓打の役で大枚の太鼓をあそこらもとに置かせて、金の桴を手に持ち、つく〳〵〳〵つてん〳〵てれつくには、づんでんどん、てれつく〳〵つ、てん〳〵とんからつ、とんとうつほれた、なるかならぬか戀の中の町、中の〳〵中の町を通りたうはなけれど、なまだこつかんだ、頭を見たか熊野小比丘尼が、ちとくわんくわん〳〵、くわんとも鳴るは夜明の鐘は、つんつんつらいか、づんでんとうから櫓太鼓の音によりくる。

㊂東妻道之記出端　中村七三郎

木調子昨日は袖に包みけり、今日九重に旅の空、振り上げ見れば鹿子斑にちら〳〵〳〵と、雪間に見ゆる富士の山、やう〳〵爰に清見潟、空にも關の有るならば、月をとどめて三保が崎、名にのみ聞きし菊川に、夢も結ばぬ假枕、小夜の中山なか〳〵に、濱松が枝の若緣、さしでの岩を荒井の宿〻さゞれ女波が寄せてきて、岸の小草にあゝ濡れかゝる、思ひうらある二川や、けに潔き道の邊の。雲の旗手に戀しき人の、戀しき緣なつかし、只獨り寢の斑女が閨の戸〳〵、西をきつと見たれば、月はな、月は出もせで磯に男波がなん、比叡のな、比叡のおろしが磯に打つとなん、浦々宿り〳〵を打過ぎて大津の浦に著き給ふ。

㊃右出端の跡遠目金　同　人

二上り東も京も絶えせぬは、戀といへるくせもの、けに戀はくせもの、あの君の召したるこん〳〵小袖の袖の海、沈み果つべき我が思ひ、よしや吉野のはん花よりも〳〵、あのや君さまの思はせぶりに、忍び通はば亂れ逢瀨も有るやらん、けに恥かしき初戀に、夢現にも言ふに言はれぬお姿を、誰が堰き止めて通路に、二人枕をかはしまの、橋をかけたやあの里へ、飛び立つほどに思へども、隔つる中の悲しやな、とかく戀にはやるせなや。

㊄八幡詣出端　中村七三郎

二上りけに潔よや心よや、伊達な姿の〳〵男山、引く手數多の梓弓、やたけ心に我が戀の巖と成りていつまでも、君が八千代は盡きすまじ〳〵、とかく棄てぬは女郎花、結ぶ契は千歳山、花の情は猶盡きじ、色はさまゞ〳〵しなの梅八しほ紅梅あさぎ梅、地は薄色に鹿子梅、まだいわけなき小梅ふりよや、拍子も品もとり〳〵に、君が手慣れし手鞠梅、落ちて零れてはら〳〵と、空に知られぬ霰梅、我が思ひを筆にまかせてかきほ梅、文をば君にやり梅、淀の川瀨のなんなどつこい、やれさて〳〵〳〵〳〵水車、誰を待つやらくる〳〵〳〵と、廻り逢瀨の待つ夜はほんに、なぜに女郎は出て待たぬぞ、誰を待つやらくる〳〵くると、廻り逢瀨の待つ夜はほんに、なぜにぢよろは出て待たぬぞ、さても〳〵見事やいたいけしたるものあり、張子の顏や塗りちがふ千種結びに笹結び、山しな結びに風車、瓢簞に宿る山雀、胡桃にふける友鳥、虎斑の犬の子、採るや逢の八幡山。

㊅椀久出端　大和屋　其兵衛

二上りたどり行く、今は心も浮かれそろ、誰かいく野をひきぬきしより、いつの比より相馴れ初めて、通ふ心の幾瀨の思ひ忍ぶ妻戸をほと〳〵たゝくは椀久か、さりとはさりとは受けうかの、忍ぼかの、そつこで請け出せ、思はくをこれ〳〵〳〵請けたもの、あのや椀久はこれさこれさ、鼓の皮かのうほんえ、しんぞ心はこれさ〳〵うちぬいた、ほんほえ、しんぞのうほんえ、とかく戀には身をやつす。

㊆難波津壺論　大和屋　甚兵衛

二上り浪華津に咲くや此の花冬ごもり、今を春べと咲き初めて、榮ゆる葉も茂るよの、幾代かさねて葉も茂るよの、君が齡は萬代の、久しかるべき例かや、國も豐かに民榮え、玉の盃手に持ちて、飲めや歌へやさゞんざの、聲澄み渡るめでたさよ、我も變らぬ嬉しさよ

こゝな殿御は幾つ　十三
七つあらまだ若や、扨ても〳〵わごりよは誰人の子なればしほらしや、踊れ〳〵こゝな子、踊り出せ、見事てん手拍子もそろ揃た〳〵揃た〳〵そろ〳〵〳〵、月の笑顔の照つたりや紅葉笠、そりや加賀笠よ〳〵、辛氣篠竹根笹に霰、はら〳〵〳〵〳〵〳〵落ちて亂れて夜毎に通へさ、樣がふりだす形ふり見れば扨ても其方はいとしゆてならぬ、扨ても其方はいつもどぢか〻るかいな、そも恐ろしうはおんぢやらない、うら〻がやうな底もない蛇之介が、なんでも呑まんと思へば、伊萬里か瀬戸か南京皿けさ、打ちわられのすりこ鉢、寢るやうで寢もせいで、しつくりがつくり寢反りしては寢

どんど、どつこいどどんど、どこついどどんど、どんどとござれ、えいさつさ〳〵えいさ〳〵、さら〳〵〳〵さらえいさつさござれ、どんどと打てば響くえ、昆陽野の宿の遊女が、袖をしづ〳〵〳〵ともひかへて、今樣は朗詠しほり萩を歌うて押へて酒を強ひられた、此の酒にたべ醉ふ、べろり〳〵べろつく管捲きやるか、小ふなぢやわいの飲めの、よい上戸衆の側にそつといたれば、雪に冷や燗呑みか、ね

ら れない、はや明方の時太鼓、どう打つの、どん〳〵〳〵どう打つの、どんと打納め、えいやつとも聲をせ、いさみ賑ふ門の松竹。

⑧梅揃石切

大和屋　甚兵衛

二上り面白や四方の山邊も白妙に、見渡す空の薄曇り、雲と見しは白雪の、白雪の〳〵拂へど降り積る、花と見紛ふ梢々のしほらしや、何れも白妙に眺め〳〵て、雪も氷も其のまゝに、袖をかざし立ち寄れば、これは木々の花切りくべて、樂みの酒にいざや遊ぶべし、まづ冬木より咲き初むる、窓の梅の北面は、雪封じて寒きにも、この木よりも先だてば梅を切りや初むべき、生れ在所は石切の、しやうでんなものも少とかくごさん用もするかえ、何所の袖加減で女房も持たぬえ、梅は樣々有るが中にさ、早咲梅ほつとりと〳〵、しな物〳〵信濃梅、思ひこがこがれて書く玉章を、たよりもとめてやり梅や、其方へとんと飛梅や、枝が觸らば御免なれ、ふりふつて〳〵〳〵ふつて〳〵〳〵ふりふつた振袖の、誰が袖の香の、匂ひ梅、初音ゆかしき鶯の、羽風につれてふわと亂れ〳〵〳〵て枝垂梅、しなと拍子を數へ〳〵て、それ〳〵それ〳〵それ〳〵そこらで締めろ、まかせておけろの、とんと〳〵とんとはずんだ手鞠梅、一二三四五六七八ことは〳〵しと〻んとん〳〵とん〳〵とろ〳〵ころ〳〵てうど百撞いた、面白や、數々の盃はどこ〳〵へ廻つた、長二長七長三郎ちよろ〳〵めきの長二郎、はなしがいのぐい太郎、ずくわんぼうがわ入道、はやし立て〻遊んだ。

⑨關東小六

嵐三郎四郎

端歌　閨の戸〳〵扇車のえい〳〵くる〳〵〳〵と、廻り逢瀨の波枕、さんやれ。

二上り小六ついたる竹の杖、小六、もとは尺八中は笛、小六、末は女郎衆のやつこりや妻戀ぶ鹿かの筆、いとし君樣と寢たる夜は　小六、寺々のほろりん〳〵大鳥小鳥の羽ぶしを叩いて、ほと〳〵〳〵〳〵ふら〳〵さがりの番太郎親爺が、して〻ん太鼓の、のほんほゝ、樣の俤忘らりよか、どこで見た、ぞつとしたとよえい〳〵、君

は春咲く梅の花ぢやがとよえい〳〵、君は春咲く梅の花ぢやがとよえい、薫ゆかしきなりふりは、ありややこりやえい〳〵、さつさえいさつさ、さつさ振袖ゆかしなつかし。

㊥戀の風流

勝井長右衛門

二上り昔の人の戀するは、命も絶えよと戀をする、さて中頃の戀の道、草木も靡けと戀をする、いま當代の戀の道、來うばこい來ずばまゝよと、やあよや戀をする、鳥羽のあなたに戀路がござる〳〵、はつちやさ許してさ、猫が三味引く鼠が歌ふ、これも思ひはやつこりやさ、やつこりや〳〵〳〵これにくや、言ふも枕が浮くばかり、面憎や浮氣だんべい思はくだんべい、戀と思ひを笹舟に乘せておせさゝさ、おゝさゝさ、舵を枕に寢て焦るゝ〳〵、獨りねに泣く戀のにくさよ。

㊤山崎通ひ

勝井長右衛門

二上り面白の山崎通ひや、行くも山道戻るも山道、心の留るも山崎、かの里の女郎と一夜寢たれば、ずはらめいたといはれたんがらがといのう、伊勢のお前でえいしてせい、玉章を拾うたえ、えいしてせい、おんなか御地藏の御籤おん取りおん見れば、一にや二がおり、二にや三がおりる、えいしてせい、さても玉章はおめでたいぞや、えいしてあれしてこれしてせい、そこで笠持てかん五兵衛、頭巾の持てこい、編笠持てこい、ない、五丁町の寶ぢや、千丁萬丁おくれ〳〵をかへるさは、とろさになつておくれ〳〵をありやんりや〳〵しつ〳〵うどゝんどえ、も一つしてこい五丁町の寶ぢや、千丁萬丁おくれ〳〵を歸るさはとろさになつて、おくれ〳〵をありやんりや〳〵しつしつうどゝんどえ、五丁町の寶ぢや、振つた奴のゆかしなつかし。

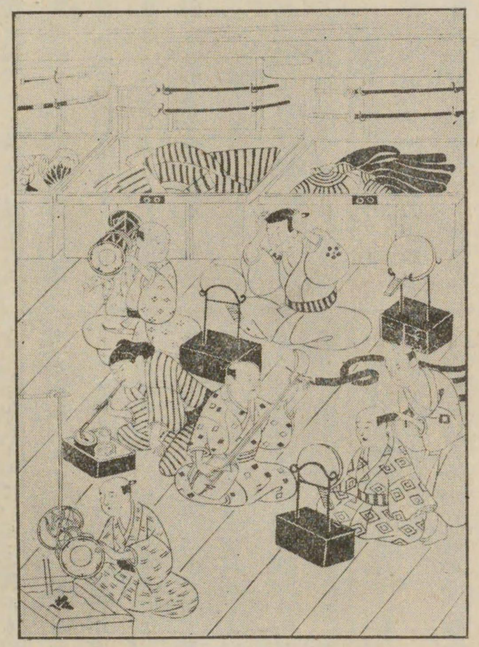
㊦成相

竹島幸十郎

二上り鎌倉の御所のお庭で十七小女郎が酌をとる、えいそりや十七小女郎が酌をとる、いたり姿でうい事言うた、よう言うた〳〵、思ひ寢ぬ夜は底眞實から待ちや明かし

た、浮世通りもの伊達者の姿其方どこへ行きやる、夜更けてからに暫しお待ちやれ、連になろ、お待ちやれ暫し、暫しお待ちやれ、連になろ、君と我とは戀慕れんれつれ、見初めし月日は多けれど、しかも元日初春に、ちよつと見てとろ〳〵とぼけてうか〳〵と、裾やたん〳〵袂に取りつきひつゝき口說いた、れいの〳〵れん〳〵戀慕の深間ぢやと知れた、二世のかねごと、さつさ振袖、先手の行列ほつ立てろ。

爰ではやるさ、さつさよいやさ、三十振袖四十島田さ、さつささよいやさ伊達な振袖ゆかしなつかし。



㊥祭文

竹島幸十郎

二上り萬代の神のみことの二柱、仰ぐもおろかなり、げに世の始め其の水上のあかの水清め奉る、まづ人間の初月を、ば、不動明王の受取り給ひて、本來空の一物これとかや、祓ひ清め奉るの、次をば如何にと尋ぬるに、本心の靈心私なく、初めて明德と名づけ奉るの、二月めには獨鈷の形の現れて、これをたいしと名づけ奉るの、我が朝にては神慮と仰ぎ名づくる、所は隔つれど文珠菩薩の受取にて、三鈷の形に供へ給ひ晝夜守らせ給ふとかや、次を如何にと尋ぬるに、五月めには六根手足を彩色て、五體殘らず連續し、此の時に至りて地藏菩薩の御守り、寵愛ことに淺からず、ちやうちく〳〵あわゝ、かぶり〳〵しほの目、錫杖に打乘つて

いんじんしよ〳〵いんじんしよと勇み給ひて、次を如何にと尋ぬるに、六月めにもなりしかば好む所欲する所自然に長じ、母の乳味を吸取る事、申さば言はば凡そ三石六斗なり、次々は阿閦彌勒の御守り、當る十月は大日の御守り、四方にくわつと廣め給へば、梵天帝釋八百萬代の、御神神樂を奏し給へば、神樂の鈴がりん〳〵〳〵、りん〳〵〳〵りん〳〵〳〵、うつたり〳〵太皷皷、どん〳〵から〳〵どんがらが、どつと生れた若夷、顏見せ代々の笑ひ顏面白や。

㊃市野屋

生島新五郎

二上り出　京の土産に何々貰うた、蒔繪の差櫛桐のたう、あゝもんつくつ、俺に一代添ふ身ぢやとても、仇し此の身はどうもせ、心解櫛命ぢやゝ戀風吹かばえい〳〵な、譯ある方へ誘はゞ誘へ、行く水に引島間をこがれ出で、舟は朧に影見えて、うきを身に積むしば〳〵も、かひも渚の濱千鳥、ちりやちり〳〵〳〵、ちりとんださ、嵐に亂れさつと散りぬる面白やゝ龍田川邊に舟止めて、をばなかちぢ通れば日が暮れさうよの、鳥が鳴きさうよの、鳥が鳴ことまゝよの、余町の殿御と寢たる時の嬉しさは、さて鳥も鐘も厭はぬ、こりやどつこいどつこい〳〵都風流世界のな、なん〳〵中に、色と言ふもの凝り固つて一つの戀となら柴の柴の樞もやれ玉簾も、戀にあつては たまらぬ〳〵戀はさまゞ〳〵あるが中にさ、小野の小町はさ、譯を百夜通へとのんほえ、其の中に百夜めのな、忍ぶ夜はな、わけを百夜通へとのんほえ、とにかくに戀路のな、心うわ〳〵浮氣でたまつた事ではないたんだたんだふれとは、なか〳〵ぬれた戀のやつこりや〳〵〳〵よい〳〵、とかく浮世は濡れの眞中。

㊄狐會出端

生島新五郎

二上り石に精あり水に音あり、皷は瀧浪袖は白妙雪をふる振もよし、振返る山更に微なり、又或る時は織姫の百機たつる窓に入りて、人を助くる業をのみ、ましてや我が名もいふ聲ひく袖の眺なり、其方の空は白雲、あれこそ小原や小鹽山、今は舊巢へ歸る山、此の神の德を告げ知らしめんと現れ出て、恥かしや我が姿の眞を現し、又は國土を垂跡の方便、頃は雪降りなれや、木々の梢も埋もれて、梅も色添へ松とても、名こそ老木の若緑、空澄み渡る神かぐら、はんや神かぐら、齡を知らする此の神の行末久にと我が神託の、德を現す御代ぞめでたき。

㊅曾我五郎

山下才三

二上り我は石川や濁らねども人が濁すよの、かけうにはなにとしん參らしよ、勝山が髮の結ひぶり手替りにこのえ君千歳山、それや昔のさゞれ石、巖と成ていつまでも變らぬものは常磐木の、葉色に迷ふ人心、地を走る獸空を駈くる翼も、戀には誰も身をやつす、いや〳〵妾心とひやうし、一眼早足やつとん〳〵、二眼早足やつとん〳〵、さきの力にや縋れつ縺れつ、やととん〳〵とんとんとん〳〵、受けて流して袖返し、棒は宮口戸田小坂、そちが思へばこちも思ふよ、ほんにさ誓文しやたらほん、誠につい〳〵のつい我等も思ひそろ、思ひと戀とは合點か、君が盃つく〳〵つつてん、つけざし三杯飲めや歌へやとかく世の中。

㊆京之名所

多門庄左衞門

二上り須磨と言ふも浦の名、明石と言ふも浦の名、須磨や明石も外ならぬ、花も紅葉よ月雪の曙は、筆で書くとも盡きせぬ都ぞ面白や。

ゝ北は黃に南は青く東白西紅にそめいろの、山は都の富士なれや、麓に續く市原や、朧の清水に影は八瀨の里人、小原賤原鞍馬や貴船、あの奥山の柴といふもの、をり〳〵をり〳〵をり〳〵、折て束ねてきりゝと結んで、しやんと戴きつれた小原木を、來い來い小女郎なぜに小女郎は出て待たぬぞ、小女郎こそ來れ山越しに、戴きつれた小原木を、扨ても其方は春の花　麻の中なる糸逢、思ひ初めたは恥かしや、思ひ初めたりや浮世もいらぬ〳〵、やれさて〳〵〳〵〳〵浮世もいらぬ、緣でそろ物ちと踊ろ、父の母の〳〵父のよい子を儲けてたもれのう、上下慣れてよい殿を〳〵、聟が來るやれ聟が來る、聟殿小袴何色に染めよぞ、えい〳〵花色〳〵、褐袴著して

きり〳〵、尋常に奥の座敷におんも〳〵と寢て語ろ、おうその奥の出居から餘間の出居まで、さん〳〵さん探り廻れど、花嫁にはさん探り當らで、髭面男にさん探り當つたはつちや、恐物なんとしよぞ、りんとはねられ、たんと氣の毒しやらや〳〵しやら〳〵〳〵や、さつさしやらの戀路の心根や。

㊇若松風流

岩井左源太

二上りめでたの若松さまはよんの榮ゆる、葉もよはらんは葉も茂るよんの、枝も榮ゆる葉もよはらんは葉も茂るよんの、福原の里のよねくろは小松原通ひ、十八の〳〵君とな、君とねの日のまつ夜はよねくろ、どこで見た、見ゆるとさ、さつと見ゆるとさ、十八の〳〵君とねの日のまつ夜はよねくろ、どこで見た、見ゆるとさ、さつさ見ゆるとさ、鬢の前髪太元結のしかくまき、はでな小姓衆はどれ〳〵、あれはそれはどゝんどゑ、様のお好きとて、ちん縮緬にのほんほゝ、肩には唐梅や、唐松に唐獅子を縫はせて、裾や袂は裏吹く紅絹が、ひら〳〵ひ、さつさふれ〳〵ゆかしなつかし。

㊈濱川風流

山本歌門
近松勘之助

二上り今年渡りの伽羅ではないが、とめて寢衣の染小袖、寢衣のとめて、とめて寢衣の染小袖、濱川の女郎はお手が荒れそろなよえ、道理かな濱川繩の、でん〳〵でん出所なよえ、我が戀は〳〵丸き苧小筒に角の蓋、合間透間を合はせども　合はぬよの、しやてんはちまつかぜ〻〻様が來るやら帆が見ゆる、そこ介こゝ介合點か、苦を敷寢に舵どつこい、舵どつこい枕よんの、ござれ沖津ののほほんに、ほんにさ、ほほんにほんにさ、ほほんにほんにさ、ほんに〳〵さ、ござれ沖津のどつこい、わかれの野でしけろ、たんだふれ〳〵戀のにくさよ。

落葉集卷第四

古來中興當流踊歌百番目錄

一　山崎與次兵衛　二　こんぎやら
三　天滿出づる坊　四　おしも
五　ごんごり　六　ござうつ
七　與作丹波　八　都米介
九　馬かた　十　さんがらが
十一　阿部川紙子　十二　ちゆつちゆら
十三　づんがらもんがら　十四　君ちり
十五　さらし賣　十六　難波長吉
十七　一番雞　十八　伽羅の板橋
十九　棟上　二十　源五兵衛
廿一　なぎなた　廿二　小野村彦惣
廿三　三谷土手みち　廿四　おささ鈍助
廿五　ふくの田　廿六　大小見
廿七　下六藤六　廿八　丸ふく頭巾
廿九　福助買ぞめ　三十　有卦はじめ
卅一　順禮　卅二　次郎冠者
卅三　さい鳥さし　卅四　卯の葉かさね
卅五　八重垣　卅六　ぶんまけ孫左
卅七　髮結小五郎　卅八　からかさ
卅九　いせき　四十　新庄のや
四十一　楊弓　四十二　先陣宇治川
四十三　なんほゝ　四十四　竹馬
四十五　白樫　四十六　ふなさし
四十七　七つ道具　四十八　繁昌の市
四十九　山の手奴　五十　早さき梅
五十一　菅笠　五十二　權之助
五十三　金山間夫　五十四　岡山かよひ
五十五　馬場さき　五十六　杣山
五十七　しとゝん　五十八　四季花笠
五十九　艪拍子　六十　釣舟
六十一　三番叟　六十二　地ふく
六十三　君はしんぞ　六十四　してゝん奴
六十五　世つぎ　六十六　糸屋娘
六十七　珍内花笠　六十八　春駒
六十九　荒木の弓　七十　ぞんぞりこ
七十一　牛窓　七十二　三國玉屋
七十三　彌之助　七十四　てしやこ

七十五　だうらく
七十六　唐人
七十七　ゑじま
七十八　暦
七十九　但馬小女郎
八　十　もんつくつ
八十一　都の町青物賣
八十二　拙僧
八十三　堺のはま
八十四　梅の木
八十五　手合相撲
八十六　藤内太郎冠者
八十七　蟹川
八十八　俊乘坊
八十九　伊勢宮廻
九　十　菖蒲刈
九十一　芋の子
九十二　小川
九十三　ていこや
九十四　ほい〳〵
九十五　のんやほ
九十六　二木
九十七　まんまる
九十八　こんどや
九十九　ふくとん
百　番　さゝら

以　上

㈠山崎與次兵衛踊

木綿子吾妻うけ出す山崎與次兵衛、うけ出す〳〵山崎與次兵衛、今は思ひの下紐とけて、廓住ひの憂さ辛さをば、聞くもなか〳〵恨めしや、〳〵、聞くもなか〳〵恨めしや、せうがの〳〵これ〳〵これ〳〵しましよかの、そつこでうけ出せ三百兩、二口合せて六百兩、すつとしよ天秤、はり口ちんからり。

㈡こんぎやら踊

二上り鮎は瀬にすむ鳥や木にとまる、どうしてなう、はてなう、人は情のこんぎやら〳〵、きやらこんぎやらこ〳〵、下にすむ、やつささつさせい、〻鳥や木へ返し。

㈢天滿でづる坊踊

二上り天滿あゝあでづる坊が、しつかと〳〵握り〳〵握り墨を召すまいか、三挺に一挺のそへはさ、をり賣〳〵をり賣〳〵、をり賣の墨ぢや程に召すまいか、菅笠おやぢがしやつ面かたむけ、ゆたんのひつかけ其處さ〳〵、どうで見しよ、ぬつと出して見しよ、與茂四郎が子孫、孫三郎が跡目々々、握り〳〵握り〳〵ぬつと握り出したをゝり賣〳〵をり賣〳〵、をり賣の墨ぢや程に召すまいか。

㈣おしも踊

二上りおしも〳〵一寸おぢや、あゝもの言を、上の田の歸るとて、下のや田の田の畔のはた畔の、〳〵、畔のはた〳〵、廻るとて、小田の蛙がお禮申しに鳴いたとさ、何と〳〵、鳴いたとさ、うどんぎりしやんぎり、うぐるうぐる、うどんぎりしやんぎり、うぐるぐうぐるぐ〳〵、うぐる〳〵〳〵ぐる〳〵ぐつとも鳴いたとさ、けにもさうよの〳〵。

㈤ごんごり踊

二上りあさの川なる、白ごり黑ごり、思ひのあはひからひつ連れだつて御座れの、かうかの、ごんごりの〳〵、あづまかいからけの理兵衛殿は來ぬかの、理兵衛こそ來れ山越に、吉野まさりのよねだんべ、さつても名譽なしかたなおてきに出遭うた、すてんきう〳〵のきう。

㈥御座うつ踊

二上り蘆打つ〳〵備後の表、明日はお船の帆にかゝる、うんころすんころてんころりん、帆にかゝる、ちやうさ、帆にかゝる、明日はお船の帆にかゝる、うんころすんころてんころりん。

㈦與作踊

二上り與作丹波の仕合よしの、ふみ馬御免あづま入り、馬方なれど、今はお江戸の刀さしぢや、しやんとさせ與さ與作え、ばつぱの大小七ところ、大紋當世長羽織、振り手の衆〳〵、ふり〳〵ふり〳〵手ぶり振り手の衆、おうさ、振り手の衆、是がうき世の中山道、なりからふりからもの好きで、しやんとさせ與さ與作え。

㈧都米介踊

二上り玉のな、どつこい、井筒のな、とん〳〵、若水男、都米介むなひけだ、どんぶりかつちり〳〵ちり〳〵ちり〳〵と、ちよろ〳〵水の〳〵、ちよろ〳〵水のな、はゝんな、すめば都も、流れ絶えせぬ名所。

㊈馬士踊

二上り關のお地藏は親よりましぢや、親も定めぬつまを持つよの、かへではないかこれ與作、さつたもない事、ほてつぱらめがえ、坂ほ照る〳〵鈴鹿は曇る、さきはいと言うてははいどうし、間の土山雨が降る。

㊉さんがらが踊

二上り荒い風にもようやよやよ、當てまいさまを、遣ろか信濃の雪國へ、さあささんがらが、川ぢやざんざら柳のよいやさ、しろねが〳〵、よい手は〳〵こまの膝ぶしんがらが〳〵信濃へ遣ろか、遣ろか信濃の雪國へ、さあささんがらが。

㊀安倍川帋子踊

二上りお江戸お江戸土産に安倍川紙子〳〵、ありやこりやよい、著てはごそ〳〵〳〵と、さあんささあんえくわんこや〳〵、しやつき〳〵〳〵しやちんがら、こゝ爰までは走り出て見れば〳〵、ありやこりや戀のなか宿、さあ下せこれさ〳〵、著てはごそ〳〵〳〵と、さあんさゝあんえこつがらてくせ、天照大神おん出でなされてめでたいな。

㊁ちゆつちゆら踊

二上り烏かあかかつちりかあかあかあ、鷺ちう〳〵ちゆつちゆらちう〳〵ちう、春になろとて法華經とも鳴いとさ、法華經でんぐりかへしてさつさ〻鶯へかへし

㊂づんがらもんがら踊

二上りゆのふ峠のまご杓子さ、さつとしめかけさ、えいこの〳〵柄が長うて、づんがらもんがらがらづんがらもんがらやつてくりよ、常陸の國のつのをかに、鹽賣長者といふ人が、黄金の築土を築くならば、蓮華はちすと言ふ娘、彼等二人の兄弟をてこの樂と定めて、思ひのまゝに築くならば、難なく築土は出來たるらんよふつふなんよえ。

㊃君ちりをどり

本調子こゝな小吉めは與五へが君、たんだ〳〵すのこきみ、ちりぐ〳〵かますのふぐた君、たんだかますのふぐた君、たんだあほとこふんではおほちよこけべいてほこちよん燈火ぢや、ふやらの〳〵ふん〳〵ふ、ふやらの〳〵それはえ、ふやらのそれはえ。

㊄晒賣踊

二上り晒じま晒高宮晒さらせば娘は黑む、布はなるほど〳〵なるほど〳〵なるほど〳〵なるほど娘は黑む、白くなるほど〳〵。なるほど〳〵なるほど〳〵なるほど力にまかせたかつち杵、娘はくろむ、ゑじまおれを見て何故に顏ふりやるぞ、ゑじま高宮なんとしよぞ、ゑじまは生れつき。

㊅難波長吉踊

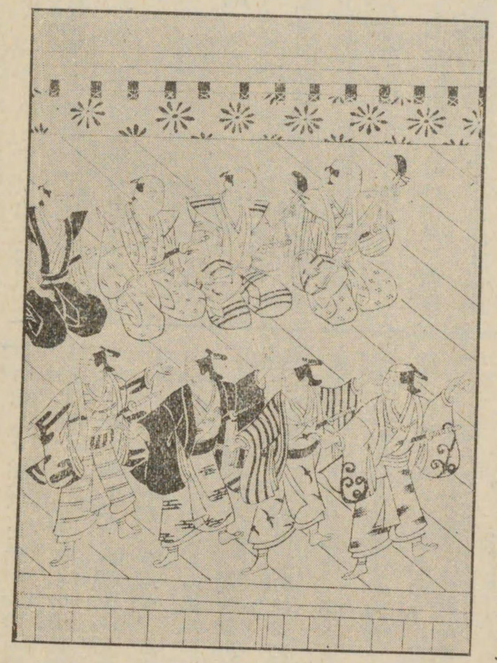
二上りえい〳〵〳〵難波の梅屋由兵衛、心は入江の海の濁り淀みて、すめども終に蘆のかたほのほに現れて、引かれ出づるや心の鬼よ、せめて百兩の金ばかりかや、いまだ幼き長吉を殺そと、巧みあるとは夢にも知らで、主の使の悲しさは是がな此の世の名殘かや、えいこりや此の世の名殘かや、長吉久しの姉に逢はしよぞ、さあこちおぢやと、いふに欺され連立ち行きて、長吉さきの物はあるか、なんの事でござんす、金が懷にあるかと言ふ事、いや〳〵なんにもござんせん、出さにや殺すが、一度で出せと、三度かはらけ程な目をむきだせば、是は旦那の爲替の小判、命助けて助けてたべと手を合すれば、かしましい、殺しはせぬぞ、あゝといへども、奥の納戸へ脇差とりに、行くを見てから身も震はれて、むざんや由兵衛は長吉を捕へ、さあどうする最期ぢや、あゝ悲しやな、こゝに姉さまござらぬかいの、あら怨めしや、怨み歎けどつれなや梅は、聲を立てたら殺すといへば、泣くも泣かれず、かはいやな只をし鳥の、はごにかゝりし野末の井戸の、そこにありとは夢にも知らで、親子親類返せ返せ長吉を返せ、長吉返せとな、夜一寢もせで迷たえ、

㊀一番鶏踊

二上り坊さま〳〵、ちと嗜まんせ、内にや女房子どもも無いものかなんぞのやうに、性悪坊さま、一番雞の鳴く時は、こと〳〵〳〵と叩き開けて早出るとの〳〵、内にや水がつくか餘りの事いの〳〵、さつても〳〵餘り輕忽。

㊁伽羅之板橋踊

本調子薩摩の鹿兒島の長吉どのは、伽羅の板橋を渡るとてこえた、ほとんどえいで其の比は花見月、櫻せたらおうたる鯰見つけた、長吉どの長松どの長吉長松、ちよろ〳〵めきがあげておとして、藤の花をしつかとからげて、さつさ姉の土産に。



見たや、あの子生んだる親見たや、ちこ助さあやるぞえい、松に小鶴が舞ひ遊ぶ。

㊂棟上踊

二上り四本々々柱をいよえおつ立て、大工のちこ助これのおたけに惚れましたさ、きりやしやつきり、きりしやつきりき〳〵、ちこ助のこぎりこぶくらやつこりや、こりや〳〵ひきまはし、一筆書いてはやりがんな、さてなう親見たや、あの子生んだる親見たや、ちこ助のこぎりこぶくら、やつこりやこりや〳〵引廻し、一筆書いてはやりがんな、さてなう親

㊃源五兵衛踊

二上り高い山から谷底見れば、薩摩源五兵衛は目に立つ男、のほほんにほ、しやれた鬢付茶筌髪、寢て又起きても茶筌髪、ずんど窪んだ塗笠、おまんはどこへ、播磨の明石へ、蛤踏みに〳〵、蛤々々踏みに、てぐり〳〵〳〵舟の、此の舟に乗せた源五兵衛きり〻と廻つて望んだ、播磨の明石へ、蛤踏みに〳〵はまぐり〳〵〳〵踏みに、てぐり〳〵〳〵舟にの、此の舟にのせた源五兵衛、一萬八千寶藏、えい〳〵やえい〳〵代の榮え。

㊄薙刀踊

二上りさてもそなたは寛濶人か、眞紅下緒の長刀、おつとり揃へた薙刀、素槍〳〵〳〵〳〵、槍々素槍ちくとうさ、八方搦手蜘蛛手鎌槍十文字、御代は〳〵一か二か三か四か、七つ道具で治めておつとり揃へた長刀。

㊅小野村彦惣踊

二上り城州々々小野村の彦惣を見たかえ、頭茶筌太元結で、細元結で、太元結細元結〳〵〳〵ひきしめて、地下で一人の伊達男え。彦惣は何處へ、山へさ、山へ上れば茨やとめる、茨やつとん〳〵放しやれ、やつしてさ、日が暮れる、彦惣〳〵彦惣の伯母御の歌うて臼挽きやるいのめゝかまえ、臼の目ぢやもの、かまりよかい、彦惣〳〵〳〵〳〵、彦惣は地下で一人の伊達男。

㊆山谷土手路踊

二上りえい〳〵どつこい、長い刀を指いたはおさき、肩肱怒つてやつしつし。對の挾箱、次どつこい槍振ぢやたてたえ、山谷土手道な醉うたとさ、醉うたとさ。足や千鳥足、西は田の畦、危い合點ぢや、〳〵危い〳〵。危うてならぬえ。も一つかへして足や千鳥足、西は田の畦、危い合點ぢや、〳〵、危い〳〵危うてならぬえ、ぬれにや目のない金山、どつこい男え。

㊇お先鈍助踊

二上り おさきさ、ありやらんりやんりや、唐崎の、してててんやつこの、ぼつ立てろ、まかせておけろの、よいやさ、これは豊後の、ありやこりや槍梅の、槍梅豊後の、おさきで石づきつかんで、すつ〳〵もぢりて振れ、とんや小肱で振れ、とんやつとうやとうしやんぎり〳〵〳〵、しやんぎり太鼓の、ずんでんどんすすの鈍助か、ありや上の町下の町、中の町ははれぢやほどに、胸髭摩つてすつ〳〵ふらいの。

㊄福之田踊

二上り さまが舟かやかんべざき沖に、ゑじまの姫むろは福の田〳〵、あの丶かんす〳〵よのうけてのながくのすはごんのごゝのすけ、おしやりやさうでござる、福の田〳〵、あの丶かんす〳〵よのうけてのながのすはごんのごゝのすけ、おしやりやさうでござる福の田、よい事〳〵福の田。

㊅大小見踊

二上り 鹿島浦からなう、浦から〳〵寶船が着いたとさ、顔の若やぐ年男、よい事〳〵、よい〳〵こと〳〵、よい壽を祝うて事觸が參りた、是や此方へ御免なろ、まづ來年の惠方は申酉の間をば、年德神と定めて庚辰の年始め、卯の十六日が豆まきだ、わつとつかんでよいやさ、鹿島踊をばちゝちつと、ちと〳〵ちつと踊拍子にかゝつて、これや此方へ物問ふ、まづ正月は大かの、はて大とも大とも、二月小三大四五小々だ、それ六月は大よの、さてさてさて〳〵どつこい、七八月は小と定めて、九月は大の菊月、十月小は合點か、霜月師走は大々、極めて〳〵しつかと極めて、大小けんと定めた。

㊆下六藤六踊

二上り えいどつこいえい〳〵、えいこのえいとんな、聟が來るやら下六と藤六とお樽もつて參つた、おつ取り揃へた御祝儀、霰まじりの霙酒、春はめでたいと屠蘇酒ひつかけて、花橘やれ宇治水、えいとんな、うんえいとんな、池田伊丹の下六と藤六が、晝は前垂玉襷　夜は綸子の三重廻り、ちんたの酒やしなの酒は聟殿のお好きぢや。

㊇丸福頭巾踊

二上り 何時もより賑ふ門の二柱、でつくりと幾代重ねて毎年の、毎年の惠方からとて、夷子と大黒とふつくな身でござつた、祝うて釣竿さあ參ろ、お先へござれ、來るか後から〳〵、後から見れば丸福頭巾で〳〵、頭巾で〳〵にこ〳〵〳〵、丸福頭巾でにつこりと、今朝の笑顔は尙でつくり、尙につこり、いとしえ。

㊉福助買初踊

二上り かどは一五三飾り藁、さげて物申、どれ〳〵〳〵、どつこい、どれ〳〵どつこいどれ、當年の惠方より福助が買初ははめでたいな、倉開き棚下し皮の財布を肩にひつかけて、古金買はう唐金買はう、文の上書起請の下書買ひましよ、よい〳〵伽羅の焚きがら買はう、やれ買はう、を丶買はう、心中のよい娼達を、千年も萬年も萬々年も、正月買と祝うた。

㊊有卦初踊

二上り 花は四季咲く、やれさて都は錦、野山續きて一ぱいに、えいずつしりと、とことんとことん〳〵、つんと〳〵つ丶んつと丶んと、とこ〳〵〳〵〳〵〳〵ずつしりと、有卦七代の年八卦、正月始め事始め、やれ十七八も有卦始め、火性はつらりつとことんとこと〳〵つんと〳〵つつんつと丶んと、とこ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵ずつしりと、始めて開いた扇子の要は、しつかと〳〵末繁昌え。

㊋順禮踊

二上り よい〳〵〳〵肩にや笈摺ひつかけて、あえいとこな、あなんとこな、つんつき揃へた棒の手、きりりん〳〵きり〳〵きり〳〵、りつとまはつた順禮衆、是は播磨の書寫寺よさ、だん〳〵揃へて登つた、えい〳〵〳〵えいえいえい〳〵えい〳〵〳〵、諸願な成就珍重〳〵、つゞいて登つた、よいやさ、めでたいな。

㉝次郎冠者踊

二上り千石のよねほね、萬石のよねほね、お庭にすつしりつゞいてまゐれ次郎冠者、けに尤もさうよの、目近に持てさあ參ろ、いそ〳〵勇んでさあきり〳〵、いそ〳〵勇んでさあきり〳〵きり〳〵參れ、さあ參ろ參る〳〵、參る〳〵、さあ參ろ、鳥は鴈鴨雀鞠鶴のはし、さつても言うたよう言うた、參る〳〵參る〳〵さあ參る、花は紅梅白玉水仙花、さつても言うたよう言うた、けに尤もさうよの、揃へ〳〵揃への扇は末繁昌え。

㉞さい鳥さし踊

二上り鶉々鳴くなる深草野邊の、根笹押分けかき分け〳〵、よく見れば、人目せきれい打ちとけて、ありや山雀のおの〳〵おの〳〵、おのがひきよくの羽も輕く〳〵、爪先沈めて〳〵、つごもの〳〵つごもの〳〵えゝえ餌差竿え〳〵、けさ初聲はしをらしや。

㉟卯の葉重踊

二上りにほん目出たい門に松竹飾り立て、若水男年男、卯の葉重の著衣始、やれ御馬乘初弓はじめ、このやつつる〳〵つるやつつるつ、男鶴女鶴つる〳〵つる〳〵、やつつる〳〵、松は變らぬ此の殿の御繁昌、扨ておめでたいよの。

㊱八重垣踊

二上り小倉くわぜんちよこ〳〵、遠いのおもてからござれ、じつと引きしめ、やとん〳〵背戸は八重垣、大戸のくろゝの、潜り戸、くんぐり〳〵くんぐり〳〵、なんぼくゞりくんぐりくゞりよい潜り戸くんぐり〳〵くんぐりくゞりくんぐり、くゞつてだん〳〵めでたい御祝儀。

㊲文まけ孫左踊

二上り坂の下には一夜も嫌よの、ぶんまけ孫左がお手枕、水は出てゆく山吹や、そつこでしよげるいよんの、あいしてさ、寢覺にや鹿よ鹿の、聲よんの、あの峰通るはこつちん〳〵、下つて上つて、上つて下つて、來いよころ〳〵ころ〳〵ころ〳〵ころ〳〵ころ〳〵ころび落ちて逢瀬もあらば、あぶななかたやどつちかひかたは山田〳〵、沼田かふけか〳〵足が引かれぬ、逢坂え坂の女郎衆と。

㊳髮結小五郎踊

二上りこい〳〵小五郎、髮結ひさしてやつと束ねてや、轡かいとり、大津八町でむつきくどん〳〵新酒こざけは小才覺もな、どつこいなろかえ、關の女郎衆はやれこりや馬の口とる諸手綱、若衆見かけてな、どつこいなんなんなん〳〵なん〳〵やつこのやつと束ねてや。

㊴傘　踊

二上り婿殿はなづくべいとて、夏は何をみやけに、ずんど凹んだ塗笠、めそなら〳〵、いつそ尖笠細笠、朝日のやつる〳〵〳〵やつつるつ〳〵、そりやさせ男、やれ〳〵男かゝのゝ市大男。

㊵ねぜき踊

本調子われは巖にさ、打ち寄する波、はつと立つ名はゐぜきの竹の、籠のや目繁きやなか〳〵あたごぞ、逢はで止みなん憂いぞつらいぞ。

㊶新庄のや踊

二上り屋屋虎落のや、だん〳〵〳〵だら助の細帶、さつてはたぐつて三重廻る、このよいかどのやしんじよやのさ、竹ごしによつくるよ〳〵よつくる〳〵よつくる〳〵〳〵とくる〳〵〳〵と、寄りたけれどもまづ通るそれはえゝさつてはたぐつてへ返し

㊷楊　弓　踊

二上り御代はめでたや袋に弓を納め納めておいて、いざや矢をとれ一百手、君の羽風になどつこい一度は落ちよ、的はたまやのな、どつこいねんね〳〵ねん〳〵〳〵音も冴えわたる、紋は花桐おれとそなたは松、どつこい〳〵

松竹ぢや。

㊸先陣宇治川踊

木調子先陣宇治川ずら〳〵ずつと、まくりこむ勢ひに駒が勇む、のほらほ〳〵のほらほゝ〳〵、はんにやしとてとさ、さあしとてとさ、勝つて冑の緒締の巾著金銀のは娘の結納に受けとつた、おゝ大分の〽駒がいさむへ返し。

㊹なんほゝ踊

二上り君は二階のはん箱梯子やつこ上したてかんじり〳〵、かんじり通うてござれ、ずんど上りつめては、下りぬ氣だ、小娘を見たか、年はなんほゝゆかないが、なんほゝなんほゝ〳〵、やれ床とつてはなんほゝ、なづみかゝる、おゝ忍びの〳〵隱し殿を見たか、やつこのほしたて、年はなんほゝゆかないが、なんほゝ〳〵〳〵、やれ床とつては、なんほゝなづみかゝる。

㊹竹馬踊

二上り五十三次に隱れない男、よゝをこめたる竹馬を、さて〳〵見事に飾りたて、手綱かいくりしつしどう〳〵、とゞんどどつこいせと、どつこいせ、朝の出がけにや小室節、出がけにや朝の、朝の出がけにや小室節、一こゑ二ふし三藏や、いうたりつん〳〵つれだち、さあ〳〵行くべい〳〵、轡と鈴がりん〳〵がら〳〵りんがらが〳〵はいどう〳〵はい〳〵はいどうし〳〵、あつばれ御馬は上手が上手と、乘つたか乘つたぞ、それそれ揃たえ。

㊺白樫踊

二上りえい〳〵三熊野の那智のお山を今朝こそ見たれ、順禮衆札をちやうど打ちや納めて、岩の狹間の白樫を〳〵、國の土產に習たよ棒の手、そつこで一振やつとう〳〵、やつとう〳〵とう〳〵〳〵〳〵やつとう〳〵まゐろ、とう〳〵とう〳〵まゐろ、岩の狹間の白樫を〳〵、國の土產に習たよ棒の手。

㊻舟指踊

二上り高砂や〳〵此の浦松に年を經て、木蔭の塵を一さらへ、つまげてからげて〳〵たかつまとりてまぼろよ走り出て、てゝらを待ちやれ、さあよいさ、是さよい〳〵、世の中おめでたいよの〽木蔭の塵へ返し

㊼七つ道具踊

二上りおささささき〳〵、さあさき〳〵は振手の衆、とろり〳〵と振らねばなんよさ、つぎつぎ〳〵は、あれ助よい〳〵、是助よい〳〵、浪助關助臺笠はもち助、たて笠はでく助、戀のどつこいだて助、しやれた目元でひとひねり、今度の〳〵〳〵今度の藪入にや裏からござれ、裏の藪から妻戸から、なりからふりから物好で、殿をめがけて振るは大鳥毛。

㊽繁昌之市踊

二上りめでたいな、あゝめでたいな、われが住所は都の辰巳稻荷山、零れかゝれる玉霰、是の殿御に逢ひとて見とて、あの山越えて此の山越えて、えいさんさ、さあさえいさんさ〳〵君を思へば音羽の瀧の、瀧の白糸いといし、いと〳〵いとしよの、いとしよの〳〵、いとしけりやこそ繁昌な市で、此の酒に醉うたとさ、こん〳〵こん〳〵の盃は、千秋樂〳〵萬歲樂と祝ひ納めた。

㊇山之手奴踊

二上り薩摩　ア、のいちのやは、どつこい三ケ國の伽羅よな
どつこいな、ななん〳〵名も扨てよいやな〳〵、きやら
〳〵伽羅男え、竪から見ても横から見ても、はつアよい
男え、おさき一番手の奴、上髭ぴんとした、しやんとし
た、つりりん〳〵つりりん〳〵、つりりん髭のなが刀、そ
れ八文字うから〳〵浮かれて、あとからうか〳〵、うか
うから〳〵浮かれて後から、うか〳〵うか徒歩ふる、手
を振る伊達を振る、爰は山の手のよい〳〵奴の出所。

㊄早咲梅踊

二上り開き初めたる早咲梅のはんなりと、袖褄揃へてふつ
くりと、聞いたか〳〵えい〳〵えい〳〵太郎冠者、御前
にねんの早々と、早咲梅の鶯が、きりきつてう〳〵き
いてうきりきりきつてう、きつきよ祝うた太郎冠者、梅
の花笠はどうでもさ、かうでもさ、どうでもかうでも、
えい〳〵太郎冠者。

㊄菅笠踊

二上り東から來る花嫁嬉し、おれが目當の菅笠嬉し、ほん
に嬉し、お伴にとつつくだて助が、捩らす〳〵、捩らす〳〵、やれこ
りや捩らす、どつこい捩らす〳〵、腰を捩らす紅葉笠、
眞丸濃うて著ようて、さまが菅笠百萬貫。

㊄權之助踊

二上り若衆さんさ、忍ばばさ、若衆忍ばば寺通ひ、なんで
おぢや、そろ〳〵ねん念者がおぢや、そろ〳〵ねん、さ
ても久しの權之助、あけのまりの、さけのまりの、あけ
のさけの、やりはりまりを、おりや踏み習うた、おれが
踏まいで、それを誰か踏もぞいの、お手打ちかけて、ほ
ろと泣いたをいつ忘りよ。

㊄金山まぶ踊

二上り佐渡の山まぶ山越えて、ぜん衞門さんが、とゝほん
かとゝおん〳〵おぢや、ぎんずる〳〵ずら〳〵ずつと竹

流し、竹に花咲くぜん衞門さんが、とゝほんがとゝおん
〳〵おぢや、八百丁の轡で千ざを萬ざを、ごつほり〳〵
ごつほりこ、踏みや習うたに、ごつほり〳〵ごつほり
こ。

㊄四岡山通踊

木調子やんれ白波の打つや皷の川柳、水に揉まれて根こそ
入りけれ、岸影の花や櫻や藤や、打つえい太鼓の撥や川
空木、雨の拍子も五月雨も、賴む汀の田歌の音頭、拍子
を揃へてはやせども、えい勇みてうつる面白や、植ゑい
〳〵早乙女、笠買うて着しよにさ、笠買うてたもるなら
ば、猶も田をば植よにさ、岡山通ひの六丁小早に艪を八
丁立て、朝のおまへの三ぼが瀨戸を、小女郎戀しきとな
歌うて名のりてお漕ぎやるはえい、この小じやくし小娘
こせんぞかこさいかかゝいかこぐる松か小女郎かつがわ
つがわ〳〵のんえいよほ帆ではやらいで歌でやる、君を
思はで通はりよか〳〵、どこで見た、ぞつとしたとよえ
い〳〵、君は春咲く梅の花ぢやとよえい、薫ゆかしきと
りなりは、ありやゝこりやと、えい〳〵さつさ、えいさ
つさ、萬歲ぢや〳〵千秋樂〳〵ぢや。

㊄五馬場先踊

二上りまつは豐かに大手馬場先繫ぎ馬、がいに冷たい今朝
の雪、殿のお馬は錆月毛、連錢葦毛鹿毛糟毛、しと〳〵
打てば駈けあふり、お江戸育ちの髭々男、おん馬の口を
しつかとさ、つりりん〳〵髭男、つりりん〳〵髭男、つ
りりん〳〵〳〵つりりん〳〵りん〳〵りんとは
ねたる髭男、繫ぎ止めたよ戀の關札。

㊄六杣山踊

二上りおぢが杣山から貰たよ樫を、槍にすけたる十文字、
立てゝ並べて、なあどつこい、なあどつこい、長押をよ
けて一だん〳〵〳〵、やつとう〳〵二だん〳〵〳〵、や
とゝう〳〵一だん〳〵二だん〳〵二だん三だん、だん
〳〵そろへた石突よ、する〳〵〳〵手並を揃へて、寄す
る汀の駒返し、はかたごぶぞり人にやかまはぬおりや

好いた。

㊺しとゝん踊

二上り　尼が崎からこつちの聟殿〳〵、くるとさしつしろかい早めて一丁の二丁の、三丁の四丁の、五丁の六丁小早花の繪島へ押せやれ男、えどやつさ須磨や明石の月を見しよ、しつとん〳〵しつとん〳〵しつとん、しとゝん〳〵とん〳〵とん〳〵、とうからから艪の音がした、花の繪島や、やんれ押せやれ男、えどやつさ須磨や明石の月を見しよ、しつとん〳〵〳〵しつとん、しとゝん〳〵とん〳〵とん〳〵、とうからから艪の音がした、嫁が馳走に人の見る目と、磯の海松布が肴ちや。

㊺四季花笠踊

二上り　關の小萬は龜山通ひ、色を含むや冬籠り、まづ立つ春の祝ひには、縫ふてふ鳥の花笠、夏は川瀨に網代笠、秋は踊りに菅笠を、揃へてそれ〳〵小萬・踊りだせ小萬、てん手拍子もそん揃た〳〵、揃た〳〵そろ〳〵そろ〳〵月の笑顔に照つたりや紅葉笠、そりや加賀笠よ〳〵、冬は雪見にかづく肱笠、花の都の御所塗笠は、なりがようてさて〳〵どつこい着よござる。

㊻艪拍子踊

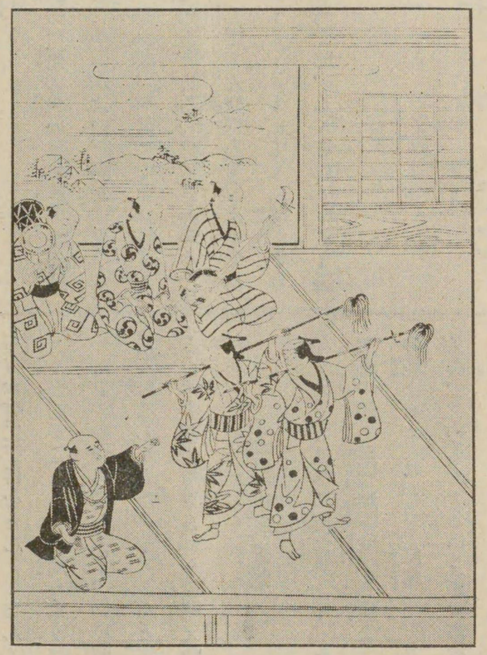
二上り　えい〳〵和歌の浦こそそれしての、さて第一名所うんさうだぞえ、さつと滿つ潮寄せ來て早の、片男波にぞ乘りくる舟の、艪は一丁の勢ひ〳〵、競ひに競うて漕ぎ寄せた、しんとろとろ〳〵〳〵とろりん〳〵とろ〳〵〳〵、おつとる艪櫂にさ、船歌あれから是まで潔ござる〳〵、妹背鹽濟。

㊼釣舟踊

二上り　沖に漕がるゝ女舟を見たか、おつと梶を枕に艪櫂をさ、立つる〳〵立つる〳〵波立つる〳〵、女波寄すれば男波も寄する、とかくや男波はやよいこいこい〳〵、今宵はどち枕、おつと梶を枕に艪櫂をさ、立つる〳〵立つる〳〵波立つる〳〵、女波寄すれば男波も寄する、とかくや男波はやよいこいこい〳〵、今宵はどちまくら。

㊻三番叟踊

二上り　喜びの文をえて、丁度參つた聟殿、勇みて末廣扇御祝儀にしよぎつく足元見扇も一つ見、あふぎ〳〵〳〵さしあふぎ、鷺足する〳〵張肱扇で、拔足揃へて揃へて〳〵福々福ぢや〳〵、長者〳〵福々福々福々、男は大々福長者の花聟ぢや、えい〳〵〳〵えい子寶の、この幸心に任せてめでたいな。



㊼地福踊

二上り　めでたやな、めでたや〳〵えい世の中の米俵、心安くも抱へた、地ふくでき助が納めた俵を、御倉にずつしりと、つめたか〳〵米が袖、のつしりとりと似合ひます、色ます〳〵色ますこ米が目に附く〳〵、そりやえい〳〵こと〳〵えいこと聞きます、ますますこつちの寶ます、黄金の桝で米計るんよの、めでたき御代はたんだにこにこやかに米のお山。

㊽君はしんぞ踊

二上り　君は新造の乘り心さよいよえい〳〵君と我と、我と君と引き寄せてはよるよるさ、男は花の都入、づに乘つた、乘つて來た〳〵舟のや、宿の娘は小手招き、えい袖をかざして表の潜戸のくろゝの穴から〳〵

から〳〵から〳〵そこしんから〳〵顔が見たさに戸開けて、そこせいちやうど一ぱい君はよい酒。

㊃四 してて ん奴踊

二上り五丁さきから振出す肩の、裄の長いはお國の小小姓色はまつ〳〵黒、黒いがどこやらがよい、靜かに見ゆる奴の〳〵〳〵、管槍をひろどれば、何尺〳〵なンぼ〳〵何尺なん〳〵なんぼの何尺、こゝころつけてさあ參ろ、してて ん奴が手の内〳〵、してて ん奴がしてゝん手の内〳〵、してて ん〳〵から〳〵〳〵〳〵してゝん奴がすりさげ男、國に隱れない大介萬五郎、おゝそれ〳〵〳〵隱れない。

㊃五 世繼踊

二上り お江戸通ひに世繼が出來た、やつとうお名は加賀に菊酒、お江戸のまん鉢、すんど飲めばよござんす、吉六酌とれ、合點だ、金銀の盃におさへた、まつかせ〳〵つぎめぢや〳〵世繼〳〵〳〵、世繼繼目はめでたいな、顔に色增すこれ繁昌〳〵〳〵。

㊃六 糸屋娘踊

二上り本町二丁目をとん〳〵とん〳〵とことん、とことん〳〵とんとことん〳〵通りたうはないが、糸屋娘は二十一二十、やつしつし〳〵、姉に望みは少しもないが、妹見る目はしんとろ〳〵、とんと親を見る目は猿眼え、さる〳〵さる〳〵さる〳〵猿眼え〻姉にのぞみ返し。

㊃七 珍内花笠踊

二上り さても見事に揃たり〳〵、そつこで振出せお手廻り大事の前の居合腰、すよし振よし裝もよし、みよし吉野の花よりも、えい〳〵紅葉よりも、えい〳〵えいこの〳〵〳〵、こつちの〳〵いまがする事を珍内が見附けた、大かい事を言うたりな、な言ふぞ珍内ない〳〵ない〳〵酒盛ろぞ、珍内酒は下戸なり情でないぞ、そこらを是非とも〳〵そこらを〳〵〳〵是非ともおつぴしけ、やごゑでまつかせ、やごゑでふりやれ、やつとん〳〵〳〵

殿のお立ちにお供花やか。

㊃八 春駒踊

勇む春駒引き連れ、千疋も繫いで自慢での、しやなら〳〵しやなら〳〵れんな紅裏、誰だ樣だ、馬鹿やつた、づきんちやりちりちり〳〵ンちん〳〵ちんなとりなりで、おつとまかせの、よい〳〵〳〵、振よしや〳〵、ぬらりひよ、誰もかれもめつけんしよ、こゝもとでえい。

㊃九 荒木弓踊

君は長押のや荒木の弓よ、引手數多仰せのあらば、はつと答へてよん所、はりよやひよや〳〵はりよや〳〵、はり〳〵はり〳〵弓張月のさまは三日月よい〳〵、どつこいよい〳〵、どつこいよいござる、せめて今宵は有明のさ。〻はつと答へてよん所へ返し

㊃十 ぞんぞりこ踊

木國子麻の中にも三度は寢たが、麻が物言はにや名も立たぬ、ぞんぞりこぞんぞり〳〵ぞんぞり小芋よ〳〵、ぞんぞりこの芋よ、どの子がいとし、負うたもいとし、抱いたもいとし、かたくまの小女郎は猶どつこい猶いとし、ぞんぞりこぞんぞり〳〵ぞんぞり小芋よ〳〵ぞんぞりこの芋よ、負うたもいとし抱いたもいとし、かたくまの小女郎は猶そつこで猶いとし、ぞんぞりこあすはとう。

㊃十一 牛窓踊

木國子牛窓のえ觀音堂の傍でえ、どつこい是は聞いたぞや今朝のや刻を打つ、どう打つ喃、はて喃時の太鼓はのほほん〳〵、おででんがら〳〵、おででんがら〳〵おででんがらでん〳〵からりの、でんがらりのおででんがら、音も聞えてさらりつともえいよえいよえ、どう打つなう、はてなう時の太鼓はのほほん〳〵、おででんがら〳〵おででんがら〳〵、おででんがらでん〳〵からりの、でんがらりのおででんから、天下打納めおめでたいよの。

㊃十二 三國玉屋踊

二上り三國玉屋の新兵衛を見たか、三國一のやさ男、まるで〳〵繻子の鬢付刷毛長に釣鬢〳〵、なぜに小鶴は出て待たぬぞ、さつこのしよ、聞けばたらふくつるてん〳〵だらふく〳〵たんたらふくつるてん、ふくつんゆふはかうしにまつのをの新兵衛どの〻さつこのしよへ返し。

㊂彌之介踊

二上りえい〳〵〳〵是から先はお先手をふる長刀〳〵、お先手を振る長刀、さんやれ〳〵〻えい〳〵〳〵是から先は宮城野に咲く萩の花〳〵、宮城野に咲く萩の花、さんやれ〳〵えい〳〵〳〵、彌之助〳〵、寒そにこざる、火桶やりたや炭添へて〳〵、火桶やりたや炭添へて、さんやれさんやれ。

㊃美濃國てしやこ踊

木調子美濃の國にて妻持ちおいて、さつこの、いよこの、九重の花の都に住ひすれば、てしやこ、雨は降らねどみの〳〵、どつこい〳〵みの戀し、ゆかしてならぬは、てしやこてしやこ、てしや〳〵〳〵てしやてしやことしよ、まだ〳〵雨はなんな降らないにさ、みの戀し、ゆかしてならぬは、てしやこてしやこてしや〳〵〳〵てしやてしやてしやこうとしよ。

㊄だうらく踊

木調子いとし殿御は破魔弓はじめさ、あの道樂め、むかひこよねが羽をつくにの、手鞠つくにの、よいつく〳〵〳〵にはつ天筆和合樂とぶつつけた、招く袂に文や玉章袖の内は文や玉章、あの道樂め、むかひこよねはさ、やれこりや羽をつくにの、手鞠つくにの、つく〳〵〳〵にはつ天筆和合樂とぶつつけた、招く手元に文や玉章、袖の内は文や玉章見たか。

㊅唐人踊

二上りいきにて〳〵、するちやえんちや、するちや、すいふいちやういさらこわいめさはんやさそうわ〳〵ううちたるまたひさらきこいさらこわめさはんやさそうわ〳〵うあう〳〵。

㊆るじま踊

二上り繪島岬に帆を卷きかけてどつこい別れの小手招き、君に廻らば、さつさ押寄せ漕ぎ寄せならばよえ、それ〳〵姉のおまきはもんやと契る、妹おなべはよきちとしよけろ、はて其方をどつこい、をどつこいおん〳〵思はゞさつこりや碇をぶつこめ、まつかぜ押寄せ漕ぎよせ〳〵ならばよえ、はりはどつこい、あみでせまつかぜ。

㊇暦　踊

二上りやたて〳〵めでたや、こちのやの寶ぢや、元服よしの色男、續く日數を輕くかたげて、暦大經師暦、二十の殿御に、十九のおんお方、十九のおん〳〵お方、やれさてしつくりと〳〵、くり〳〵くり〳〵しつくりと〳〵、嫁入聟取復日大明、やら〳〵めでた。

㊈但馬小女郎

二上りたじま小女郎ありやこりやといのにのぎよのふだわいの、見れば其の日のやつこりや祈禱となるわいの、ありやこりやといのにのぎよのふだわいの、見れば其の日のやつこりや祈禱となるわいのなるぞ。

㊉もんつくつ踊

二上り今津海津に朝通ひさ〳〵、蒔繪の差櫛桐のとう、もんつくつ〳〵、もんつくつ〳〵朝がよひさ、蒔繪の差櫛桐のとう、もんつくつ〳〵もんつくつ〳〵朝通ひさ。

㊀都の町青物踊

二上り都町々に賣つたる物は何々なんぞ、青菜小なもみ大根〳〵〳〵、柚や生薑や茗荷の子、唐辛やほうれんさう白瓜から瓜あこだ瓜、西瓜の核は赤核黑核もござんす、四五寸伸びたるあさつき、さつても言うた、よく言うた松茸は見事ぢや。

㊁拙僧踊

頭圓めて浮世を輕く、拙僧本意にあらねども、門々で貰ひまする、鉢の米の情に親をはごくむ旦那、一重に拙僧本意にあらねども、今日の釋迦の御弟子とおぼしめし、見す〳〵某を佛菩薩の化身とて、もろ〳〵の亡者を弔らふ旦那、拙僧本意にあらねども、思ひ忘れぬ娘盛を好いてきた、これが誠に拙僧本意でござるよの、是非ない人目恥かし色いろがよい合の手〻一錢や二錢や報捨を賴むと夕暮に、兎唇が談義はかによらい、首筋元をやしろうて、なゝすのけんかんへれそでつかんで、へめころせおゝよとろしや。

㉓堺の濱踊

二上り堺の濱にありやこりや、流れ枯木が棄てゝある、或人の申されしは、目や節や江戸や木曾や都にやない、定めて〳〵きん木目細かにござる程に、唐木でござるべんよの、さんがれ。

㉔梅の木踊

二上り昔より賣り始め候、梅の木村の和中散、君の病は思ひか戀か、外の藥は定劑でござる、こちの家にはじよさいとてはござらぬ、じんじやく胸虫こはり腹、酒の二日醉には娼や若衆の、やとゝんとん〳〵寢顏で呑まんせの呑まんせの〳〵、萬の虫に第一の藥ぢや。

㉕手合相撲踊

二上りよい〳〵〳〵お待ちやれ、やつとんとろ〳〵とろ〳〵と、御前かゝりに振り出す男、してゝん立がみ力自慢ゆりかけ〳〵、幸嵐にきり〳〵、やつきり〳〵きりりと廻つて、しつかと結んだ力帶、一夜なれ〳〵帶買うて取らしよ、それ振れさ〳〵、帶買うて取らしよ、解けて亂れて、やんれ〳〵それ〳〵〳〵男勇んでさ、すすんでさ〳〵繻子の鬢付、やととんとろ〳〵〳〵〳〵やととん〳〵〳〵とろ〳〵見惚れて優男、國で隱れない、さつても見事な大い男え。

㉖藤内太郎冠者踊

二上り藤内太郎冠者次郎冠者でござる、日本一の御機嫌に立て舞をぞ舞うたりける、振を揃へてどりやどこの　そりやそこでの、さらば舞へ、太郎冠者えい次郎冠者、さまと並ばゝ雛の殿よ、並べて顏を〳〵、顏を並べてにゝにつとも笑うた、こつちのや〳〵こつちの〳〵よい殿え俺と其方は二重の帶よ、其方はそちらへくるりと廻りや俺はこちらへくるりと廻ろ、手先を揃へてとん〳〵、とん〳〵やととんととん、殿さまの二重帶締めて括して、しつくり〳〵力帶、結び止めたら猶よかろえ。

㉗蟹川踊

二上り蟹川を渡るとて、戀の文を落した、蟹らは知らぬ川なし、する〳〵出る月をえては、お手を引き合うて、しんとろ〳〵とろ〳〵〳〵とろ〳〵とろ〳〵〳〵〳〵、たら〳〵おりで休んだ、俺は其方を忘れまい〳〵。

㉘俊乘坊踊

二上り大和でんまどつこい、してから〳〵都がとまりで、おんぢやり申せよさ、のうようほんにほんにお釋迦の堂供養、俊乘法師の後をつぎ、檜のお笠で鉢の子手に持ち、都の町を殊勝らしう通れば〳〵、あれの乳母も爺も父も、妻も姉も妹もちよき〳〵ちよき〳〵ござれの〳〵、ちよきりこ〳〵ちよきり〳〵〳〵ちよきり〳〵ちよともぶん出した、むな木かまつかせ山家奥より横抱きにと、やれ〳〵でつくり坐つた楠。

㉙伊勢宮めぐり踊

二上りさてもえいしやさ、見事な天照神の、けふ吉日の宮廻り、後先揃うたら、さあ廻れ〳〵やまは廻れ風車、廻れ〳〵ばきん氣の藥、根から葉からそこ眞實から、浮氣がまし增ぢや、それさくるり〳〵くるり〳〵くる〳〵〳〵、それはえ春はどつこい伊勢參宮。

㉚菖蒲刈踊

二上り千代を〳〵重ねてえいえてこい、また毎年の菖蒲刈所は名に負ふ廣澤の、池の〳〵菖蒲を、ちよん〳〵きり、

〳〵ちよつきりと、家苞にひつ束ねかい束ねてかづいた、今年や世の中なかの〳〵よい〳〵〳〵なつかの〳〵なつかの節供の大飾り、惡魔外道を打拂ひ、清めたてまつるの〳〵、千年も萬年も萬々年もお家は盡きせぬ飾りえ。

㊇芋之子踊

二上り芋の其の子の育ちを見たかえ、さつては子寶めでたいな、子は四十八よの、末廣がりで、やら〳〵やら〳〵そんれはえ〳〵、やら〳〵やら〳〵めでたしやん〳〵、一座はざらりと竝べて、一度に呼んだお名はえ、おとよけさよたつまつゆるまつだんだらいなごにかいつくほう、ひつつくほう、かいつくひつつく、火打袋にしやん〳〵おめでたいよの。

㊈小川踊

二上り水を汲みやらばようやよやよ、小川で汲みやれ、小川小石川轉びよて轉び〳〵轉びかゝるとよえ、君はさい鳥さし、わりや鵙の鳥、無念至極や落されたとよえ。

㊉ていこや踊

二上り戀をしやらば火燵でしやれ、火燵痴話箱さんさ隱れござらぬ、のうほんえ、えゝのうほんえ、ていこや〳〵ていこ〳〵、ていこやと言うた奴は合點か、おうさゝ〳〵合點ぢや、打ちもせい、ちよんも一つせい、ちよん〳〵ちよちよんと打つた奴に、はる〳〵と出合うた、ちよちよちよんのちよ。

㊉一ほい〳〵踊

二上りこちのちんちくちを、ほい〳〵譽むるではないが、とつと奥山のむぎてものが有るとの、親子なかに五六本と言うてかりてこいとの、人がかりてないとの、それ〳〵見たか、それ見たか、根性長な子を持てば、人につい〳〵つい〳〵つい〳〵とられて、事をがゝした、ほい〳〵のほい。

㊉二のんやほゝ踊

二上り戀とくれ〳〵のんやほゝ〳〵、おしやおん〳〵おしやおしやれ〳〵、のんやほゝ〳〵とは思うたさうゝできたのや、おんは〳〵えい〳〵〳〵、裏の背戸のやのんやほゝ〳〵、おしやおん〳〵おしやおしやれ〳〵、のんやほゝ〳〵とは思うたさうゝできたのや、おんは〳〵えい〳〵〳〵。

㊉六二木踊

二上りにほく戀しやな、世にある時は引けど靡かぬな、曲もなや、とは思へども〳〵、善太どの〳〵情に隔てはない物をせめて一夜の情のあらば、今の嬉しき御親文字、忘れまじ盡きせまじ、此の世はさておき後の世も、これさて〳〵〳〵よいやさ忘れまじ。

㊉七まん丸踊

二上り眞丸ござれ〳〵、十五夜の月の輪の如く、はり〳〵輪の如く、よいとんなとん〳〵、十五夜の夜さり〳〵綱挽女郎にうつ惚れた、はり〳〵うつ惚れた、まん〳〵丸やの七左が手管は合點か、おしつけ押へてやら可愛のみ船や、でかした〳〵これさ。

㊉八今度屋踊

二上り今度やござらば、ようやよほいほぞんこしの町へ、ゆけば左へ戻れば右へえゝよほいほ、直に通へば一里十八丁廻らば三里、よほいほ、それをば行き過ぎ花のかのさまに尋ね逢はう、これさ紺の暖簾によの字と書いて、紫竹出格子で隱れなや、えいそれをば行き過ぎ、花のかのさまに尋ね逢はう、これさ〳〵〳〵。

㊉九ふくとん踊

二上り情夕霧ほつとりとりおことな、あゝんはずむなあ、ふくとん〳〵、小薩摩いき小太夫ふくとんふく〳〵、ふくとん〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵。

㊀さゝら踊

二上り　やんらめでたや、やんら樂しやさっき千町や萬町の鳥追が參り　やれこりやつまだてゝ、そろ〳〵そろ〳〵そろ〳〵そろ〳〵そろ〳〵そろ〳〵そろ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵やつこりやつまだてゝ、御代のさかりの眞中、まん〳〵眞中で、一人の御代繼。

古今踊歌百番　終

落葉集第卷之五

元祿十六年未之年
祇園町踊之唱歌目錄

一　翁せんざい　　二　奈須之與市
三　さゝら踊　　四　笠をどり
五　だんじり　　六　競馬をどり
七　唐獅子踊　　八　鹽竈をどり
九　芦刈踊　　十　大福帳
十一　鑓之權三　　十二　手綱踊
十三　六方出端　　十四　薩摩節
十五　手鞠をどり　　十六　御幣踊
十七　文七をどり　　十八　殺生石
十九　しがらみ　　廿　鑓之團助
廿一　甲斐ぞん　　廿二　三つの車
廿三　樽をどり　　廿四　難波の梅
廿五　須磨名所　　廿六　神がき
廿七　福太郎お德

都音頭取作者附目錄

一　浮世法師　　八百喜太郎作　木地九郎左衛門
二　太郎助咄　　種間源三郎作
三　道念咄　　道念仁兵衛作
四　おさん茂兵衛　　小豆庄兵衛作
五　三勝心中　　蔦山四郎兵衛作
六　山庄太夫　　古今新左衛門作
七　さねもり　　扇子屋九左衛門作
九　德西咄　　都源兵衛作
九　虫づくしかけ合　　一序　中悅　蔦山

㊀翁鈴踊女

二上り翁千歳つらりと朝日に見えたり、悅びありや鈴の音、松にかゝりしちら〳〵雪の、ちはやふる、これの尉殿は、子寶をもたれた、兄は笛ふき、大小鼓もうつとの子故烏帽子に黃金の鈴をさ、さあ振れ〳〵さ〳〵、誰が御たち祝うて振れさ、さあ振る〳〵振る〳〵振る〳〵鈴に、此のところ、久しかれとぞ祝ひ納めた。

㊁奈須の與市男踊

二上り波はあやなしどんどと寄せて、馬に鞭あてくるりとまはつて、沖の舟を、ゆり上げゆり下げ、ゆり上げゆり下げ、眼をふさいで、南無や奈須野の大明神、心中に祈念して、扇の要を射切つた、ちらり〳〵ちらり〳〵、やつはちら〳〵ちら〳〵、波はりん〳〵のほゝ射たりや、與市ゑい〳〵ゑい〳〵さ、ゑい〳〵〳〵ゑいや聲してほめたり〳〵、浦風うらかぜなりけり高松。

㊂さゝら男踊

二上り やんら目出たや、やんら樂しや、今年世の中穂に穂がさいて、早稻や晩稻と、御神樂を、このゑいこの〳〵〳〵、神の御前で、さあんさ〳〵、いつもどんどと鳴るがよえはんや、このゑいこの〳〵〳〵、福と德とが宿借らうというて米運ぶえ、新米俵でづつしり〳〵よい〳〵よい〳〵、祝ひ納むる此の殿の御繁昌。

㊃笠踊男

二上り 雪のうち咲き初むる、一重梅八重紅梅、しなの梅はんなりと〳〵、雪の內より咲き初むる、につこりと〳〵につこり〳〵この〳〵につこりと、小梅なりよし振袖の、拍子を揃へてやつとんや〳〵、落ちてこぼれて、君が手慣れし手鞠梅、とん〳〵とん〳〵、ゑいとんな〳〵植ゑて育てん花のしなゞ。

㊄だんじり男踊

二上り 難波濱邊を囃したてゝ、ちやんぎりしつきり〳〵〳〵ちやんぎりし、先綱のお竹どの、元綱のお松どのは地下で二人のしやれ者、大汗流してひつひけさ、さあらばゑいやとな、ゑい〳〵〳〵、ゑいさらゑい〳〵〳〵ゑい〳〵ゑい〳〵、笑顏して、引く竹お松、やれ樂車。

㊅競馬女踊

二上り 加茂の林の茂り見たか、鞭の拍子にめゆひの手綱、黑小袖と赤地の小袖、拍子は駒の運び足、鉦と太鼓の音はどん〳〵と〳〵〳〵と、拍子を揃へ乘つたりな木綿子淨るり 抑馬に七ケの祕事、三ゲの手綱、五ケの鞍、陰陽の鞭、朝あらし大おろし小おろし、運びのべ足千ゝ鳥足、あられ流しといふ鹿毛を、祕曲づくしを乘り出す、手綱とり延べゆらりと、横切る風に雲のあし、天にも上る氣色あり、漢の項羽は一日に、千里が馬を得たりつる昔を我が身の上に、白泡かませおふさゝせ、遙かに行きていきかへし、鞍の山形山近く、踏みもならさぬ櫻馬場砂子交りの石荒く、茂り合ひたる紬摺松、柳櫻もこき交ぜて、押しわけかきわけ、露も雫もうち拂ひ、いやうち拂ひ、はら〳〵〳〵其の身輕けに乘りのつた、姿のやれさてしほらしや、空行く雲に鞭を上げ、二千里刹那の駿馬の曲、ゑりくりゑんじよの馬場の土手、のり上げのり下げ乘り下す、躍り上ればしつかととめ、雲雀の床の柴つなぎ、とある所にゑい〳〵〳〵ゑい〳〵。

㊆唐獅子女踊

三下り 牡丹花の花の上なる、露より薄きお情けを、ゑいそりや、露より薄きお情けを、寢たり起きたり起きたり獅子の、花の木蔭に肩をすりて、頭をうなだれ耳をふせ、花に戯る唐獅子の、戯れつそばえつひら〳〵〳〵と、あちらへはひら〳〵、こちらへはひら〳〵、ひらり〳〵と戯れて、唐獅子が五つ五色の子を生んだ、白は白介が盜んで去んだ、赤は他かれて宿に居る、黑は〳〵くら闇に井戸へ落ち、やあ〳〵かはいや、親は車つん〳〵つん〳〵釣瓶の、しとんしととんしとん〳〵、つん〳〵つん〳〵釣瓶の水を汲む、やつくる車の水を汲むえ、誰に語らん我が思ひ。

㊇鹽竈女踊

二上り 戀は樣々あるが中にさ、思ふ人には陸奥の、ちかの鹽竈やれ身をこがす、戀に焦れてやつとんと〳〵、見せばやたんとふりふつた〳〵、忍ぶその夜は、とりもな鳴いそ鐘も憂や、寺々ほろりん〳〵〳〵、ほろ〳〵りん、大とり小とりがほと〳〵ほと〳〵、ぶら〳〵さがりの、番太のおやぢが、してゝん太鼓の、のんかゝいよこのほんほゝ、さて、うつな鳴らすな鐘つきよ、そんならはりりん〳〵しよがいなと、まねく袂に鑵子の蓋が、からりころり〳〵、やあゝ、ほんはたつほゝ〳〵、天氣よかれや、日和よかれと、なくほた餅が、隣のお方の顏に似たとて、大事の事か手形一枚、りやうじゆせんより、高尾さまへと、さいたりや盃、とつたりや藤六が、大阪で出會うた喜三郎が膏藥、ひとつけつければ、づべ〳〵と癒る、二つけつければ藥鑵ほどに腫れる、雜魚はざゝめく、鰕やはねかゞむ、あままいこと〳〵が敵く太鼓は、

でん〳〵からり〳〵、座敷はいたたんぼゝゐんどんの、ありやそりや二丁目の名のない名主、茶筅に茶柄杓、こつきりこに小槌、とかく浮世は一寸先は闇の夜、飲めや歌へやさ、たんだ戯れ遊べえ。

㊈芦刈女踊

本調子江戸淨瑠璃　都の空も明け方に、告ぐる鳥の聲もろともに立ち出でて、つまの行方を尋ねんと、何處をそことも白露の、袖の縁も過ぎし夜の、その言の葉もあだとなり、枕淋しきあま衣、ぬれにぞぬれし柳蔭、若木の枝に鶯が、タ、キやさしつがひの羽うちかはす、鳥の中にも比翼鳥は己ればかりがつま持ち顔に、鴛鴦の衾やかづら（本ノマヽ鶏カ）の床も、淋しかるらんかも舟の、うち眺め行く帆かけ舟、ほの〴〵見ゆる海の西、どう〳〵さつ〳〵といさぎよや、市柴運ぶ賢の女が、歌ふ小歌の面白や、山も見えざるかりそめに、つひ馴れなじみ我をさて、どうで女房にやもちやさんすまい、要らぬものぢやと思へども、どうした事の縁ぢややら、忘るゝ隙も荒磯の

謠〽難波の三津のよしあしの、名にし負ふ難波津の芦刈ノ謠有り〽面白や心あらん。

㊉大福帳男踊

二上り　扨ても目出たや、治ほる國は豐かにて、初春祝ふ帳綴や、鬼は外へ拂ひ帳、金銀内へ留帳は、よい事〳〵、嫁入行列はい〳〵、婿殿屋形は三國一と、はやした銀の盃は、舅殿引出物、卷物絹々千匹、淡路の米が千石、それ〳〵それ〳〵ゐい〳〵、だん〳〵榮うる日記帳、君と我とは二葉の松に、目出たい〳〵水上帳、大福々々大福帳〳〵、大福長者と榮え榮えた。

㊉一鑓權三男踊

大阪に有

二上り　そりや〳〵そりや〳〵、鑓の權三は蓮葉に御座る、谷のやつとんとさゝやでやあゝ、そろへにかゝる、しなへてかゝる、どうでも權三はぬれ者だ、油壺から出すやうな男、しつとんとろりと見とれる男、磯の千鳥を追つかけて、石突つかんでづんづとのばしやる〳〵、さあさえいさつさ〳〵、えいさつさ〳〵、さつさどうでも權三は、よつどつこい、よい男え。

㊉二手綱女踊

本調子江戸淨瑠璃　げに武士の梓弓、やたけに餘る長がたな、しやんとさいたはしほらしや、此處は何處と問うたれば、こゝは名に負ふ須磨明石、扨ては嬉しや明石まで來たか、名にこそ立てれ立つ波よ、さゞれ女波が寄せて來て岸の小草に、あゝ〳〵〳〵ぬれかゝる、彼方を見れば一の谷、枝もたわゝに繁りしは、あの鐘懸松とかや、こは古へ源平の軍亂れし跡もあり、扨て又馬乘りの達者には、佐々木の四郎高綱なり、次に見えしは熊谷の次郎直實、平山も馬乘の上手と聞えるぞや、抑名馬と申せしは、連錢葦毛鹿毛糟毛、有明とくさ尾髪なんど、なみは葦毛に鬼鹿毛は、人馬驚く氣色なし、藤代つき毛かたを波、荒波順風帆かけて、飛ぶが如く走るが如く、宙を翔つ、山をも谷をも、をんどり越ゆる、手綱つき毛にさびつき毛、さて我が朝の吉例とて、三ケ日には馬乘りはじめ、曲馬にうち乘り、手綱をゆりかけ、乘りよやな〳〵さて〳〵さて〳〵上り下りの、どう〳〵道中、磯邊づたひの濱道を、眺めて行けば是やこの、難波入江に舟よせて、乘るは新ィ舟のえ。

㊉三六法女踊

二上り　伊達に揃うた長脇差を、關いんのまん〳〵孫六〳〵さあらば冷せ亂れ燒、はんかうたてがみ五體づけ、土手

道ぢや怖い、暗の夜も怖い、御座れつれだちのほんほ、とろさで〳〵のほんほ〳〵〳〵、とろさでどつこいせいとろ〳〵〳〵〳〵とろさでさ〳〵、晩のとまりで寢て語ろ〻戀よ戀、我中空になすな戀、戀風が來ては袂にかいもつれ、袖の重さよ。〻いさぎよや、蕗といふも草の名若荷といふも草の名、神樂男のとりなり見れば、戀に瘠せたか、二重の帶が三重に廻る、さりとは、かはす枕は多けれど、君とぬる夜はそれ〳〵それ〳〵長枕、うたゝ寢枕、そなたとならば互ちん〳〵、違ひのお手、打違ひのお手枕、實どうぢやえ、松が根まくら磯枕、海人の小舟、壹丁の貳丁の三丁の四丁の、苫をしきねの桿枕、枕こち寄れなが長枕、數々の盃は、どこ〳〵へ廻つたの、めのよい上戸衆の側にそつと行たれば、ゆきか冷か燗飲みか、ねぢかつかる腕にも、怖ろしうはおんじやらない、うららがやうな底のない、蛇之介が何でも飲まんと思へば、伊萬里か瀬戸か南京皿、今朝うち割られた摺粉鉢、寢るやうで寢もせいで、一ッ〳〵にがつくに〳〵しつくに、寢返りうつては寢られない、はや明け方の時太鼓、どう打つの、かう打つの、どん〳〵〳〵どう打つのはあは、かう打つの、とんと打ち納め、ゑいやつと勇み賑ふ門の松竹。

㊃さつま女踊

三下り〻やれ鳥羽の長丁を夜更けて通りや、そんれは〳〵三味や琴の音でさん樣こか〳〵といの、あさしやうがえ。

三下り〻やれ人の嫁御と帆かけた舟は、そんれは〳〵、見ては樂なさうで、さんさま苦が御座るいの、あさしやうがえ。

㊄手まり女踊

晉羽座に有

二上り今朝のや六つから、上衣下衣ひつかさね、道中一番太夫染、禿は袖のふではじめ、つく〳〵〳〵には手鞠つく、一二三四五六に七八に、おとは十三十四十五てはまおく、廿一二三四、御代なら〳〵松を飾りて梅の折枝、それさ〳〵、それすいた、三味の手一二三四五六に七八に三下り蜘蛛の巢に、荒れたる駒はつなぐとも、二道かくるあだ人に、積る思ひを語らんと、往きては歸り歸りてはまた、閨の欄のあけくれど、女心の一筋に、これまで現れ來たるぞや、誰そや誰そ、佇む人は誰そやとは愚かなり、忘れ給ふなおりや忘られで、來たはたれ故そさま故我人の爲つらければ、必ず身にも報ふぞや、因果は車の輪の如く、廻りくる〳〵くる〳〵〳〵と、報いを見すべきぞ、心を靜めて聞き給へ、戀に隔てはあるまいに、ならべて〳〵戀を並べて二面、身がな二つ欲しうてならぬ、それ何故に、一つはそさまにたてまつり、一つはそさまと二世まで語ろと、思ふにかひなき浮世やと、泣くより外の事ぞなき、いや〳〵、今くる花に目がくれて、おりや捨てられた捨てたぞや、恨めしの我が夫やな、いで〳〵命をとらんと、虛空に向つて、つく息の、鬼ともなれ蛇ともなれ、我ながら我が姿人に恥かしあさましと、思へど切られぬ輪廻の絆、哀れにも亦恐ろしや。

㊅殺生石女踊

山下座に有

おとは十三十四十五てはまおく、廿一二三四、中の丁下の丁揚屋町の色くらべ、とんとつき上げ。

㊆御幣女踊

出羽芝居に有

木綿子淨瑠璃謹上さんぐう再拜々々敬つて申したてまつる、然るに行者と申せしは、その身は不動の尊容をかたどり十二の襞は十二に緣、篠懸はこれ九字曼荼羅、惡魔を拂ふ金剛杖、家內安全長久と祈る、仰ぎ願はくば、擁護の奇瑞を見せしめ給へと祈らるゝ、抑王城の地主は、加茂に上下大明神、稻荷祇園に磯の神、貴船吉田になあゝよいさ、平野北野愛宕八幡になよいさ、松尾紀、大和に葛城金峰山、その外諸神神々の、力を添へてたまはれと、せめかけ〳〵祈りける、不思議や御幣と見えけるは、忽ち蛇身と現れて、加茂の川瀨に飛び入り〳〵、さかまく波はくる〳〵〳〵、浮いつ沈んづくる〳〵〳〵、くる〳〵おひ廻るは怖ろしかりける。

㊇文七女踊

山下座に有

二上り歌　我いにしへは、月よ花よと戯れて、色香にめでし身なれども、いつぞの頃にひきかへて、かゝる姿ぞ恥かしや、歌　〽晝は淺間の夕煙、立ち返る夜になりて、懺悔に姿顯さん、夕闇のこの世はあかし燈火の、我が影なりと思召せ、今靈はあまさがる、鄙に殘りて惡念の、猶もあらはす此の野邊の、往來の人に仇を今、那須野の原に立つ石の、昔にかへるあと迄も、執心の殘り來て、又たち歸る草野の原、よい〳〵春は野山ものどかになりて、つゝじかくいのくゞり〳〵くゞりにくいそわも（ホノマヽ）つまと行こならく〳〵〳〵、夫と行こなら苦にやならぬ事ぢや、娘が嫁入年になんよさ、池の花藻を小褄だかに着なして、をどり遊びし二人が仲も、別れ果てにし悲しやな、身を何と那須野の原に魂殘つて、恨みをなさんと思ひしに、兩介は狩裝束にて、數萬騎那須野をとり込めて、草を分つて狩りけるに、現れ出でしか狩人の、追うつまくつつ、探りにかけて、矢の下に射伏せられて、即時に命をいたづらに、那須野の原の露と消えて、人を取る事多年なれども、今有難きお僧の敎化、この後惡事をいたすまじと、約束かたき石となつて〳〵野干の姿は失せにけり。

㊉しがらみ女踊

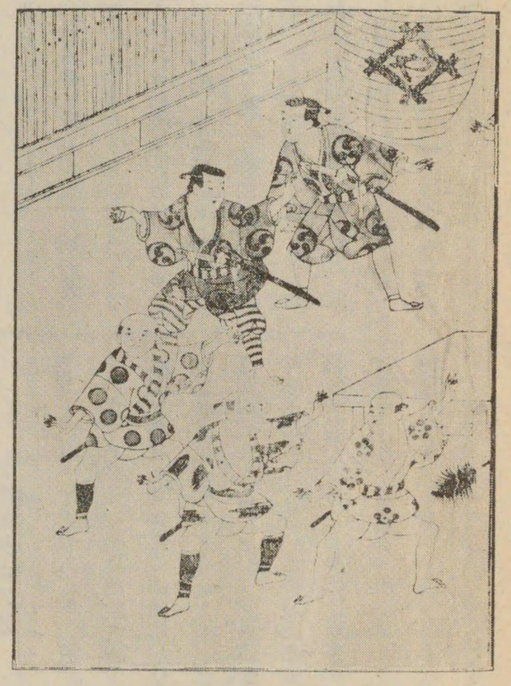
木調　花見てな〳〵慰まん、春は先づ咲く桃の花花が見たくば吉野川へ御座れの、吉野川の紅葉は花のしがらみ宛ら錦、いとしかはいは、なかや〳〵とひつ口說いつ、なかや〳〵とすれば、何を

いふやら、鶯の、ほゝ惚れたとさ、ほゝほんに惚れたとさ、しんき、憎い男に氣をもたすもたす、しんきえ、水堰きとめて、いざ〳〵花をすくはん。

㊀鑓之團介男踊

万太夫座に有

二上り大和飛鳥の、鑓の團介がつてんか、だん〳〵すけ合點か、素鑓管鑓十文字、受けて流した鑓の手、すゝ素やりでせ〳〵引く手が大事、足を固めてそこらでさ、そこらでさ〳〵て、こゝらで團介が〳〵さ、やれこりやまつかせ團介、一がんさそくでやとゝんや、二がんさそくでやとゝんや、たぐり寄せたよ浮世團介。



㊂甲斐尊女踊

三下り　じたい我等が生國は、花の都の者なるが今度はじめて東の花のはんなりと、あそこや此處や所々、花見山の幔幕、花に負けじのこよねを見たか、不慮に情をぶつかけられたえ、或は袖引き抱きつき、何やら歌うた、それ鎌倉のかいぞんな、たけなる駒に唐鞍置かせて、川原面をから〳〵〳〵から〳〵〳〵、驅け出でかけ出で、何でもない事、さつちやつゝとせ、其處を通るは、ほんにさ、樣ではないかえ、君よ〳〵、雪をひつつくねて女郎にして、抱いて寢た夜は、きえ〴〵と、祝ひ納むる目出たさよ。

㊂三の車女踊

早雲座に有

三下り藤はなに藤白藤小藤、紫藤の、咲きや亂れし紫藤袴、一夜は妻に草枕、すがりついてはよれつもつれつ、じつと締むれば立つも立たれず、行かんとすれど羽拔鳥かやあさましや、大地へどうど倒れ伏す、なさけさりとては、凋める花の懷しや、草の袂も我が袖も、露ぬれそめて立ち寄れば、戀と情といくたびか、袖にもつれて、廻りあひては恨めしや、怒れる姿に取りつけば、水の月、月は一つ影は二つ、みつ鹽の夜の車にうちのせて、くるり〳〵〳〵車の、我を捨てゝ行くらん方は、くるまやるせなき、廻りあをいのやれ車、牛のつのもじ直なる我も、曲る心は藤の花、〽松になれ〳〵時雨の松に、藤に纏かれて寢と〳〵御座る、まかれて藤に、藤にまかれて寢と御座る、そなた白藤うつろひやすや、我が心の亂るれど、會へば姿も消え〴〵と、いや、そもじ戀には、のんえいそりや、死な〳〵で焦るゝ、恨めしや、倶に奈落へ連れ行かん、倶に奈落へ連れ行かん、黑髪とつて引き止むれば、恐ろしや、宛ら此の世の地獄なり、いかに男確かに聞け、それ地獄遠きにあらず、極樂またはるかなり、急げ〳〵とこそ苛責する、下へ行けども火牛ののくも、時節と待つて取るべきと、言ふ聲ばかりは虛空に聞え〳〵、戀の闇路に踏み迷ふ、心づくしの袖の海、深き思ひぞ哀れなる。

㊂樽踊男女入込

出羽芝居に有

本調子とろり〳〵とやあんや、髮結ひ下げて御座んせ〳〵と門に立ち暮す、揚屋座敷は戀の淵、〳〵〳〵、太郎樣え二郎樣え今度御座らば朝込かけて、私が小歌でひく三味線は、てんつる〳〵〳〵や、てんと名取の江口の君は、こちの太夫さんかなやま間夫の金蔓々々、黃金のつるはつるとの〳〵、男つるつる釣瓶の水は、さつとうち上げた桶伏せに、會うた男にほだされて、變るまいとの起請まで書いて、太夫樣々先におし立て、後からわしが赤前垂を、しやんとからげてよぢらす〳〵、よぢらす〳〵腰に、鍵の數々前巾着の、裾の蹴まはしとん〳〵〳〵と、

んとはづんだ思案、思案嬉し、振ぢやおつ殺しやる目元で殺す、今の目元は猶いとしえ、ほんにかえ　くさりませう、はつというては袖ひきやひん〳〵、何故に顏ふりやるえ、わしがどこに振つたぞえ、蓮葉な事はおかんせや、兎角や兎角、なさけは宵より閨の、枕屏風に立つ名の世間、いつの間にやら江口の君は、戀といふ字に思ひをのせて、行方も知らず涯しなの、唐土船のほの字をば、和國のよねの髮すぢで、よいや〳〵、繫ぎとめんと一筋に、跡を慕ひて、〽あら戀しや我が夫の、行方何處と白糸の、亂れ心や狂ふらん、三下り〽水の流や身の行方、はてしなの我が戀衣、着てもえ添はでそことなく、此處や彼處と走り〳〵〳〵、走り狂ひ廻れば〳〵、これこそ君の面白、さつとこしよさつ〳〵さ、踊笠にせう花笠をさしつれ〳〵、都なれや東山、稚兒や法師のぬれ所、しやれぬ心や人の氣の、角のとれたる所故、名を丸山と言ふとかや、かゝる所に色里の、揚屋男とうち見えて、手樽片手に手拭さけて、忙がしさうに、酒買うて戻る男あり、其處を通るは、ほんにさ、樣ではないかえ、袂にすがり留むれば、放しやいの〳〵、おれは使に行かねばならぬ〳〵、お使に〳〵行かねばならぬ、どんな男めに浮か〳〵されて、ひよつくりひよくり〳〵〳〵、ひよと出て〳〵〳〵、さつても浮氣な男え、上の町へまはればくるりつと廻る、下の町へ廻ればくるりつと廻る、くるり〳〵〳〵〳〵くる〳〵〳〵車、中の輪入道、ぴゝつくりしやつくりしよんがらが、はつとしてさて、友に浮かるゝ面白や。

㊃四難波の梅女踊

早雲座に有

二上り都門出に難波の梅よ、さいたり〳〵長がたな、さても見事にふり積む雪の、二尺四五六七八九のない男、さあさふれ〳〵さ〳〵、札の辻から、戀のかけ橋渡らば渡れ、渡らば渡れしとんとろ〳〵とろ〳〵〳〵、やつとろ〳〵〳〵とろ、そなた思へばなう、ぬるんるゝ〳〵、ぬるんる〳〵時雨の松よ、色は替らじ我も替らじ。

㊃五須磨名所女踊

木調子江戸節まだ夜をこめて有明の、月ぞ知らする山道の、渺々として涯しなき、つゞら折、上れば下るてんと我が思ひ、踏む足元はとゞろ〳〵行けば、里のこよねはな目にたつこよね、娘いくつと妻戀ふ鹿の、さりとては、しづはな、しづは替らじ、月の夜に、高い山からなあの坂見れば、近江菅笠しやんと〳〵着なした〳〵蓮葉なり、なりも姿も見えわかず、どれが山やら海邊やら、あちかこちかと踏み迷ふ、此方へ來らせ給へや、かすかに見ゆる御山は、その御ゆかりにやく一王子、若紫の藤代や、松にかゝれる磯の波、波にゆられて行く鷗、どうど打つてはさつと退く、けに面白や、和歌の浦、汐滿ち來れば潟をなみ、あら有難や世の中に、これぞ遠寺の晩鐘には、いやましの思ひ草、葉末の露の玉津島山まで見えわたる、須磨の若木の櫻花、嵐につれて散るは〳〵、散りくるの〳〵、散りくる〳〵、惜しき櫻の散りかゝる、爰は古源平の、軍亂れし跡もあり、舟軍のかけひき、引くは潮に滿つるは又、八重の汐路のはる〴〵と、名所々々をうち過ぎて、須磨の浦曲に月夜の烏え。

㈥神垣女踊

二上りすゞしめや、杜の木の間にもるゝ日を、笠さしかけて行く神垣や、さきでふり出す小小姓達、足ぬぎかけの腰元は、子持姿はどこやらが、よいと言うたら大事かさ、松の木蔭に立ちよりて、あの山見さい此の山蔭は、妻木のま柴折りて束ねて、えいとこなと、戴きつれて、いよこの、おも荷をさ〳〵、さあさ召さぬか、駒の、いよこの〳〵、口とる、鞭ふりかけて、しやんと乘つたかさ、乘りた心のよければ。

㈦福太郎おとゝ踊男女入込　早雲座に有

二上り富の山から、當つた〳〵、一の富が當つた、二の富も當つた、兄の福太郎は破魔弓で遊んだ、妹おとゝは突く羽根もきり〳〵と、兄は弓でしよ妹は羽根でしよ、てん〳〵〳〵手鞠でしよ、つとんとつとしたつくてん〳〵つく手鞠、いる〳〵つく〳〵、當つた〳〵弓羽根、春日のどかに勇み遊んだ。

右此踊之初りは京の東祇園邊に去法師のあり、其身の以二思量一在二樂心一初秋に友をかたらひて踊をはじむ凡元祿十六年迄及二四十七八年一云々

踊歌　終

踊音頭之部

㈠浮世法師

八百喜太郎作
木地屋九郎左衛門

浮世法師と名の立つや、衣ほすてふ尼寺の、水に秋こそ通ふらし、飽かで別れの亂れ髪、千筋を束におし切りて、花紫の若後家や、平野帽子も目にしみて、八坂の塔を上りつめ、祇園あたりの奥座敷、黑き羽織に小脇差、醫者ほんしだしの草履取、提灯暗く行き通ふ、折にふれては一節を、聲明聲にしぼり上げ、亂れ心や狂ふらん、めつた無性に物やりて、是今の世の大盡と、一座にありつる不出來者、無性の國へおだて行く、朱雀の夜の鳥の聲、一重〳〵に聞きなれて、忝けなしと言はすすべ、人をも言はせ我が身にも、淀の川瀨の水車、くるは誰故〳〵、くるは〳〵誰故、そさま故、何時ぞ七つ門、急けよ〳〵たゝきたて、裏門越えてそつと入り、袈裟よ衣よ數珠くせと、物をも食はさぬ二日醉、齋日々々は大方に、祠堂の金は錢箱の、そこはかとなく消えて行く、亡者のために打敷や、幡にあげたる色小袖、たゝみながら古寺の、寂滅爲樂の鐘に替へ、惠心の作のみそぎ佛、痛はしくも繩からげ、庫の住居をなされけり、堂建立の奉加帳、一度ならず二度ならず、狩野の昔の金の間も、湊紙にひき替へて、羲之が御經の八の卷、表紙ばかりや殘るらん、百人前の根來椀、くつき盆と氣をかへて、禪の國師の掛物も、貸失うたぶんとなり、不破の關屋の板びさし、この月のもるこそ優しけれ、今はかくとはあるまじき、吉田七條馬町に、風のあげたる古簾、月代そつて髮結うて、今は千松わけのえい。

㈡太郎介

種間源三郎作

我等が邊りに太郎介殿とて、おかもぬけんが百の口が、

いか様半分も抜けた人が御座りたが、聞けば此の頃お内儀を呼ばれたが、婿入案じて居られたが、お内儀は發明な人で、婿入をばなされたら、てど（本ノマヽ）牛を見せらるゝであらう程に、先づこのやうに賞めさせ給へと、さつても〳〵見事な牛かな、但馬牛さうなが、あめ牛さうな、田をば鋤かしたら、朝飯に八反ばかりも鋤きやろと、このやうに賞めさせ給へと敎へける、然らば心やすき事ぢやとて、丹波をさして急がるゝ、舅の宿にもなりしかば、門の樞を、ほと〳〵ひしやりぽんと叩かるゝ、内の久三は大きな聲して、誰ぢやと言うたれば、此の聲に驚きて、鼻をかくして居られけり。久三は通り者にて、扨ては都の花婿樣かと、内へ伴ひ、さて盃も過ぎければ、舅太夫の言はれしは、我等が祕藏の牛を御目にかけんとて、牛部屋に伴なへば、太郎介妥ぞと思案して、牛の傍へそつとより、さても〳〵見事な牛かな、但馬牛さうなが、田をば鋤かしたら、朝腹に、八反ばかりも鋤きやろ、と賞めければ、舅大きに悦びて、序に母の壽命にあやかり給へと、恰度今年九十に餘る、お婆が出し（本ノマヽ）たりや、序にお婆も賞めんとて、婆の傍につゝと寄り、扨ても〳〵見事な婆かな、但馬婆さうな、あめ婆さうなが、田をば鋤かしたら朝腹に、八反ばかりも鋤きやろと、自慢顏して賞めにけり、お婆大きに驚きて、物をも言はず、婿殿顏を見あげ見下する、目元にしほのえ。

㊂道念

道念仁兵衞作

道念咄を致さうぞよ、この道念常々なまぐささうに思うたれば、案の如く眠藏に大黑こそは置かれたり、この大黑を繪像か木像かと思うたりや、おまんと言へる大黑ぢや、をり〳〵四十八夜の入佛事が過ぎたやら、おまんのお腹がかべに茶壺で、とたらくたらぢや、或る時道念は、四十八夜の鉦叩きに雇はれて、鉦を叩いて居られたり、おまんは易々と子を產み、此の事を知らしにお婆をやられたり、道念婆が顏を見て、念佛でこそは問はれたり、婆は念佛で知らせんため、うんだ〳〵、道念男か女か聞かんとて、南無阿彌陀何うんだ〳〵、女だ〳〵と答へけり、道念喜び鉦を早めて、手柄々々、ははてん〳〵から〳〵、扨ては此の子はてんのえ。

㊃おさん茂兵衞

小豆庄兵衞作

頃は貞享元年、まだ初秋の盂蘭盆に、亡き人かへる魂魄祭、精靈祭の棚經の、聲に引かれてお客人、我も〳〵と來る中に、二十ばかりの若男、女精靈召し具して、歌ふ小歌の細々と、戀には暗がましぢやと歌ひつれ、下女唯一人召連れて、精靈棚の一間なる、手島蓙にぞ直らるゝ、亭主由を見るよりも、これは見なれぬお客人、御名は如何にと尋ぬれば、問うてたもつて嬉しやな、尋ねてたもつて恥かしや、强き憂目に粟田口、蹴上の水に名を流す、おさん茂兵衞が新精靈、恥かしながら來りたり、今一人の下女が名は、玉は冥途へ通へども、魂魄こゝに止りて、文の使ややりくりを、したる科にて是も亦、同じ置目に遭ひしぞや、亭主由を聞くよりも、扨ては左樣でましますか、さこそ冥途で仲よくも、夫婦一緒に添はれうの、但し氣儘に添はれぬか、愚の人の問ひ事や、二世とかねたる仲なれば、夫婦一緒に所帶する、住所こそ悲しけれ、賽の河原を西へ行き、地獄の辻といふ處に、無間の釜で茶を沸かし、血の池の水瓶釣あげて、猛火熾んに燃やしたて、往來の亡者にお茶まゐれ、お茶をまゐれと袖をひく、かゝる所に、僧は一人立ち給ふ、おさん茂兵衞は見るよりも、罪業深き我々を、助け給へや御僧と、衣の袖に縋りつく、僧は由を聞召し、昨日迄は人をとひ、今日は我が身のぬれ衣、寺は桂の橋柱、女二人にたばかられ、恥を晒せし久傳と、申す法師と名告らるゝ、おさん茂兵衞は聞くよりも、それは最期は同じ事、悔むまいぞや一寸先は、暗の夜々佛壇の、下なる大黑舞を見さいな、其の時に御僧、その時に久傳、一に俵を踏まへて、二ににつこと笑うて、三に盃つけざしの、袈裟も衣も何だ辨慶數珠御免と抱きついた、四つ夜中の念佛さへ、佛にぞつとしたとよえ〳〵、五ついつもの御手枕、六つ無理な口說して、七つ難義にあひ竹の、幟竿にて名を流す、八つ屋敷のおそねのはし、九つ爰が最期にて、十で首を南無三寶、夢の浮世ぢやに、戲れてまた遊べえ。

㊄三勝心中

蔦山四郎兵衛作

戯れ遊べ隱江の、思ふ心の如何でかは、舟さす棹の、さして知るべき田舍人、あかね半七三勝が、心中浮名をつみおくる、京も難波の物語、聞くに樒の水添へて、貫ひ涙にきくばかり、常盤の松と契りしに、あだな金故身を書人の、金の代りに女房になれと、せがみたてられ返事もならず、いとし男と談合すれど、通ひなれにし二人が仲も、親にもれつゝ不首尾となりて、金の才覺なりにくければ、思はざりにし身の恥辱、所詮浮世を捨草の、露と消えなば思ひはせまじ、そなたばかりは萬年までも、金の代りに男と添やと、恨み顏にてたち出でければ、三勝とりつきなう情なや、さきの男と添ふ心なら、何のかうした話をしましよ、おれが心を知らぬか何ぞのやうにと、つれなき事をと涙を流し、親のためとて由なき手形、書きて口惜しや言譯たゝぬ、いとし我が子をふり捨て置いて、死ぬる心をかはいと思うて、死んだ後にて回向を賴むと、さいた脇差ひき拔きければ、半七はつと取りつ

いて、よしや由なき恨の言葉、是も何故身が貧からぞ、ひがむ心は許してたもれ、我も國へは去なれぬ憂き身、そなた死にやらば一緒に死のぞ、それは誠か嘘ではないぞ、扨ても嬉しやいとしき人と、共に消えなん事こそ願へ、早う御座れと夜半の頃に、夫婦互に念珠を繰りて、なまみだ〳〵なまみだ〳〵、念佛を道の數とりに、夫婦一緒に千日寺の、鐘の響に夜は何時ぞ、八つでもあろか、いつもおつうが目を開く時分、母よ〳〵と尋ねて泣こが、死する命は惜しからねども、流石親子の別れの絆、切るに切られぬ事こそ悲しと、後を見返り歩みもやらぬ、なう〳〵夜が明けるやら、はや晨朝の回向の鐘のあら有難や、いざや最期を急がうと言うて、火屋の東のさいたら畠、露か時雨か身をしる雨か、笠屋三勝袱紗を出して、褄と〳〵をしつかと括る、男涙をはらりと流し扨てはそなたは殺して置いて、逃げも走りもせうかと思うて、褄を括つておきやると見えた、おれが心はさうではないにと、取りつき泣けば、三勝涙にくれながら、何のさうした心でしませうぞいの、たとひ此の世はえい添はずとも、未來は言ふに及ばず今度のな、今度の〳〵こんどの〳〵、つゝと今度の後の世までも、女夫となつて離れぬやうにと、思ふ心で括つて置いた、早う殺して後から御座れと、手を合すれば、おう〳〵よう言やつた、念佛申しや、南無阿彌陀佛と、さし通すれば、あつとばかりの唯一聲に、血汐は流れて小袖の模樣、花の姿は忽ち變り、顏も心もいと細々と、物凄ければ顏をかくして、南無阿彌陀佛すぐに我が身も、笛かき切つて過ぎし亥の年、霜月七日霜と消え行く、夜明の烏かはい〳〵となく聲に、宵の口說もみな仇し野の、露も此の身も同じ夢、とかくは戯れ遊べえ。

㊅山庄太夫

古今新左衛門作

昔となりて今の世に、語るもよしや歎かじの、由良の湊の主をば、山庄太夫と申せしが、慾の心の深み草、露の命を送らんと、姉にしのぶ弟にわすれ草、忘れがたなき身の勤め、今日も朝より朝汐を、十荷汲めとの仰せにて濱邊をさして出で給ふ、折ふし鹽風荒うして、さつさ時雨のな萱野のあられよの、音もせでき て降り心、せで來て音も、音もせで來て降り心、降りくる雨に身は濡れて、持ちたる柄杓桶ともに、波にとられて力無く、唯さめ〴〵と歎かるゝ、かゝる所に三男の、三郎來つて言ふやうは、桶も柄杓もさし流す、心の中こそつら憎や、今よりしては弟が如く髪を切り、一緒に柴を刈るべしと、さも荒けなく言ひすてゝ、我が家をさしてぞ歸りける、又來る明けの東雲に、弟姉連れて奥山へ、峰の嵐が烈しくて、谷風に吹き上げられ、寒う御座るか姉御樣、おゝくたびれたか弟と、二人手に手を取りかはし、山に登れば、茨がとりつき、放せばとりつき〳〵日が暮るゝ、かゝる所に山人來ていふやうは、邪慳の太夫に仕へなば、とても命はあるまじきに、はや疾く落ちよと諫めける、姉弟此の由聞くよりも、こは有難しと夕暮の、月の都に急がんと、小笹篠原分け行けば、松吹く風がさつさつさ、もしや追手が來るやと、物凄まじきえ。

㊆貫盛

扇屋九左衛門作

扨ても篠原の合戰敗れての事なるに、爰に主知れぬ首こそあり、木曾殿御覽じて、樋口の二郎は見知りたるらんとて召されける、樋口參り涙を流し、定めて長井の齋藤別當實盛にてぞあらん、實盛ならば鬢ひげの、白髮たるべきが、黑き事こそ不思議なり、是は都の本阿彌にて目利をさせんと申されたる、本阿彌に見せたれば、確か作は越前物なり、近年五兩につけられたり、さりながら太刀刀の、目利はすれど、首の目利は知らぬなり、海部の又二郎に穿鑿あれと申されたり、いや〳〵洗うて見よとて、手盥に水を入れ、洗うてみたれば、墨は流れ落ちて、元の白髮となりたるが、殊に頭がはけたえ。

⑧德　西

都源兵衛作

されば某が隣に、德西といふ人あり、何たる過去の報いにや、轆轤首にて御座りたり、扨て似た者が女夫になりて、そのお內儀も轆轤首にて、或夜女夫の首が一度に拔けて、長押の上にて、睦言話して居られける、折ふし友達が見付けて、それ何しやると言うたれば、周章てゝ後へ戻るとて、內儀の首が男の胴へ收まりて、又男の首は內儀の胴へ收まり、朝起きて髮結ふ時に、どうやら勝手が違うたり、又何やらはお勝手が違うたり、さりながら是は一期の如才なり、明日からは四條の河原にて、小芝居を借りて、女とも見えずまた男とも見わけず、ふたなりひらの生捕りぢや、錢もて御座れえ。

⑨虫　盡　し

都一中序　葛山悅かけ合作

誰かはじめし戀の道、諸鳥畜類虫等までも、色に迷はぬものこそ無けれ、萬の虫のその中に、美人虫と聞えしは、かの玉虫の御事なり、優に優しき御姿、如何なる小虫に至るまで、心をかけぬはなかりけり、爰に哀れを止めしは、露深草の野邊に住む、蟷螂といふ虫にて、諸事の哀れをとゞめたり、玉虫姫を戀ひ焦れ、胸の螢火消えやらで、枕をひき寄せ蝸牛、蚯蚓もろともにしみ〴〵と泣き居たる有樣、田虫に語らぬやうぞなき、ひとり虫の音くれけり、かゝりける所に、蛙の左衞門泥之介は訪ひ來り、尺取虫にて申すやう、君は地虫の有樣かな、それがし文の使して、返事をとつて參らせんと、さも鈴虫に申せば、蟷螂がこれを聞いて、けら〳〵とも笑つて、君は賢女の聞えあり、なめくじりにては叶ふまいと、君を思ひ日ぐらし虫、いとゞ玉虫蟋蟀、聲枯虫と言ひつべし、我が蓑虫を憚り、所詮うき世を捨て草の、藻にすむ虫の我からなれば、鋏虫にて髮切虫、姿を變へて我が名をば、赤蜻蛉と戒名し蟬の羽衣着るならば、油虫とはよも言はれじと、思ひ定めて候へども、さあらば文して申さんと、虫くひ紙を取り出し、思ふ事のみをあり〳〵とも書きつけて、蝶花形に結ばせ、返事をとつて歸るとも、便りを我は松虫と、ぢが〳〵言うて渡せば、泥介文を受けとつて、でん〳〵虫に言ひつけて、玉虫姫に參らす

る、固よりも玉虫は、勿體の君なれば、一度の返事もなかりけり、蟷螂大きに腹を立てゝ、さて〳〵愚人夏の虫、飛んで火に入る有樣かな、よしやよし、おのれめ今度の野遊びに、眷族虫に言ひつけて、玉虫姫を奪ひ取つて、まゐらせんと怒りける、かゝりける所に、玉虫の後見、蝮の入道毒龍が、此の由を聞くよりも、さて〳〵憎き蟷螂めがたくみかな、蝗を申すあぶれ者餘すまいぞや待て暫しとて、はや裝束をしたりけり、肌には紅あか濃染の帷子たんだ一枚、わたがみ摑んでさつくと着、けぢ〳〵虫のきんか頭に、甲虫の緒を締め、ほうじやう作りのおひ太刀十文字にさすまゝに、くらけ虫の名馬に、黃金虫の鞍おかせ、そ

の身輕けにとび虫乘つて、我に劣らぬ棒ふり虫を左手右手に相そへ、芋虫の一角に、はた〳〵虫をさゝせつゝ、蝮の一黨三百餘騎、たけ〳〵虫の杖つかせ、巧みに巧んだ有様は、あつぱれ大根の虫やと、賞めぬ者こそなかりけり、その時にひばかり鎌首をもつたてゝ、さし出て申すやうは、蟻のやうな虫ども、ぶん〳〵虫に分け置いて軍は明日蜉蝣の一時に、心を合せてせむしにせよ、少しも蜻蛉ことなかれ、敵には弓の名人あるぞ、守宮を以て井守にせられな、手痛く當る虫あらば、百足にかけて毛虫にせよ、古の友達虫とて、油斷を少しもするならば蠶虫に手を食はれ、むねむしと言はれんより、すんばく虫も油斷なく、瘤の虫をめぐらせよ、あれていの蛆武者は、たとへば異國の斑猫虫、蝶々虫にもあらばあれ、我が朝に名を得たる、蜂虫にさゝせたらば、痛いまぎれにまつ倒に、とんぼう蛙をする所を、中にて首をきり〳〵す、殘る羽虫の奴原、敵の勢ぞと見るならば、何處のほとり迄も追つつめ追つかけ切り蛆せよ、殘る雜兵の虫ども、蜘蛛を霞こくぞう虫に追つちらし　とかき今度の軍こそ、かつうを虫と喜んで、勇みに勇んだ有様はなう物凄まじきえ。

古今踊音頭之部　終

落葉集卷第六

此の卷が活字版になるのはこれが最初ゆゑ用字假名遣等は一切原本に從つて更に改めてない。ただ濁點だけは難解の場合に限つて加へてある。

（編　者）

古今新左衞門節唱歌目錄

一　小栗馬之段　二　朝比奈　三　隅田川說經
四　富士之嵐　五　みうれし　六　鼠の畫寢
七　蓮華經　八　老ほれ枕　九　牛の綱
十　ぐんない八丈　十一有馬の松　十二いろは
十三天の川　十四山時鳥　十五稻荷參り
十六浮世言葉　十七茶のみ時　十八さいの川原

三ケの津淨瑠璃作者附目錄

一　染色盡　土佐ぶし　二　現在熊坂　外記ぶし
三　上鳴打　桑閑ぶし　四　おせん狂女之跡　半太夫ぶし
五　清明神嵐　喜元ぶし　六　酒天童子　出羽ぶし
七　傾城請狀　議太夫ぶし　八　しのだ妻　角太夫ぶし
九　曾我粧坂　嘉太夫ぶし　十　石川五右衞門　治太夫ぶし
十一京土產　市郎太夫ぶし　十二子の日の松　一中ぶし
十三祝言高館　一中ぶし

㈠小栗

古今　新左衞門

本諷子いかに鬼かげよくきけよ、牛は大日如來なり、むまはばとうくわんおんなり、けげん化生のものなれど、あまた有ける其中に、なんぢことさら人まぐさをはむゆへに、ちくしやうの中の鬼ぞかし、こまもしやうあるものならば、みゝふりたてゝよくきけよ、口にぶつみやうとのうれば、いきながらほとけになるぞ鬼かげよ、によぜちくしやうほつぽだいしんときく時は、汝もたしかにちやうもんせよ、そのとき鬼かげは、畜生とはいゝながら戀の哀を聞わけて、もろひざおりていたりしは、人間ものはしらぬなり。

㈡朝伊奈　同人作

本調子あさいないかにとしかりける、むねんなるかな世の中の、それ天人にはごすい人間には八苦とて、八つのくのあるその中に、ひんほどつらきものはなし、ひんくとだにもなりぬれば、うとき人にはいやしまれ、たんほに衣かさねゝば、夜さむさいとゞたえやらず、朝夕がとほしければ、こととひかはす人もなく、目縫りじゆんぎにまじはらねば、なぐさむかたもさらになし、たま〳〵れつざにつらなりて、心はかうでうに人にすぐれてみゆれども、かさねのきぬがうすければ、かたみしよぼりてくちおしや、世をも人をも葛の葉の、うらむべきやうあらざれば、たもとをかほにおしあてゝ、たゞさめ〳〵とぞなきいたり。

㈢隅田川　同人作

本調子吾はみやこの者なるが、人商びとにいざなはれ、あづまにくだる玉ぼこの、さもあらけなきものゝふが、あゆめ〳〵と打つえに、あゝちゝはゝの戀しやと、なくより外の事ぞなき（自是江戸説經二上り）いたはしやをさなごはいまをかぎりの下よりも、父はよし田の少將よ、名はむめわかと申也、みやこの人の戀しやと、にしにむかひて手をあはせ、なむあみた〳〵〳〵〳〵。

㈣富士之嵐　同人作

二上り ふじのあらしにろかいをとられ〳〵、ひとりこがるゝ田子のうら、さんせうめがこせうを女房にせうとおしやる、たうがらしがなかふど、やれたでほがりんきする、どふでもわさびはなをはじくへ。

㈤三嬉敷　同人作

二上り うれし〳〵が三うれしござる、初手にござつてもふられぬうれし、やどのしゆびさへしゆびさへうれし、うらがみなとにやほだすもうれし、うれしへ、軒の玉水とく〳〵ござれ、しけくござれば、ござればしけく、人が人がしる。

㈥鼠の畫寢　同人作

ねずみめがさんの野中に、ひるねしてな、ねこに子とらりよと夢をみたな、まもりよかけさへよけのまもりをな、ひるねのね事いふたおかしさはいの、うちのなべもかまもふすほりぐわんすもどふりや、かゝみなこかねへ。

㈦蓮華經　同人作

二上り 三河のかきつばたがされんけきやう、寺のこふじにほれたとされんけきやう、ゆへをいかにととふたれば、ふじの山なる思ひをきゆるばかりとされんけきやう、くどいた身は水中に住居するともさそてつほどにはあらじな。

㈧老ぼれ枕　同人作

としは寄るまい、うらが部屋へは猫もこずもの、おひぼれ〳〵こちよれ、ちと〳〵抱てによずもの〳〵、だいてちと〳〵によずもの。

㈨牛之綱　同人作

二上り ひいたりな牛の綱をへ、そんれはひきやることじや、との子のなくさかりとしよ、かまもよくかれ、ちくさもなんなびけなびけやれ。

㈩郡内八丈　同人作

二上り 山の上には白まめ青まめ枝まめ、しろひふくろはひさうのしい竹、芋のはの露ぶりしやりと、これのおさつにはたおらしよ、ぐんない八丈こくら島〳〵、ぐんない八丈こくらじま。

㈠ありまの松　同人作

二上り まつになりたやなありまの松に、ふぢにまかれてねとござる、まかれてふじに、ふぢにまかれてねとねとござる、なさけ有馬の花のゐん。

㈡伊呂波　同人作

二上り
子ども〳〵よ、髪結てとらしよ、いろはにちりぬるを、わかわがよたれそつねならむ、うゐのおくやまなけさこへて、あさきゆめみしゑひもせす京、宵にやわさんよなかにやほけきやう、あかつきおきてはゆづの念佛、紙子〳〵あべ川紙子へ。

㊀三天野川　同人作

二上り
あまの川には水こそまされ、さてもやんれあふことならぬへ、はしをやんれかきよやれかさゝぎの、天竺のあまの川にしろい〳〵をけがながるゝ、奉公するともたうふやにやいやよ、それなぜに、七ッをきしてまめみがく〳〵、七ッおきしてまめみがく。

㊀四山郭公　同人作

二上り
花の散るときやはつほとゝぎすやまほとゝぎす、月は三ケ月かたわれいびつ、まるいなが月くる時雨月・雪をながむる火をけのあぶないまどの、あかしくれ竹いくよの枕、戀にねぬ夜はふたよみよ。

㊀五稲荷參　同人作

二上り
ひけや〳〵ひけや〳〵牛のもうもふつなをへ、柴にさくらをおりそへて、させいほうせいこりやどふだ、いなりまいりの、參のいなり、ふりそでゆかし、ゆふぜんもやうでそんれはへ、おかたよそじにむすめは十五、ついのもやうでゆかしへ、さいかち山へのぼるとて、あらい風がもつけな吹てきた、はぎの白さでゐいとこなうんとこな、白さではぎの〳〵白さで日をくらす。

㊀六浮世言葉　同人作

二上り
うき代ことばによそへてとふて、とかくうき代じや戀のみち、うらがきまゝなるならほんに、とはおもへども人の口、有事ない事おつしやります、聞ば、松はこふじとねたといふ、こふじはまつとねぬといふ、あのうそはいの、ねたりやこそあれな、やれひつたりと、そのよな事はな、けもない事よ、きけばうれしや思ひくさ、たゝうつゝなや、人にいはれぬわがなみた、それとはしらでおもひねの、かわくまもなきわがなみた、羅れうのたもとをも、ひかばなどかきれざらん。

㊀七茶飲時　同人作

二上り
おきていなんせな、あすの夜もあるに、いましばしぞや、又ねのとこ〳〵にはぬるゝも袖、ひがしがしらむぜん頓而おばゞの茶のみどき、しゆんだらまんだらふくとくゐびす、べずる〳〵べざいてんなむ藥師のおぢぞうかの、みめのよいぢよろさまの、そばにそつとねたるは、ゆきかしもかみぞれか村雨か、雨かあられか、よしのゝはつせの散りかゝるやうで、おいとしうてねられない、うらゝがやうなるみめのわるいしやつつらが、そばにぐわさりとねたるは、いがぐりぎつくり天神ひげ、けさ打おろしのあらむしろ、がんぎやすりさめはだつくやうでさすやうで、いつくにばつくにねがゐりうつてはねられない。

㊀八さいの川原　同人作

本調子
髮にあはれをとゞめしは、さいの川原と聞へしは、二つや三つや四つ五つ、十ッさへこさぬみどり子が、いさごをつかねて山となし、小石をひろふて塔につみ、一ぢうつんではちゝのため、ちゝのおんと聞へしは、しゆみせんよりもたかふして、こと葉になにともいゝかたし、なむあみた佛〳〵なむあみた、二ぢうつんてははゝのため、はゝのめぐみのふかき事、

さうかいよりもなをふかし、三ぢうつんではきやうり兄弟わが身のためとゐかうする、なむあみた佛〳〵〳〵、まんずはゝのたい内に、十月がうちのくつうをうけ、やう〳〵此土に生れいで、四とせ五とせ七とせ待や、まつやまたずにみまかり出て、又いつの世に此恩をおくりかへさん、わらんべと、さん〳〵にかしやくなし、いつちともなくうせにけり、しよじのあはれと聞えける、南むあみた佛〳〵〳〵〳〵〳〵。

古今節歌終

三ケの津淨瑠璃之部

㈠染色盡

武江　土佐少掾

まつ初春のそめいろにさくやはないろ花になくうぐひすそめのこゐあけて人に春をやゆつり染風にしなへてたよ〳〵とめした姿の柳そめこひをすゝ竹ふぢねづみたもとにのこるかうそめのうつりやさつとちらしもん染しとの茶のきそはじめわがきがらちやはかわらねど人の心のふたへ染やまとにあらぬからかきやあけをうばふと名をたてゝもろこし人はこねめどもかのひともとのはつゆかりけんぼくろちやになにはえのよし吉おかにべにひわだほさぬそでだにあるものを戀にくちばや身はされかきのあはぬゐにしはうすがきやいつこんるりのたまごいろそらにこがるゝもみぢはのべにひわかのこゆひたつる戀をする身の袖の露しほりちぐさのつまこめもねよけに見ゆるとくさいろわがたましいもあこがれてゆかしきそらにとび色やきゞやうたまむしまがひぞめうこんきうこんべにうこんみづいろあさぎあさくともせめてひとよはこいあさぎそめいれかのこしめよせていくよかさねし手まくらに野邊のおすゝきほに出て打だしかのこやしぼかのこしくものもなきおぼろうめうつぶし色の御所そめはみなおもわくのうたのもじちらしこもんじうき世ぞめしやむろからぞめいろ〳〵のちゞのおもひやもゝ色にふかき心をそめ入て君がはだへの山吹やそめかうばいはあしかゞのあつまのきぬにおとらじとする恋つむ花や山あひのふり出そむる雲のそでこひのそめ衣たつたひめ手そめのにしき色ふかくこゐあやをなしそめたりしはおもしろかりけるしだいなり。

㈡現在熊坂

武江　薩摩外記

さすがむかしはものゝふのふとらう〳〵の身となりてもうきのせんりを心がけきかうのいつこをまちけれど時にあはねばぜひもなく此あしぬまにくちはつるおい木の柳いまははやきりよくもよはると云ながらさすがむかしはもろこしのかううがはやわざわがものにてしつせきのへいふをもいまだたかしとおもわずうちものとつてはしほうがじゆついつくわんのしよをつくしたりすいれんなまたふひがみちりやうがんかの玉をもとりゆみはなをやうゆうがむかしをしのぶゆんぜいのつるをならしてはるかなるじゆどうのせいゐんひやうふつといるひいぎやうの力わざねてもさめてもたしなみしにたゞいたづらにおひの身のすこしよはりて候へどいまだ心は春ごまのいさむにつけておりふしはよきたよりともまかりなるごらん候へ此あたりなにはのうちの草のはらしやうちんけいぎよくしのだけのおざゝしげればひるとなくきりにこがくれ雨ののちさんぞくよたうのしれものら高にをおとしさとかよひの下女やはしたにいたるまでうちはぎとらんれなきさけぶそのこゐみゝにひまもなしさやうのときには老人もれいの長刀おつとつて爰をば我にまかせよとよばはりかくればけにはまた一度はさもなきときも有いやゝ〳〵ししやうなき我が身のうへにやはぬ老やらうぢよのみさこそおかしとおぼされんさりながら、佛さへ彌陀のりけんやあいぜんなほうべんの弓に矢をはげたもんなほこをよこたへてあくまをかうぶくさいなんのはらい給ふと聞ものをさればあいじやくじひしんなだつたが五ぎやゝ〳〵にすじれつくほうべんのせつしやうはほさつの六どにまさるとなりこれをみかれをきゝつたへたをぜひしらぬ身のゆくへまよふもさとるも心ぞやされば心のしとはなれ心をしとはせざれとのふるきことばぞまことなれかやうに申せば春の夜の長物語よしなやな心づくしにましまさんおやすみあれやまれ人とかざすあふぎの手もたゆくおもしろかりける次第也。

㊂藤壺弘徽殿うわなり打

武江　虎屋榮閑

かゝる所にふしぎやないとなまめいたるあを女房の其さまけしからぬふぜいにてつま戸のわきにたゝずみ給ふはいか成人にてましますぞやそのとき答てこはおろか成といごとかな人のうらみをうけながらなのらずとても今はやそのをにうへしくれないのもれても色いでぬべしかうきでんむねうちさはぎはつとおほしめされしが心をしづめてなだやかにげに〳〵なのらせたまはずともおほかたはすいりやう申てさふらふなりさりながら人のうらみを請ながらとは扨みづからには何たるうらみのあるやらん身にはおぼえはなき物をのふおぼえなきとはおろかなり有しむかしの雲のうへともにながめし月影のうつればかはるあすか川はなむらさきの藤つぼをおい出さるゝは誰ゆへぞあゝあさましやよもぎふにひとりこがるゝうき身の程おもひしらせん其ために藤つぼのおんりやう是迄あらはれきたりたりかうきでんきこしめしあらあさましやしつとのねたみは人にこそよれたがいにおしもおされもせぬ御身にて藤つぼの女御にはさりとはにやい申さぬなりことさら御身もみづからも中宮ささきのみやにもあらばこそ女御の數はおゝけれどわきてたれとは夕まぐれおふそれながら、我君をつまやおつとゝ思ひ給ふはおろかなりあらあさましの御心ねやはや〳〵歸らせ給ふべし藤つぼいよ〳〵はらを立いやいかにかうきでん御身のいのちをたすけ置君にちぎりをむすばせてゐいぐわの花をさかせつゝわらはゝむぐらの宿にたゞひとりよはるむしのねもろともになきあかさせんと思ふかやたのしみつきてかなしみきたるはたゞいまぞやいかに〳〵との給へはかうきでんきこしめしあふせまでもさむらはず世はみな夢のうちなればあすをばたれもたのまぬものをおろかの人のいゝごとや藤つぼかさねてによむげんほうとおもへども夢のうちにもくらくあるおことはほんぶの身をもちてくちと心は替りつゝくやみたもふとかなふまじかうきでんおしかへししんなばんにてんずるとも本來一物なきときは何をか留てくやむべし藤つぼいよ〳〵はらを立それ人の一念はあるものかなきものかおもひしらせんさりとては今はうたではかなはじとする〳〵とはしりよりさん〳〵に打散し立のかせ給ひしが中にてたちまちすがたをへんじおもへば〳〵はらだちや人のねたみのふかきとてうきねになかせたまふ共中〳〵おもひはとまるまじ我身はごく屋におしこめられはずへの露とやきへもやせん御身は君といやましにおきふし小夜のねざめにもわらはが身の上そしりつゝとや有かくやなりはつるとむかしがたりに成ならばなをも思ひはますかゞみ其おもかげのつらにくやとまたする〳〵とはしりより何といふともいのちをとらではかなはじと二打三打てう〳〵と打てしんいのほむらは身をこがす思ひしらずや思ひしれうらめしのうき世やなあゝうらめしのうき世やな思ひしらせん待たまへとゆふこゑばかりありあけの月にまぎれてうせにけりかの藤つぼのおんりやうおそろしきとも中〳〵申斗はなかりけり。

㊃樽屋おせん狂女跡

江戸半太夫

〽くるふらん〽あど〽としのよわひは二八斗のわかき人世にはたぐひも夏山のしげみがかけにこがくれし君のゆくゑはいづくぞやしろしめされてさふらはゞおしへてたべや人々とこゑをあげてぞなき給ふ手をおりてかなしき事をかぞいろにすぎおくれつゝかずならぬうき身のよるべなみだ川そでのしがらみひまなきに思ひかさなる年月の千代にやちよの玉つばき替らぬ色をたのみつゝかけしなさけもありはらのむかしおとこかひかる君かほる中將夕ぎりよりなをまさとしの戀しやと聲を上てぞなけかるゝ雨をしのぐやみのゝ國かさのしづくもたるいのしゆく泪なからに立出てはじめてたびをしな川にしばしなじみの君とわがわかれの袖をぬれてほす山路の菊の露のまもわすらればこそ中〳〵に思ひ出さんやうもなしあらうらめしの我身やとたおれふしてぞなき給ふ。

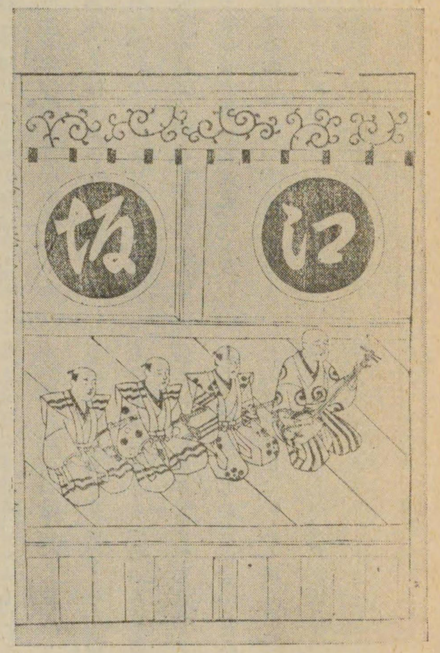
右半太夫節松の葉に不殘見えたり此部にしるさんためぬ狂女のあと書乘る也。

㊄清明神おろし

武江　虎屋喜元

其時せいめいする〳〵と罷出おふそれおふき事にて候へ

どもそれがしかじんべんにてかうきでんをふたゝびよみがへらせ奉らば御修行おほしめしとゞまらせ給われとはゞかりなふこそ申けるきんぜうさいはい〳〵うやまつてまうし奉る上はほんでんたいしやくしだい天わうゐんまほうわう五どうのめうくわんげかいのちにはいせはしんめいてんしやうくわう大じんぐう雨のみや風のみや月よみ日よみあまのいわとは大日如來あさまがたけにはふくゝまんこくうぞうわうじやうのちんじゆにはいなりぎおんにかもかすがきぶねは五しやのだいめうじんくらまさんには多門天たかきお山はあたごさんだいごんげんおとこやまはしやうはちまん大菩薩まつのをひらの梅のみやふし見に一ごんごかうのみややまとにかづらきぎんぶせんたうのみねにはたいしよくはんたつたは此はなさくやひめくまのはみつの御山なりじんぐうかうぐうなちはせんじゆくわんおんなり津の國にいたつては天わうじにせうとく太子すみよし四しやの大みやうじん四こくの地にはさぬきにこんぴら同じくしどじのくわんぜおんつくしにひこさんいづもの國に大やしろきづきの明神ほうきに大せん丹後になれあいきれとのもんじゆあふみの國に聞えたるひよしさんわう廿一しやおたがしらひけ平野はつここすいにあらはれ給ひしは竹生島のべんてんなりみのゝ國にはなんぐう高山つるぎのごんげんゑつちうにくりからふだうみやう王なりいづにみしまはこねは二しやの大ごんげんほんぢはもんじゆしり菩薩ふじはせんげん大菩薩とふ〳〵みのくにには



きお、つかまつつたり〳〵と御よろこびは限なしせいめいめんぼくほどこして御前をこそ立にけりかんか本朝にかゝるそうにんありがたしきせん上下おしなめてかんぜぬものはなかりけり。

出羽撩本文彌

㈥酒天童子山入

はやあけがたの山の端に月も雲かゝるかけにかつらのさとゝかやさをなぐるまのはかなくも手もつなでやおふるらんいさむ心はくつかけのふむこまのあしなみはこばせてさかゆる鬼をおいのさかなをしんりきをみしめ繩むかふあくまを切しきにほうらいきうはいかなれやせんしうばんぜいの龜山やよろこびのきたくを急がんと大江山のにはあきはこまがたはまなの明神みかはにいつてはほうらいじみねのやくしは十二神おはりのくにゝは一のみや二のみや第三にあたつてはやつるぎあつたの大みやうじん惣じて日本六十餘州三千七百餘社なりてんにあつては日月せいしん廿八しゆく大ぢのそこにおはしますけんろうぢじんにいたるまでこと〳〵くくわんでうおろし奉るたとひ定業かぎりのいのち成ともいま一どよみがへらせてたび給へとてせめかけ〳〵ゝいのりけり佛神感應し給ひけん天地にはかにしんどうして五びやう二ツにさつとわれ女御たちまちよみがへらせ君はいづくにましますぞ君は〳〵との給へば御門夢ともわきまへずのふこはまことかとおもはずしらずいだきつき是は〳〵とばかりにて三大臣清明にとりつ

ふもとなるかのひめ室にぞ着給ふ。

㊐傾城請狀

筑後椽竹本義太夫

もとより請狀あらばこそくわいちうより時宗がけ書しかけしふもんほんをとりいだし請狀となづけたからかにこそよみあげゝれけいせい奉公請狀之事一ツ此なみと申むすめながれの道に身をしづめけんきう四年みづのとのうし五月十五夜つきだし女郎いづくの空もさはりなきかげも丸どし十ねん切て金子百兩慥に手どりの身はかごの鳥おやはたこくの死めなりとも年の間くるはの外へ一あしにてもふみもかよはぬゑんごくはとふへうりてやりてやあねぢよろうのおきてそむかずつとめさせもが露ほども奉公にじよさいなくきやくをばふらず心にかけてまはるもん日を一日もおこたらせ申まじ第一にはまぶぐるいうきなほくろにいれぜうねするおとこあつてつとめそまつにいたすにおゐてはきのまゝながらのはしにおろされ又は水しの下女にせられて釜の火をたき湯殿の水くみかどはきせどはき庭の掃除のちりやあくたや紙くずのはのうらみとそんじ候まじ萬一此もの年のうちくるわを逃てはしり井の水に身をなげやいばにふし心中して死したりとも御なんはかけじ何方までも請人出てさばき髪あぶらもとゆいべにはなかみあしだせきだにいたるまでしきせの外は身のいれたてとり定也もしまたふかきゑんのあり戀ぞつもりてみな川さそふ水とてうけ出すあたい千金萬金なりともそれは主人の徳分たるべし若たれ人ぞながれの身によこ波かけてさまたげのさしでのいそのもがり舟おしていとまをとるならばいしやうのこらずはぎすゝ木の奉公かまひ給ふべし惣じてつとめの其間下戸成ともさけのみならひ文にはうそを書ならひ床にて人をやきならひねぶたくともいねぶらずなきとむなくともきぬ〴〵のわかれになかせ申べしきせうせいしに身の内のちをばおしませ申まじゆびはきりぞんかみも切ぞん申分候まじそのほかなにはのよしあしにつき後日のためけいせい奉公請狀のおもむきくだんのごとしと天もひゞけとよみにける。

㊇しのだ妻

土佐椽山本角太夫

爰に哀をとゞめしはあべのどうじが母上なりもとよりその身はちくしやうのくるしみふかき身の上に猶うきことのかさなりて思ひのたねとやなりやせんいとど心はむば玉のよるのふし戸におさなごが母やうらみてさこそなけかんふびんやとこがるゝ故か露も泪もとゞまらず行道更に見えわかず立わずらふぞ哀なり比しも今はあきなれば千草にすだく虫のこゑかれん〳〵かれんなる身ぞつらきうき言の葉にあき風のそよ〳〵〳〵とふくときはわさだおくてにたてはりしひかでなるこのおとたかくそれかとみればおしねもるかゞしのすがた見ゆるをももしかり人にてあるやらんとしどろもどろのあしもとにてたちよる笠をぬぎ捨てうへなる小袖のたもとをばかざすとみればたちまちにやかんと成てくるいしは何にたとゑんかたもなし。

㊈曾我粧坂

加賀椽宇治嘉太夫

けにうけがたき人の體をうけながらためしすくなき河竹のながれの身こそさだかならね思ふもおもはざりつるも夜ごとに替るうき枕つらきながらもつとめとて朝なゆふなのけはい坂むざんやなしやう〳〵は五郎にふかくあいおひの松はねごとにあらわれて姉女郎やほうばいのさがなき口にかけらるゝくつわがせいてあわせねばなを手もあしもなよ竹のとらにかくとぞしめしける元よりとらは戀しりの此身もおなじうさつらさせめて語りなぐさまんこよひやゆきて大磯のつとめすきにしのび出しやらり〳〵と露ふめばはなをもぬるゝぬれすがたけはい坂にぞつかれけるおりしも少將まが木に出よくぞ〳〵こなたへとつねのざしきにともないてわらは參りて申さんにお心ざしの程こそうれしけれさて御ぞんしのごとく五郎さまとわれとはいかふわけ有あいさつことに世になきお方なれば心のひがみもあるものとかまくらがたの大名にはふつ〳〵あひもいたさぬゆへ外のつとめのさはりとて内よりかたくせかるれどやり手かぶろの目をしのび言捨にてか文にてか日にひとたびはをとづれをせぬ事とてもさむ

らはず身にかへてでもいとおしくずいぶんたてゝさむらふに此四五日はうちたへて御出とても候はずふみをやりても返事なしさだめて是はみづからにもたせぶりにてあるらんとすこしにくふはありながら戀がゐんぐわで候へばなを〳〵ましくる床しさとほろとないてぞかたりけるとらもなみだをながしのふうらみも同じうらみ思ひも替らぬおもひなりみづからも十郎さまとはしんぞうのむかしよりなじみをかさねまいらせてゆび切かみきりいれほくろ人めもはぢもはゞからずいつぞやわだの大よせにもひとりの母に思ひかへたんと心をつくせしは申さぬとてもかくれなし此しんていのわれなるに此四五日は何とてかいなせのよすがも候はずされども世の中の男の心はかうしたもの別の事もあるまいによしやきづかいし給ふなきしやうもほぐに成ならば神やほとけもいらぬもののふうかれめにじつなしとはいづこのたれかいひそめし哀かし我々が心いきをおふたりにおしわけてみせたやないまにも來らせ給ひなばいざいひあわせてふらふぞや先さかづきとゆふぐれにたがいに思ひを語らるゝ。

⑩石川五右衛門

松本治太夫

うき世のせわに申なるひんのぬすみに戀のうた今石川が身の上にて思ひしられてはづかしやぜひにをよはず五右衛門も女房にはふかくかくし内よりはかごのかせぎにうちみせて彌五介かたらいたゞ貳人ほうひけ作りさまをかへ大小をぼつかふで長刀さけてあけくれとあべののつゝみでおいはぎして往來の者どもをきり取はぎとりあばるゝゆへそれより下道につけかはりさかひすみよしてんがぢや屋大坂迄のみちの用心よろしく成次第にあべ野はさみしくなる彌五介五右衛門しうじゆうは本意にあらぬ事なれども世渡るよすがなきゆへにつゝみのあとさきひつばさみ往來の人をぞ待にけるかゝる所にさかひよりのうをに共夜のあけ方に小ばなしゝてぞ通りける五右衛門あとさきとりがこみこりやまて此みちとをる者ならば酒手をおけとぞ申けるうをに聞て立とゞまりさて〳〵めいわくせんばん成かたぐ〳〵かなわれ〳〵は朝暮通魚賣尤錢があるならばしんぜてもおしからじしかれ共たゞいま大坂へ代なしにゆくなればあきざいふにて候なり殊になま物さがりてはそんがありはや〳〵とをして給はれといろいろわびて申せども盗人共きゝいれず大長刀をふりまはせばあゝゆるせとて魚かごすてあとをも見ずして逃にける五右衛門いかれる聲をあげあの大盗人めと打わらひ立かへりかご共を取ひろげなんでも是はよき仕合なんぢがかごには何に〳〵有先是はこのしろやゝあかど出にこのしろ取事は侍のふたゝび世に出んきつそうなりこりや是を見よ白魚彌五介聞てたゞもいられずしろうをかい五右衛門どつと打わらひ貴殿しう句の給ふな是はいかじやいかにも〳〵それはくちがとられて口おしかろほゝこれを見よびち〳〵はねるすゞきどのいげどりたりやこれ見給へ盗人の手ながたこやれそそうものあとさきしらずに物いふなわれ〳〵がさしあいぞと口に手をあて笑ひける彌五介申これおだんな此ふつゝか成うをはなにそれはふぐのよことび時分がちょかろふぞ急き歸りて料理せんなんでもけふはよい仕合尤と二人つれ彌五介〳〵ふぐ汁くはしよねぶかそろへてどぶそへて〳〵〳〵ねぶかそろへてどぶそへてとうたひつれ立歸りける。

⑪京土産

大森市郎太夫

はしらごよみの中だんにふねのりはじめかど出によしやゐらぶもおろかなり女心をなぐさめて思ひたつ日を吉日とついむくおきに牛若はひめぎみの手を引てやせのはにふを出給ふ加茂の川なみ音すごくじやかごは瀬々によこたはる水のよどみにかけみればいもが出ちや屋のあしすだれ窓をに風のそよ〳〵とくさおしわくる友きゞす子を思ひてやなく音成らんわれ〳〵も其かなしみは身にぞしるかけひが元の一つ庵あれ〳〵こそは逢坂山の名に高き哥聖のあとふりてわら屋の雨の音聞ばのきのてんてきびわのうみかすみわけてたちのぼるくもより上にみかみ山いざ立よつて見てゆかんかがみの山にかけとめてしらぬ名所をきゝ書にしるしおかなん水ぐきの岡のくまさゝわけのぼるふわのなかやゑすみあれてまきのいた屋にもれくる月の白く見えしはこれなるかたみのあふぎ手にふれてやさしとの子をしたひぬるうらみ女の俤はなのみの

こりてこけの下くさのもがみのさとわらべはやり哥やらこゑをあげこよひござらばひごなたさいてござれのばんにや小櫻のえだおろそのんやほ〳〵〳〵と聲おかしくもゆふぐれや日かゞほどへてはるゞ〳〵の道もおわりの國なれやとある所に着給ひむぐらいぶせき草むしろかりねの床に身をよせてやをらやすらひ給ひけり。

㊀子之日の松

都太夫一中

まくらもとらず帶とかず夢もむすばぬ春の夜を名たてがましやふたりねとにくやからすのつけわたるよひのしまだをそのまゝにおき手ぬぐひのたびすがたつえよわらづよすげのかさ打つれたちて行みちのしみづながるゝいけだがはあだとじつとの水すじはふたつにわれてかたせ川波よりなみにうつるせのてうず取手にかけみればねぬにほつるゝくろかみ〳〵しどけないやらわけもなやけせうせぬ身は我ながら見るもうるさく思へどもさすが女のひながたやそめてゑがいてくま取てきせばや君がためにとてさらすほそ布さら〳〵とさゞれめ波がよせて來てきしのおぐさにぬれかゝる夜晝わかぬちぎりぞやわれはまろねに夢もなくうしや出しまにゆく舟の名のみばかりとこがれきて聲おもしろくひやうしとり沖もしづかにからろの音がいざやでゝ見よさまじや〳〵ござらぬいそうつなみよあたゞしんきやしんき氣のどくや月に廿日は沖にすむつまをもつたも名ばかりと心ひとつにあきらめてゆけばうらみもあかねさす松のはごしにかけこほすはつうぐひすのなく音あどなやしほらしと見るにつけ聞につけいづれ思ひのあくた川ふかきねがいをかけまくも神のめぐみはおとこやままちらせ給へとふしおがみ月のおぼろのたそがれにかつらのさとに着給ふいろとなさけの世なりけりうき世なりけるこひぢやとなづむは此道ばかりなり。

㊁祝言高館

都太夫一中

だての入道秀平は君御下向のよし一重にうどんけとよろこびほうらいさんをからくみてたかだち御所へとのぼらるゝやがて御前に參入す第一番にはちやくしにしきどの太郎よりひらがばいくわにひめこまつの作り物だいにすへて奉る第二番にはほうらいさん其たけ壹丈はかりのかめのかうに千もとのまつをうへならべちいろの竹の影ふかくつばさならぶる友づるのとびめぐる其下にはるりのいさごをあたゝめて百味をとゝのへ出しければ心言葉におよばれず君ぎよかんあつて御さかづきをとりあげ給ひだての入道に下さるればありがたき次第とておしいたゞき三ごんほす時にべんけいがずんど立て一ひやうしをぞうたひけるそれかめは四靈の壹つにてよろづ世をなすなれば松はそのいろときはにて替らぬいろこそめでたけれあらめでたやとつらねければかたじけなき次第とてすなはちむさし殿へとはゞかり申是もおしいたゞき三ごんほすそのときいづみの三郎はつと立て一ひやうしつらねける我やどのいづみのさけはくすりにてくめどもつきずのめど替らぬおもしろやあらめでたやとつらねければそれより順にさかづきすこんかさなり秀平居たる所をすざつて君においとまごひ申あげせんしうらくをうたひつゝ我屋〳〵に歸らるゝ義經の御ゑせい千しうばんぜいめでたき共中〳〵申ばかりはなかりけれ。

古淨瑠璃之部　終

今

落葉集卷第七

古來中興當流はやり歌目錄

一　花見車　二　五條車
三　咲いたさくら　四　吉田小女郎
五　四季よほんぶし　六　しうとめ
七　鹽屋長次郎　八　茶つみ
九　替りさいもん　十　手杵
十一　さまがたより　十二　間の山念佛
十三　伊勢の櫛田　十四　おもやこそ
十五　替り榮閑神颪　十六　うらのせどの屋
十七　旅の日暮　十八　鬼がでる
十九　おもひ草　廿　庄屋の庄左
廿一　つく物揃　廿二　三瀨川
廿三　心中しゆん　廿四　はてくせ揃
廿五　心中江戸三界　廿六　しもの闘ぶし
廿七　わすれがたき　廿八　つらい〳〵
廿九　お馬屋闘助　卅　かだの粟島
卅一　さまは天人　卅二　つんと坊
卅三　蔦の葉　卅四　酒はさかや
卅五　おもてみやれ　卅六　いかな客衆
卅七　唐崎心中　卅八　むこ川
卅九　替りかんふうらん　四十　沖の石
四十一　さうだんべい　四十二　五尺手拭
四十三　大坂茶屋名寄　四十四　法性寺入道
四十五　お葛籠馬　四十六　姫小松

㈠花見車

本調子花見車を引きやるはよいが〳〵、御所の女郎衆の袖引くな、やれ袖引くな〳〵、御所の女郎衆の袖ひくな。

㈡五條車

本調子五條あたりを車が通る、のほんえ、誰そと夕顔に、さんさ花車、のほんえ、花車くるまのほんのほんえ

㈢咲いた櫻

本調子咲いた櫻になぜ駒繋ぐ、のほんえ、駒が勇めば、のほほん〳〵ほんほのんいよ〳〵花が散る〳〵。

㈣吉田小女郎

本調子吉田通れば二階からちよいと招く、しかも鹿子のずんど振袖が、なんきみちよいとしよ。

㈤四季よほん節

本調子誘ふ嵐に散り行く花の、よほん〳〵〳〵え、よほん〳〵え、せめて暫しは香ばかり袖には殘れ、よほん〳〵〳〵え、よほん〳〵え。

〽軒の橘枕にかゝる、よほん〳〵〳〵え、よほん〳〵え小夜の寢覺に言問ふ山時鳥、よほん〳〵〳〵え、よほん〳〵え。

〽ところ闘屋の月さへつらや、よほん〳〵〳〵え、よほん〳〵え、鹿の鳴く音に、いよしも哀を添ふる、よほん〳〵〳〵え、よほん〳〵え。

〽雪にならはで思ひは積る、よほん〳〵〳〵え、よほん〳〵え、消ゆる思ひになどかは解けぬは君の、よほん〳〵〳〵え、よほん〳〵え。

㈥姑

二上り おれが姑はきぶいぞ〳〵、あの松山の葉をよめば、その松山の葉をよめば、そなたは天なる星をよめ、姑踊一踊。

㈦鹽屋長次郎

二上り 鹽屋長次郎はこいさばにのせてのうさ、おきにやどん〳〵どんどろめけば、夜の目もよねられず、あさせうがいな。

㈧茶摘

二上り 雲の御來迎はさご右衞門が拜むえ、其の子無事郎ともあじことはするなえ、後はさご右衞門がみせかはりえ。

〽隣藪からによき〳〵出たは、こぞの竹の子のこの〳〵ま竹、こちのとゆ竹に見ておいた、しよがいな、やれ見ておいた、こちのとゆ竹に見ておいた、しよがいな、踊ろとまゝよ、跳ねぎろとまゝよ、いとし殿御とこちや寢たがよい、袖を敷寢の新枕。

㊈替祭文

本調子　祓ひ清め奉るの、色は根本太夫職、扨ては天職姿なり、先んづ江口の始めより、君といふ字を書き初めて、世々の末には娼とよみかへ、僭上大臣閨の樞にひき箍り、常闇の夜店となりけるを、八百萬の末社達、おろせが宿にてこれを歎き、神樂を以て文作袖を翻せば、又常闇のけも晴れて、燈光り輝きて、これより伯里繁榮し、末の世までも不退轉、寂光淨土の臺とかや。

〽思ひ切れとや、きりやまの朝霧こめて、やつきり〳〵〳〵八重桐や、小原高倉たまかしは式部奥州小倉山背山都路唐崎や、くれはやしほの三千歳、うらの揚卷つりはせで、いその勝山わけのぼる、麓の野邊の萩原が、敷きとねし夜のねたましく、荻の上風吹きはらひ、あくるわびしき葛城や、高間高崎のせゞ川あふえ、大きし大淀や、此の大國の君たちに、替らで通ふ人々に、來るまじきはあゝ苦しの、災難が祟をなすとも、今よりは諸客は成就、揚屋は滿足全盛と、敬つてぞ申しける。

㊉手杵

二上り　市べ頭に弟は二人、餅の米がな、やれ小豆がな、山に手杵を見て置いた、しよがいな、やれ見て置いた、山に手杵を見て置いた、しよがいな。

㊉一さまが便り

三下り　あらいたはしや、百合若さまは〳〵、知らぬ他國に棄てられて、橋の欄干に腰打ちかけて〳〵、そより〳〵と吹き來る風は、樣が便りか、なつかしや〳〵。

〽鳩が豆喰ふ八兵衞どの、鳩が〳〵、お花出ておへ、竿打ちかたけ、夜やり日やりに出ておやれ〳〵、ちやつと出ておやれ、夜やり日やりに出ておやれ。

㊉二間之山念佛

二上り　憂き事を思へばいとゞ胸の火の、消え易き身と言ひながら、輪廻の絆に繫がれて、南無阿彌陀〳〵〳〵〳〵〽夢のうちなる夢の世を、悟らぬ事のはかなさよ、南無阿彌陀〳〵〳〵、野邊より彼方の伴とては、胎藏界の曼陀羅と、血脈一つに數珠一連、南無阿彌陀〳〵〳〵〳〵

㊉三伊勢之櫛田

二上り　伊勢の櫛田の眞中程で、深き思ひのやれ紫帽子、ほんにくどくかそりや眞實か、五智の如來の惠もあろと戀の重荷を乘掛馬に、離れがたなき我が思ひ。

㊉四思やこそ

二上り　思やこそ來れ思はで來よか、千夜萬夜は寢てこそよけれ、かけて良いのは小竿に小袖、かけて惡いは薄情〳〵。

〽君を待つ夜はのほんほ、ほんに〳〵さ、西も東も南もいやよ、ほんにさ、とかく待つ夜はきたがよい、のほんほほんにほんにさ。

㊉五替榮閑神おろし

本調子　飾らるゝ、百色の道具を竝べければ、たゞしまひものの如くなり、五通の手形の五本立て竝べ、元よりせいすけ、三國に隱れなき神變奇異の智慧者なれば、旦那の椽にさしあがつて、まづ泣事をぞ申しける、金子三兩〳〵貸し給へ、上へ上るも路銀なければ、てんと白癩、ごだうのつまりは下界に落つる、伊勢に身代固めたれども、雨に降られ風に吹かれ、月待日待ちに、あまつさへ大にちにあひ、淺ましや火吹く力もあらばこそ、大屋の屋賃もなさゞれば、怒り切つて立てよ〳〵と、頭下しに叱られて、男ならば正八幡大菩薩、待つぞやしばしおなしあれ、伏見のごぼうはいつものごとく、とうに濟まさばなにかせん、たてたは此の月申の日よ、車は少し御免なれ、眞實恩になすならば、錢は一文なけれども、天王寺で醬油造らせ、炭賣しても大事もない、四國の米は讃岐で一

石同じく一石三斗なり、筑紫の彦三はいつものごとく大屋して、奇特にめうとは方便なり、丹後に成相きれいに門立て、大勢葬すと承る。日吉は山王廿一じやが、親は白髭左跛でこするな男、父をふんぬくぞんめいなり、みやうぎ町には願人坊でばではらきる、湯殿のゆかたは見ぬまに失せたが、だいつが取つた、手元がみたい、見付けたぞ、おひくる時は一厘にけ二厘にけ、第三にあたつては、奴に頭を切りわられ、惣じて身の創は一萬三千餘創なり、たとへ定業かぎりの質物なりとも、今一度請けさせてたび給へと、せりかけ〳〵祈りけり、質屋も納受したりけん、五兩二つにさつとわれ、二兩二分にぞ成りにけり、三人の泥坊ども、左手右手より取付て、お丶騙つたり〳〵、かほどの騙りは漢家本朝に、又と二人はあるまいとて、金貸す者こそなかりけり。

㊇裏の背戸のや

裏の背戸のやで、ぎしり〳〵とぎしめく程に、なんぢやと思うて、走りでて見れば、なんでもしやり〳〵、おんぢやれめされ、さしまさぬか、夏帷子のぬをおしやり〳〵さらす、おんぢやれめされ、さしまさぬか。

㊆旅の日暮

二上り言うて歎くは愚かでござる、言はで思ふはなう身を焦すといの、旅は日暮れが物憂いものよ、忘れた戀を又思出す。

㊈鬼が出る

木調子送り歸せば比叡の山風身にしみて、萊種の花もいろ〳〵。

鬼が出る跡より子鬼がいくらともなく、によき〳〵とある所につき給ふ。

㊉思ひ草

木調子長い刀をほしや〳〵とさして、逢はれぬ中を文にて通ふ、いつそ此の身は揉みくしやにして、死なば野中の身は朝露と、消えてはかなく成りゆくものを、何が殘りて罪とは成るぞ〳〵。

㊉庄屋の庄左

二上りおとんとん〳〵とろさくやれ、なかそめてこんにもせい、仲さへよくば鍋買うて所帶しよ、それがそこへいてることか、庄屋の庄三どの、はつちや愧かしや。

㊉一つく物揃

木調子籬がもとに立ち出でて、來ぬ人を〳〵、待つ身の怨み言はんため、やくや裳裾をかいとりて、土手をつく〳〵見渡せば、土手の番太は棒をつく、お寺の法師は鐘をつく、こちの馴染は嘘をつく、さて又我等は數々の、作りし罪の恐ろしや、後の世頼む南無阿彌陀佛〳〵、往いて歸るさに、行きやあたり廻りて胸をつく。

㊉二瀬川

木調子西は堀川。中小川沅湘日夜東に、流るゝ水の賀茂川や、わらはがための三瀬川、けに〳〵はしも三本木、比は卯月といふしでの、ほんでんすごく立てならに、小家の燈火消えのこる、影をたよりてふみ迷ふ、かしこ爰よと定めえぬ、いつそ二人が中の島、かくれゆく身今更に、忘れぬ顔を今一度、見つゝ見られぬ薄月夜、しばし入間の水鏡、川を隔てゝほの聞ゆ、撥もしどろに引く三味線の、てうし〳〵といふ聲きけば、飲み白けたる風情

して、夜も早いたく更けぬらん、わけと鳴きゆく時鳥、誠冥途の鳥ならば、地獄の有様語れ聞こ、聞くともいかで變らめや、今宵限りの憂き契、ひじきものには薄羽織はおらでしくも短さよ三下り〻どしおり帯の長枕、起きて見さんせな、後の世も逢をに。今しばしぞや又寢のとこ〻〻にも濡るゝは袖、東が白む、白むか鳥も告げわたる翼を交さんためしにや、褄と〻を引き結び、ともに假寢の夢姿。

㊂心中しゆん

本調子まゝにならぬは浮世ぢやものと、思ひまはせど又捨てられぬ、いつそ露とはきはめたけれど、後で其方が怨みんものと、思ひはかりて語るといへば、しゆんは聞きつゝよう言はんした、わしも氣の毒語るにつけて、にくい平ざが横しま戀慕、それさへあるに近々に、西國方へやらんとは、親のまゝなる悲しさは、これが浮世の習ひとや、とてもこなさん死なんす身なら、わしはかうぢやと呼きければ、吉左首肯きさあらぬ體に、暇乞して立ち別れゆく、夜は何時ぞ、八つの過ぎかや七つの頭、六つの巷も三途の川も、死出の旅立つかいどり姿、心細くも後見かへりて、なうよしさまか、待ちかねさんしよ、首尾をつくろひ此の脇差を、盗みまするに暇どりました、いざや最期の水盃を、一つ二つに早ふしごやの、回向の鐘は南無阿彌陀、南無阿彌陀佛と消えてあしたは卯月の五日、せみの小川に名を流す、思ひと戀とえ。

㊃はてくせ揃

本調子粋な在所の癖聞けば、まづ土手町はけしからぬ、雨の夕は面白や、また氣をかへて島原と、行けば禿がはしたなく、流行詞の口合に、あゝけたゝまし祇園町へと立ち歸り、もんじが門で誰やらが、氣でせい〻と石かけに、はやる口合まあさうよ、それは一升がなんほする、はてさう言やるが嫌ぢやいの。

㊄心中江戸三界

二上リト本調子　江戸へやりつゝ鹽ふませたら、末がよかろと皆言

ひ合せ、既に談合極りければ、そちに逢ふものも今日明日ばかり、まめで勤みやや、わづらやんなや、暇乞ぢやと涙で語る、ふさは聞くよりこは何事ぞ、私は勤めを明日やめうとも、まゝな身なれどこなさんに、逢ふが嬉しゆてうか〻〻と、勤めまするに胴慾な、江戸三界へ行かんして、いつ戻らんす事ぢややら、山も見えざる假初につい馴れなじみ、わしを扨て、どうせ女房に持ちやさんすまい、要らぬ者ぢやと思へども、どうした事の縁ぢややら、忘るゝ暇もないわいな、それを振棄て行かうとはやりやしませんぞ、手にかけて殺しておいて行かんせな、放ちはやらじと泣きければ、男しばらく泪を流し、馴染もないに嬉しやな、なんのあが身に別れておれが、何を頼みに行かうぞいの、其方振棄て行く身でもなし、今宵爰にていざ死なんとて、つひにふさをば刺殺しつゝともに其の身もな野邊の露。

㊅下の關節

本調子思案橋とん〻〻越えてな、お宿にござんす〻〻か、そこせい〻〻、三里へだてし波の上、色と情を小舟に乗せて、來るは誰ゆゑ、そさまゆゑ。〻北山ばら〻〻ば、時雨ながら笠持て來い、降つてきたそこせい〻〻、雨は降るとも、濡るゝとも、只恐ろしきかざし風、とかういふ間に晴れてゆく。〻浅黄はざつとした、いやよな、望みがござんす〻〻るそこせい〻〻　小雀山雀四十雀　から松たけの幾千代も戀にうき茶の色に。〻一夜はちよつとの間これ靡けな、あんまり〻〻胴慾なそこせい〻〻、さりとはつらき御心、物の報は物ごとに小野の小町の身は市原のしやれすがた、あなめあなめと吹く風に、熱のさめたる末を見よ。

㊆忘れがたき

二上リ忘れがたきは彼人さまの、過ぎし便りにこされし文を、たとひ三千年逢はずとままよ、親と〻〻の結びし縁を、なんの解かりよう其の下紐を、俺が解かいで解く者はおんぢやるまい、あとの玄猪にこされし文は、いつ〻〻

よりもかはいらしや、なう〳〵えいこのさんさ、富士の裾野にな一本薄、やれ書かれしは、いつか我が戀ほにいでて亂れ合はうといふ事か、えいこのさんさ、岩の狹間になやれ溜り水、獨りすませといふ事か、君と締め合て寢る手枕は、長門印籠ぢやなけれども、具合がよかろと褒められた、褒めたも道理今の世に又とあるまい御女郎。

㊇つらい〳〵

二上り つらい〳〵と思ひはすれど、顏が見たさにあこがれ來たを、それと知らぬえ、よしやよそに移ろふ濡衣なれど、色深くも思ひ染めたえ。

㊈御馬屋關介

二上り 伊達を好みやる、御馬屋の關助、くるやら馬も、馬も嘶き轡も鳴るに、次郎よ太郎よ、どこに〳〵、さて馬どどんどつゝんとつ繋いだ、お寺の寺の柿の木に、づんぼろぼ〳〵、とゝんとつゝんと繋いだ。

㊉加太の粟島

二上り 加太の粟島を、えい〳〵えい〳〵えい〳〵な、えい〳〵えい〳〵な、何と言うて又拜むえ、君と寢釋迦を、えい〳〵えい〳〵えい〳〵な、言うて又拜むよえ、抱いたら締めたらさ、猶よかろえ。

㊀さまは天人

二上り さまは天人、それ〳〵とんとろり少女の姿、雲の通路ちらと見た、とんとろり少女の姿、雲の通路ちらと見た、とんとろり。

㊁つんと坊

本調子 つんとほがさ〳〵え、ちやのお前の反橋を、あんまいぎやたら〳〵のほんほほあゝつんとほがさ、いやおりやづんど好いたよさ。

㊂蔦の葉

三下り 落ちよ〳〵と落しておいて、壁に蔦の葉のき心、蔦の葉〳〵壁に〳〵蔦の葉のき心。

㊃酒は酒屋

二上り 酒は酒屋に茶は茶屋に、女郎は木辻の鳴川に〽泣いそな泣いそ五月にや戻る、遲て六月中頃に。

㊄おもて見やれ

三下り おもて見やれの、せけんまいよものか、忍びながよ妻のよ、ふたあゝ心よづまのよ忍び〳〵ながよ妻のよふた心。
五月雨ほど戀ひしのばれて、今は秋田の落し水〳〵

㊅いかな客衆

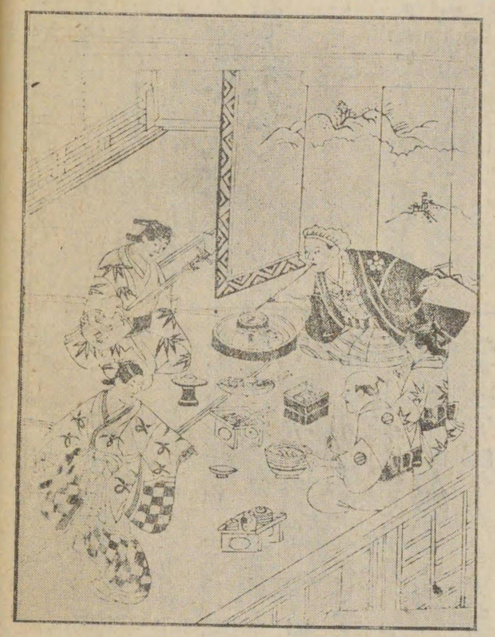
本調子 いかな客衆よりも、髭の角さまおいとし、お歸りの後を見れば、鬢附一貝鼻毛拔、小栗の草子を置かれた、これが花かや但し今宵の勤めか、物日〳〵の口ふさげ、世にこくに忙しらしいは晦日毎の夕暮、白いお手にて出だされた、何よ、お錢を二百出だされた。

㊆辛崎心中

二上り 此の世の名殘り夜も名殘、死ににに行く身を譬ふれば、仇しが原の道の霜、一足づつに消えて行く、夢の夢こそあはれなれ、あれ數ふれば曉の、七つの時が六つ鳴りて、殘る一つは今生の、鐘の響きの聞き納め、寂滅爲樂と響くなり、鐘ばかりかは草も木も、空も名殘と見あぐれば、北斗は冴えて影映る、星の妹背の天の川、渡せる橋を鵲の橋と契りていつまでも、我と其方は女夫星、必ず添ふと縋りより、二人が中に降る泪、川の水嵩も增るべし、道行く人の聲高く、京や大阪の心中の、言の葉草のとりゞ〳〵を、聞くに心もくれは鳥、あやなや昨日今日までも、よそに言ひしが明日よりは、我も噂の數に入り、世に諺はれん、歌はゞ歌へ、歌ふも舞ふも法の聲、實に思へども歎けども、身も世も思ふまゝならず、いつを今日とて今日までも、心ののびし夜半もなく、思ひの色につらかりしに、どうした事の緣ぢややら、忘るゝ暇

もないわいの、放ちはやらじと泣きゐたり、歌も多きにあの歌を、歌ふはたそや聞くは我、過ぎにし人も我々も一つ思ひと縋りつき、月の影さへとゞまらで、心も夏の夜のならひ、命を追はゆる雞のこゑ、明けなばつらや辛崎の、濱で死なんと手を引て、志賀のさゞ波さよ烏、明日は我が身を餌食ぞや、誠に今年はこなさんも廿五歳の厄の年、わしも十九の厄なれば、思ひあうたる厄だたり縁の深さのしるしかや、

神や佛にかけおきし、現世の願を今こゝで、未來へ回向し後の世も、猶し一つ蓮ぞと、つまぐる數珠の百八に、涙の玉の數添ひて、盡きせぬあはれ盡きる道、心も空も影くらく、波打寄する辛崎の、松の木蔭に着き給ふ。



㊇むこ川

二上り むこ川に住居する茶吉殿わいの、年が十五なら、心は月の眞中よさ〳〵さ、年が〳〵十五なら、心は月の眞中よさ。

㊉かんふうらん替り

二上り 大酒亂、冷酒飲んでみや、長酒飲みしらけも一つ飲んでみや、たんたらふく二日醉、後悔藥に金圍。

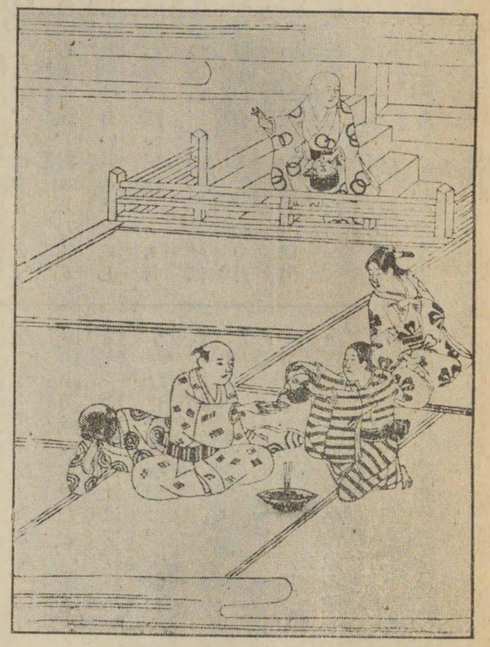
〽やんしううすむいろまりやんけんたにこたまさんちゐまさんな、ばらりと酒の燗、おなじこと梅の花、とうらいきうご五うりうす

う。

〽鹿背山薄雲江口白菊坂田花崎唐崎ぢや、若松小紫でん〳〵り几帳錦木琴浦玉の井伊達みよし。

㊃沖の石

本調子 沖の石とは愚の沙汰よ、乾く間もなき我が涙、間もなきな、間もなき乾く、乾く間もなき我が涙。



㊃五尺手拭

本調 五尺いよこの手拭、五尺手拭中染めて、

〽おれにいよこのくりよより、おれにくりよより宿に置け。

〽宿がいよこのよければ、宿がよければ名も立たぬ。

〽佐渡といよこの越後は、佐渡と越後は筋向ひ。

〽橋をいよこのかきよやれ、橋をかきよやれ船橋を、橋のいよこの下には、橋の下には鵜の鳥が。

小鮒いよこのくはへて、小鮒くはへてぶりしやりと。

㊃大坂茶屋名寄

二上り えい〳〵えい〳〵えい〳〵、繋がぬ船は波にゆられ

㊃さうだんべい

二上り そなた待つ夜の油火を、細く長かれとろ〳〵と、さうだんべい、至極と聞きわけた。

〽内裏女郎衆は水の月、手にも取られず見たばかり、さうだんべい、至極と聞きわけた。

て身は捨小舟、寄邊定めぬ港屋の、二階座敷で引く三味線の、音はてんつるく、天滿屋たゞ屋、水の流れに吉野屋見れば、いつも格子に花橘屋、ゆかり求めてお名をば菊屋、それを尋ねて北島屋、文の數讀むかみたや紙屋尼崎屋で身は濡衣、色が黑けりや大黑屋ぢやと、人が名立つりや少しはわくや、さきに夷屋あしや但馬屋で、焦れ扇屋あの姫路屋で、互ひちんく交ひの、お手打交ひのお手枕、じつかはす枕に契をこめて、かはすまいとて起請まで書いて、のぼりつめたる坂本屋、誰が思ひもあの太子屋の、花の振袖年や若松屋、つらい勤めは身にしみ〴〵と、流行小歌のその一ふしも、聞いてなりとも月日を松屋、額の小三はな綿屋のつとめ、戀がゞざれば勤めのさはり、内のかゝたやな目をむきだして、叱り升屋と言うてたもれ、えいこのこいや、思ひ沈みし身は河内屋の、浮名かき消す住吉屋、波の枕に鹿島屋たてゝ、京屋伏見屋讃岐屋までも、くるりくるりと賣られてめぐる、便りござらばあの三笠屋で、一つ參れとな手にする。たさ。

㊃法性寺の入道

二上り法性寺の入道前の關白太政大臣、うななぜうせをつた、やれ叩き出されるな。

〽祇園町の眞中が、海なら川ならよござんしよ、魚をつる篠竹の、やれ樣を釣りまつしよ。

〽猿丸太夫奥山に紅葉踏みわけ鳴く鹿の、うななぜ鳴きをつた、叩き出されるな。

關の小刀銘はなけねど、綾もたちます錦もたちます、金襴緞子は申すに及ばず、瓜も割ります西瓜も割ります、うななぜ割りをつた、やれたゝきだされるな。

㊄お葛籠馬

二上り扨ても見事なお葛籠馬よ、下にや氈敷き唐縞の蒲團、蒲團ばりしてな、小性衆を乘せて、其方上りか、おりや今下る、文を遣ろにも言傳しよにも、此所は箱根のな山中なれば、筆にやこと缺く、硯墨は持たぬ、もしも水口なお宿りならば、札の辻から四五間めの茶屋で、馬も息災其身も無事に、やがて上ろと言うてたもれ、えいこのさんさ。

㊅姫小松

二上りやらく目出たやく、天下泰平國土安穩、治まる御代は天長地久、千歳樂萬歳樂、民も豊かに、住吉樣の岸の姫松、しつてんくに大悲の風吹かば、地には黄金の花が咲こ、ありややいよしも、めでたいな。

甲元祿十七歳三月吉日

井筒屋　庄兵衛板行
同　萬木治兵衛

古今はやり歌卷第七終

此頃世に翫び草の蔓りし松の葉は、遠き昔の本手より、長歌端手の卷々、さばかりの好士により、此道に志ありて、市川の流を汲める吉之丞が糸筋を繼ぎぬる杵屋勘五郎により〳〵聞傳へしかば、夏引のあさからぬ幸と思ひとりて、絶えず學びける折節かの松の葉に拾ひ洩しぬる言の葉を書き集めぬれば、落葉集とは名付けぬ、常盤なるまさきのかづら、長く散り失せぬ世々のためしにもひかれなば、うき身の悦び何に如くべくやと、自ら跋する事になりぬ。

扇德　敬白

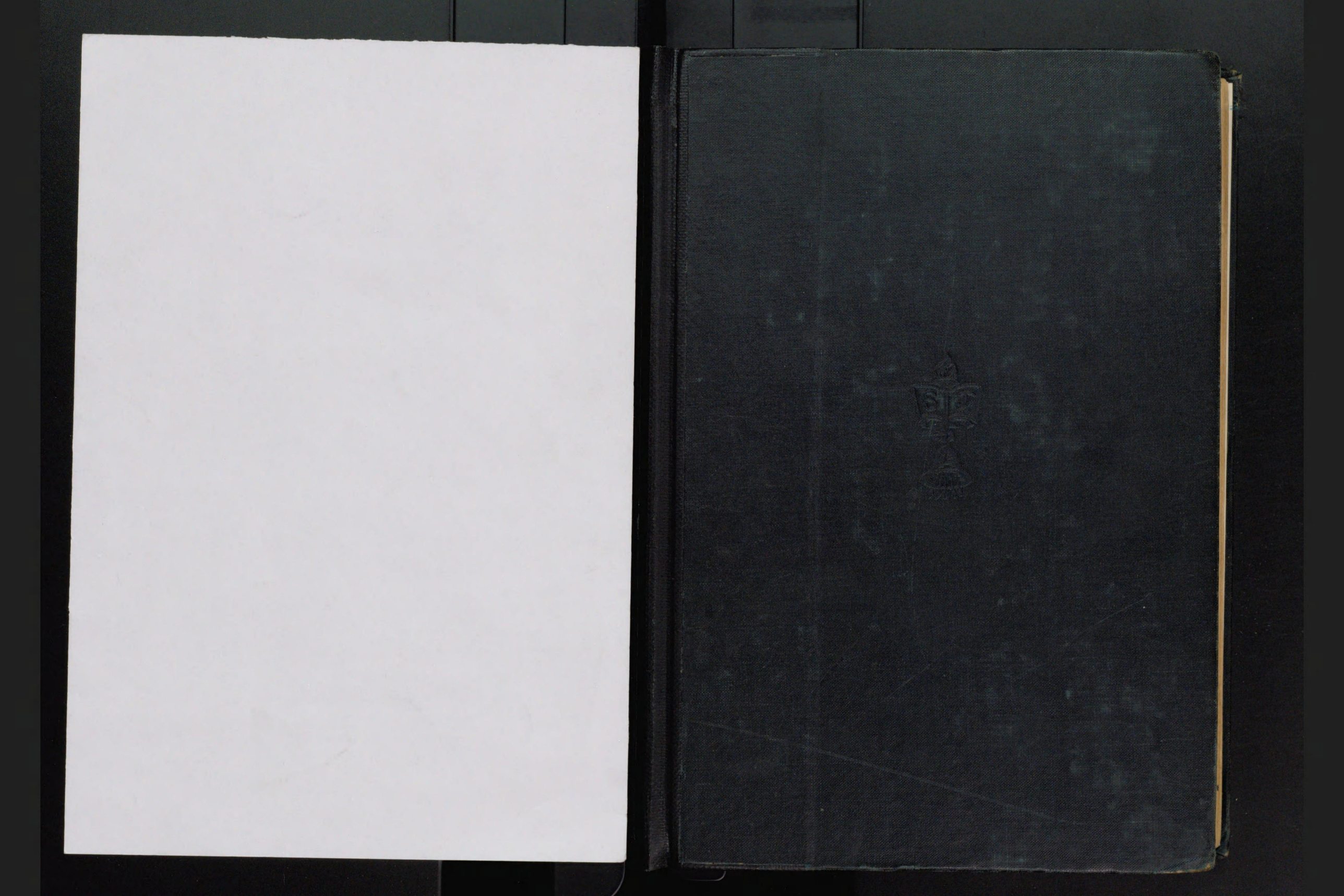
昭和三年四月二十日印刷
昭和三年四月二十五日發行

（非賣品）

日本歌謠集成
（6）

著作者　高野辰之
東京市外代々木中山谷一六七
發行者　神田豐穗
東京市麴町區内山下町一ノ一
印刷者　關根慶寛
東京市牛込區早稲田鶴巻町三六二

印刷所
早稲田印刷株式會社

發行所
東京市麴町區内山下町一ノ一
振替東京二四八六一
春秋社
電話銀座五六五二・五六五三

I 2B - 33